

青年期における「家族イメージ」の様相とその表現プロセスに関する検討

—日中両国の青年を対象に—

立教大学大学院

現代心理学研究科臨床心理学専攻博士課程後期課程

胡 実

目 次

I 序論	
1. 青年期と家族	1
2. 心理臨床における「イメージ」の役割	2
3. 本研究の立場	4
4. 本研究の研究方法	6
5. 本研究の目的	10
II 研究1 青年が認知した家族成員の勢力が家族認識に及ぼす影響について	
1. 目的	12
2. 方法	14
3. 結果	16
4. 考察	22
5. 今後の課題	26
III 研究2 心理的環境としての家族に対する認識について	
1. 目的	27
2. 方法	28
3. 結果	30
4. 考察	37
5. 今後の課題	39
IV 研究3 家族イメージの構造と特性に関する日中比較	
1. 目的	41
2. 方法	43
3. 結果	45
4. 考察	51
5. 今後の課題	55

V 研究4 青年期の家族に対する認識と体験プロセスに関する検討	
1. 目的	56
2. 方法	60
3. 各事例	62
① 日本人作成者 A	63
② 日本人作成者 B	68
③ 日本人作成者 C	73
④ 日本人作成者 D	79
⑤ 日本人作成者 E	85
⑥ 日本人作成者 F	90
⑦ 日本人作成者 G	96
⑧ 日本人作成者 H	103
⑨ 中国人作成者ア	108
⑩ 中国人作成者イ	113
⑪ 中国人作成者ウ	118
⑫ 中国人作成者エ	124
4. 結果	129
5. 考察	138
6. 今後の課題	143
VI 総合考察	145
VII 謝辞	157
VIII 引用文献	158
IX 附録	165

I 序論

家族は子どもが生まれて初めて接する集団である。この家族という集団は夫婦とその血縁関係者を中心に構成され、共同生活を行っている。個人によって程度は異なるが、家族から影響を受けない人はいないと言えよう。当然、「家族」というのはアジア文化圏においても重要なものである。日本の文化における「家族」について、河合は次のように論じている。すなわち、近世の日本人が自分の拠り所を「イエ」に求めてきた。「イエ」の中では「母」という超個人的存在が「イエ」という集団の情緒的一体感を担うものとして、非常に大切であった。個々の家族成員は家長の命に服し、自分の欲望や意志を制限することが多いが、「母」という存在によって「イエ」という集団のなかに満足していきっていた。ところが、第二次世界大戦の後、所謂家族の家父長制における「母」という存在が薄まってしまい、日本の「イエ」制度は崩壊しはじめている。さらに、日本における戦後五十年の急激な経済的発展のため、核家族化が進み、それがまた「イエ」の崩壊に拍車をかけた(河合, 2010)。また、中国の文化においても「家族」は非常に重要とされている。中国の文化には儒教の影響が深く根付いている。儒教において、「家族」はきわめて重要な概念であり、人間社会の基本的な単位とみなされている。ある意味で儒教は家族あるいは家を核として成立した宗教、つまり「家の宗教」と言える(芦名, 2003)。ただ、近代の中国では家族の顕著な崩壊は生じていないものの、1979年から実施された一人っ子政策の影響で、伝統的な大家族が核家族へと急激に変貌しつつある。

1. 青年期と家族

こうした背景を念頭に置くと、日中両国の心理臨床の実践においても「家族」というものが非常に重要な要素になっていると言えよう。そして、クライアントが青年である場合、とくにそうである。青年期は児童期と成人期の間の時期と位置付けられている。青年期はその開始の指標を、思春期発育と言われる身体的・性的成熟とそれに伴う心理的变化の現れに置くことが多いが、青年期の後期の指標を明確にすることは困難である(加藤, 1997; 伊藤, 2006)。加藤(1997)は青年期の後期を25~26歳としているが、伊藤(2006)によれば、「成人」という概念自体があいまいになりつつある今、30歳前後、つまり成人前期までを青年期に含める見方が主流になってきたと述べている。いずれにせよ、青年期は

幼児期や児童期に比べて時間的に長く、大きな質的な変容が起きる可能性はすくなくない。そのため、笠原(1976)は青年期をさらに細分化して捉える必要があると主張している。青年期の細分化の仕方については様々な議論があるが、青年期の後期に当たる時期に関しては白井が提案したヤングアダルト期(young adulthood)が代表的なものである。

ヤングアダルト期は親から経済的に自立するまでの 22～30 歳の間を指しており、後青年期あるいは脱青年期(post-adolescence)とも呼ばれ、成人期前期(early adulthood)の一部である(白井, 2006)。また、親への依存から抜け出し、自分の生き方を自分で選択し、その決定に責任をもっていくという自立心、社会人としての一人前意識の獲得が精神的・社会的自立の1つの指標として捉えるが、このような心理的成熟が非常に主観的で捉えがたいため、経済的自立や結婚という外的な条件を指標とすることが多い(加藤, 1997 ; 伊藤, 2006)。そのため、とりわけ親からの経済的な自立を控えるヤングアダルト期の青年は親からの心理的な自立、つまり Hollingworth (1928)のいう「心理的離乳」が前提になっており、これと最も切実に直面する時期でもある。親をはじめとする家族は青年にとって不可欠なサテライト(基地)としての役割を担ってきており、真の意味での心理・社会的な自立を実現させるために、青年が自分と家族との関係を見直す必要が生じてくる。現在、就職した後も親に依存しようとする、日本でいう「パラサイト・シングル」、中国でいう「啃老族」が増加する中、ヤングアダルト期の青年たちが「家族」というものについてどうとらえているか、言い換えると、彼らが「家族」というものをどのようにイメージしているかについて検討することも、青年期における自立と成長の過程を捉えていく上で重要な意味があると考えられる。

2. 心理臨床における「イメージ」の果たす役割

イメージは心理学において、極めて大切なものである(河合, 1991)。イメージは、一般心理学において、思考・記憶・学習といった心理的活動を理解する際に重要な役割を果たしている。そして、こうした心理的活動の根底には個人の主観的な感情や情動、認知などと深く結びついたイメージの世界が存在する。このようなイメージの世界こそが、人々が現実を心の中でどのようにとらえ、どのように認識しているかについて理解するための貴重な手がかりを示す。したがって、個々人の心の世界を理解することを目指す心理臨床の領域でもイメ

ーは重要視されているのである。

このように「イメージ」という言葉は心理学の中でも広い範囲にわたって使われているが、すべての場面において同じことを意味するわけではない。外界の現実をそのまま反映した視覚を指す場合もあれば、個人に特有の認知様式や複雑な感情体験、意味付け等を伴った固有の世界を意味する場合もある。河合(1971)は「外界—内界」という軸を提示しイメージに対する認識の両極端を説明している。つまり、イメージに対する認識の一極は、一般心理学のように、記憶像など知覚上は目の前にない対象を視覚的に思い浮かべた像というような、「外界の模像」としてイメージを認識する場合である。これに対して、もう一極は臨床心理学のように、イメージを「無意識的空想の活動に基づくもの」(Jung, 1923)、つまり「内界の表現」として捉える場合である。また、水島(2003)は、イメージを「準外的—内的」「知的—感情的」「受動的—能動的」の3つの軸を設定することで、イメージをより詳細に分類し位置づけることを試みている。水島によれば、認知心理学が扱っているイメージは「外的刺激と知覚」に基づいている「準外的」「知的」「能動的」的なイメージに分類される。そして、心理臨床場面が扱っているイメージは、「本来的に内的起源性」をもち、「内的な吟味」の比重が高い「内的」「感情的」イメージと位置づけられるという。

このように、心理臨床で扱われるイメージには、人の主観や感情などといった独特な特徴が含まれており、他の分野で扱われるイメージとは異なる点をもつ。つまり、クライアントに映し出されたある対象のイメージはもはやその対象の単なる「写し」ではなく、クライアントの心の世界で再構成された個人的な意味を含んだ新たなものである。心理臨床で扱われるイメージのこのような特徴について、河合(1971)は、「外界の模像」としてイメージを認識する場合、常に外的な「客観的事実」としてイメージを見るため、実験心理学的な研究方法が可能となってくるが、個人の意識や主観を重視し、とくに無意識の心的過程を検討する際にイメージを内的現実として見ようとする臨床心理学においてはこのような客観性を重視する実験的な方法は不可能である、と述べている。

さらに、藤原(2003)は、心理臨床場面で扱われるイメージの独自性をより明確にするため、「臨床イメージ」という用語を提案し、その言葉を用いることの必然性について、これが「心理臨床ないし心理臨床学の固有性と専門性に深く関係している」からであると主張している。片畑(2005)によると、藤原(2003)の言う「臨床イメージ」の「臨床」は「冠としての「臨床」ではなく、イメージを

「個人における主観的で個別的な心の現象ないし心理的事実」と捉え、心理臨床(学)における観点の独自性を示すために用いられていると指摘している。さらに、片畑(2005)は、「臨床イメージ」という言葉を用いる理由を、心理臨床(学)の立場でイメージを考える際には、「外界の模像」のように外的・客観的に規定されるものから考えるのではなく、他でもないその個人がそこでどのような体験をしているのか、という内的・主観的な観点から捉えることに重要な意味を置いているためだとしている。

3. 本研究の立場

クライアントの心に対する理解なしには成立しえない心理臨床では、クライアントが何をどのように感じ、どう考えているかを把握しようとする際に、クライアントの心の深層に流れているイメージに目を向け、それを丹念に汲み上げていく作業は重要である。しかしながら、イメージは人の心の世界を理解するのに重要な手がかりになりえるが、イメージは全てが個人の内的体験であり、個人が何らかの形で自分のイメージを報告したり、表現したりしない限り、つまり自分のイメージを外在化させない限り、他者に分からないというところがある。したがって、心理臨床においてイメージの外在化は重要な役割を果たすと考えられる。この点について、神田(2007)は心理臨床の場で、クライアントをその全体性、個別性において理解しようとするとき、その人の内界に存在するイメージを個人の枠組みや文脈に添って出来るだけの確に把握しようとする取り組みが不可欠の条件となると指摘している。

イメージの外在化の様式に関して、河合(1971, 1997)は、3種類をあげている。それは1.イメージの視覚像そのもの(個人の主観的体験)、2.イメージの視覚像の表現(言語によるものと描画や箱庭など非言語的表現によるもの)、3.非言語的表現による外在化されたイメージの3つである。なお、2番目の「イメージの視覚像の表現」はイメージを心の中に描いてから、描画や箱庭を用いてそれを表現する方法を指しており、3番目の「非言語的表現による外在化されたイメージ」というのは、最初から絵や箱庭など表現媒体によってイメージを作り上げていく方法を意味しているため、厳密に言えばこの両方は異なるが、そこに働く心のメカニズムを考えると、臨床的にはあまり差がないと考えられる。

イメージを外在化させた後、外在化されたイメージを適切に理解することも心理臨床において重要である。その場合、クライアントのイメージにアプロー

チするにあたっては次の2点が重要となる。まず1つは、クライアントがどのようなイメージを感じているか、すなわちクライアントが体験しているイメージの内容である。そしてもう1つは、クライアントが自分のイメージをどのように体験しているか、すなわちクライアントのイメージの体験様式そのものである。そして、この2点を吟味することによって、クライアントは自己分析や自己理解を深めていくことになる。なお、イメージの外在化はイメージをそのまま外的に表すことだけではなく、イメージの表現を試みることで自分がイメージに変容をもたらすことなのである(河合, 1971; 神田, 2007)。したがって、自分のイメージの外在化の過程を体験し吟味することを通して、クライアントは自己洞察へと発展していくことが可能となる。

さらに、このような外在化されたイメージの役割について河合(1971)は2つ挙げている。1つ目は、無意識の動きを示す言語としての役割である。人間には自己治癒(self-healing)の力が存在する。心理療法においては、クライアントの自我防衛の力を弱め、反対に自己治癒の力を最大限に利用するようにしなければならない。自我防衛の力を弱め、自己治癒の力を働かせることによって、治療が進むが、その時クライアントの無意識の心の動きがイメージとして意識化されることになる。この意味で、イメージは無意識そのものを表現する言語のようなものであり、心の潜在的な動きを示しているという。もう1つは、心的エネルギーを変化させるチャンネルとしての役割である。つまり、クライアントはイメージの表現を通じて、今まで無意識内に閉じ込められていた心的エネルギーを自我の支配可能なエネルギーに変化させていく。そうすることによって、クライアントの自我は強化されるのである。

青年は生理的には成人とほとんど変わらないが、心理的にも未熟さがまだ残っていたりして、曖昧で混沌とした内的世界を抱え、そのニュアンスを言葉でうまく表現することのむずかしさを感じていることもある。そのため、イメージを用いることを通じて、青年は自分の内的世界に存在する漠然とした心の潜在的な動きを明確に感じられるようになり、さらに自我の支配可能なエネルギーも増大し、現実世界でより生産的な活動を遂行することが期待できる。前述したように、青年期後期の青年たちにとって、最も重要な課題の1つは家族からの自立である。この意味で、青年たちが何らかの形で、自分の心のなかにある「家族」そのものに対するイメージを明確にすることは青年の心理的発達を促すことにつながると推測される。

これらの考えを踏まえて、本研究では藤原や片畑にならって、「臨床イメージ」を重視する立場に立つ。つまり、単に外的刺激と知覚によって生成された「視覚像」ではなく、あくまでも個々の青年に内的起源をもつ心的事実としてのイメージを扱うものとする。したがって本研究では、「家族イメージ」を個々の青年が自分の家族について抱く関係性や構造に関する心像として位置づけ、吟味することとする。

4. 本研究の研究手法

岡堂(1991)は子どもと家族がどのようにかかわりあっているかを適切に理解するためには、「目に見えない家族構造」をアセスメントすることが必要だと述べている。このような「目に見えない家族構造」をアセスメントする手段としては、言語水準から情緒的意味として捉える SD 法と家族を視覚的・空間的イメージとして捉える投映法が挙げられる(麻喜, 2010)。

SD 法を用いて青年の家族イメージを検討した研究はこれまでもいくつか行われている。たとえば、日韓の大学生の家族イメージを測定し比較した小倉の研究(1990)、青年のアパシーと親イメージとの関係性を検証している鉄嶋(1993)、家族イメージ法との関連を検討している相模(1997)や横尾・亀口(1995)の研究、それに家族イメージと青年期における不適応傾向との関係について検証を行っている麻喜の研究(2010)、さらに青年期の親子関係と父母関係の関連性について検証している板倉・長谷川の研究(2012)などが挙げられる。

一方、家族を視覚的・空間的イメージとして捉える投映法の代表的なものとしては、**Family System Test(FAST)**、**家族関係単純図式投影法と家族イメージ法(FIT)**といったシンボル配置法が挙げられよう。**FAST** は **Gehring(1985)**によって開発されたもので、チェスのようなボードに木製の人形を配置させることによって、家族関係を捉えようとするものである。その特徴は家族の親密さだけでなく、家族成員の階層性をも評価できることにある。日本でも **FAST** を用いた研究はいくつか行われている(池田, 1996, 2001; 河野, 2005; 中見・桂田, 2007, 2010)。**家族関係単純図式投影法**は、クライアントが認識している家族関係を視覚的に捉えようとするものであり、一円玉大の円形のコマを用いて、クライアントや父、母といった家族成員を表すコマを円(家)の中に配置してもらうものである(草田・山田, 1998)。**茂木(1997)**はこの方法を用い、大学生の子どもを持つ臨床的な問題のない家族を対象に家族関係を調べたところ、大学生は

両親間の距離が離れているほど、家族の心理的健康度が低く、問題解決が的確になされていない傾向があることを見出した。また家族イメージ法は亀口(2003)が開発した、家族関係を図式化して把握しようとする投影法である。この方法の特徴としては家族成員同士の「心理的距離」、心理的な「向き」、家族成員それぞれの「結びつき」の強さを量的に測定できるという特徴をもっている(徳田・柴田, 2005)。

これらの方法はいずれも優れた方法であるが、麻喜(2010)によれば、SD法はその内容を客観的に数量化して捉える場合のスコアリングの便利さと他の変数との関連性を検討できる点では大きな利点をもつが、イメージ表現に含まれるたくさんの情報を捉える点では投映法のほうが適していると指摘している。したがって、本研究では青年の家族イメージを捉えることを試みるため、SD法よりも投映法のほうが適していると考えられよう。ただし、前述したFAST、家族関係単純図式投影法、家族イメージ法は家族成員間の関係性や各家族成員の勢力といった、家族関係のある具体的な側面を捉える目的で開発されたものであるために、本研究で検討しようとする「心的事実」として「家族イメージ」を多面的に捉えるには不向きのところがある。

そこで、本研究で注目したのが箱庭制作である。箱庭作品の制作とは、作成者は調査者が見守る中で、様々な種類のミニチュアの中からいくつか適当なものを選んで、砂が入れてある砂箱(57×72×7cm)のなかにミニチュアを置き、なんらかの作品を自由に作成するというものである。この手法は以下の理由で、前に挙げた方法よりもイメージを捉えるのに適切な表現媒体と考えることができる。

① ミニチュアの効果的な活用

イメージには多義性、具象性、直接性や集約性といった特性が備わっている(河合, 1969, 1991)が、FAST、FITや家族関係単純図式投影法などで用いられるミニチュアはこういったイメージを表現しきれないところがある。その理由としては、次のようなことが考えられる。つまり、これらの方法は家族成員の勢力や家族成員間の親密性など、協力者の家族のある側面についての認識を明確に捉えることが目的であるため、用いられるミニチュアもその目的にそって特定化されている。そうすることによって、FAST、FITや家族関係単純図式投影法などのアセスメント法は精度を高めることに成功しているのであるが、その代わりにイメージのもつ多義性や集約性をうまくとらえることには限界があ

る。たとえば、1つのライオンのミニチュアは「ライオン」という現実の動物を意味していると同時に、「父親」としても、あるいは「怖いもの」の象徴として表現できるのに対して、FASTで用いられる木製の人形ではこのような多義性や集約性は表現できない。

一方、箱庭用具セットの場合では多様なミニチュアが揃っている。河合(1969)は箱庭のミニチュアについて、ミニチュアは特に指定せず、できるだけ多くの種類を用い、基準の異なるものが雑多にある方が、かえって表現を豊かにしたり、意味が明確に感じ取れる場合が多いとし、ミニチュアとして用意すべきものとして人、動物、木、花、乗り物、建築物、橋、柵、石、怪獣など、多種多様のものを挙げている。

また、FAST、FITや家族関係単純図式投影法と同様に、箱庭用具の場合でも用意されたミニチュアは既成の出来上がった素材ではあるが、その1つ1つは人の内的イメージに働きかける力を持っており、そうした様々なミニチュアを組み合わせ、「ぴったり感」のある作品を完成させることで、クライアントは心に新たなイメージを形成させることが可能になる。箱庭での「ぴったり感」とは、自分の内的世界のイメージにぴったりあった表現のことである(東山, 1994)。この点について、東山は描画法などと違って、箱庭の場合では作成者は用意してある既成のミニチュアのなかから適切なものを選び、砂箱の中に置けば良い訳であるが、その際に作成者には「たえず自分自身のぴったりした内的世界イメージを表現することを要求される」のであるが、それが「本当の自分と自分のもつ自己イメージの乖離」を少なくし、「自分というもの」を統合することに役立つことを強調している(東山, 1994)。さらに、三木・光元・田中(1991)はこのような「ぴったり感」こそが箱庭療法の中心的な役割を果たしているとも述べている。

なお、箱庭用具の場合、もともとは既成のミニチュアを使用するのが基本であるが、場合によっては、自分の気持ちやイメージにそったミニチュアを適宜粘土などで新たに作り、作品に加えることで、クライアントの自己探求がさらに深まっていくことも考えられる。

② 表現される物語性

河合(2000)は、心理療法の実際においては、「意識的レベルに留まらずそれよりも深いレベルでの心の働きが重要となってくる場合が多い」と述べている。そして桑原(1992)は、物語形式は無意識にぴったりくる形式であって、特にそれ

が意識化されようとする時、物語という形式をとることがあると述べている。このように、臨床場面では、物語が人間の心の深層を知る手がかりの 1 つとして、重要な役割を果たしていると考えられる。しかし、前述したように、FAST , FIT や家族関係単純図式投影法といった方法は客観性を重視するアセスメント法であり、まさに協力者の「意識的レベル」に留まる心の働きを捉えようとするのが目的であると考えられる。したがって、こうしたアプローチだけでは協力者の心の中に生まれる物語を見ることは難しいと言えよう。

山口(2001)は、物語と箱庭制作過程の構造的類似性を検討し、箱庭をもとに、自覚的、内省的に物語や状況が本人に把握されたり治療者に解説されたりしなくても、箱庭を作ることそれ自体がすでに物語を語ることだと論じている。河合は箱庭作品を「心像 image」すなわち「意識と無意識、内界と外界の交錯するところに生じたものを、視覚的な像として捉えたもの」(1969)とし、こうしたイメージが展開するときには「物語的にしか語り得ず、だから箱庭表現そのものが物語的になる」(2002)と指摘している。こうしたことから、長谷川(2010)は、箱庭制作過程において生成されるイメージについて「物語」という観点から検討したところ、箱庭に生まれる物語と制作者の体験がリンクしていることが多いことを見出している。これらの考えや知見を踏まえて考えたとき、本研究におけるアプローチとしては箱庭を用いることがより適切であると考えることができる。

③砂箱の機能

箱庭用具のなかで、砂箱は、「保護された自由な表現空間」としての機能をもつ。この箱の枠によって空間が限定されていることはクライアントの表現を制限する反面、空間を守り自由を与えるという要素もある。それ故に、クライアントは内的イメージを投射したり、表現したりしやすくなる。また、砂箱の中で砂をこねたりミニチュアを砂に入れることで、適度な治療的退行が誘発されやすくなることは既に認められているが、この自然な退行が、クライアントの内的エネルギーを活性化し、やがてそれがイメージ表現となって具体化を促進させることは言うまでもない。

以上を踏まえ、本研究では青年の家族イメージを捉える表現媒体として、基本的には箱庭制作を導入することにする。なお、箱庭療法は日本の場合もちろん、中国においてもよく知られている心理療法の 1 つである。箱庭療法は 90 年代後半に張(1998)や申(2004)によって中国に紹介された。それ以来、箱庭療法は

簡単で実施されやすいこと、箱庭療法の理論的基礎でもある Jung の分析心理学は東洋文化とくに中国の文化と深く関わっていること、また言葉で上手に自分の内面を表すことが不得意なところがあるため中国人にとっては箱庭制作にはあまり抵抗を生じず親しみやすいことといった特性(罗・蔡, 2012)と相まって、中国においても箱庭は個人治療や団体(集団)治療において盛んに利用されており、その対象も子どもから成人まで幅広く適用されている(李・杨, 2014)。ただ、中国の箱庭に関する研究は事例研究や特定した対象群の特徴をまとめようとする基礎研究が多く見られているものの、イメージという視点から箱庭作品を検討する研究がまだ少ない。

5. 本研究の目的

アイデンティティ獲得の真っ只中にある青年期の青年は、家族や親への依存と独立の相克に悩みながら、自立への歩みを着実に進めていくのであるが、その過程で果たす家族の役割や影響の大きさは計り知れないものがあることはすでに述べた。そこで本研究ではまず、日本と中国の青年を対象に、質問紙や投映法を用いて彼らが自分の家族に対していかなるイメージを抱いているか、つまり個々人のもつ家族イメージの様相や特徴を把握し、分析することを目的の一つとする。そして、そこで得られた知見をもとに、箱庭用具を導入し、青年の家族イメージの変容過程や、それにかかわるさまざまな要因を検討していくことにより、心理臨床に適応できるようなアプローチも探究していくことをもう 1 つの目的とする。

これらの目的を達成するために、まず研究 1 では質問紙を用い、日本と中国の青年が認知している家族成員の勢力、つまり個々の家族成員が他の家族成員に与える影響や決定力が家族の適応性にいかに作用しているかを中心にとらえる。研究 2 では質問紙を用い、両国の青年の家族に対する印象が家族についての評価にいかなる影響を及ぼしているかを明らかにする。そして、それらをもとに研究 3 では独自に考案した「家族イメージシステム法」という投映法を用い、日中それぞれの青年が認識する家族の構造や関係性についてその特徴を分析する。

これら 3 つの研究によって、日本と中国の青年が抱いている自分の家族に対するイメージについて、その特徴はある程度把握できるものと考えられる。そこで、研究 4 では、青年の家族イメージの多義性や集約性を生かしながらこれをさら

に体験的、実感的に理解するための表現媒体として箱庭用具を導入した。すなわち「私の家族」をテーマに、同一の作成者に家族イメージを箱庭に継続にして表現してもらおうという臨床的なアプローチ(家族イメージ配置法)を試み、その内容を吟味することによって家族を多面的にとらえることを目的とした。このプロセスを通して、青年の家族イメージの変容過程を明らかにするとともに、それにかかわる要因についても研究 1~3 の結果をも踏まえつつ検証するが、同時に「家族イメージ配置法」を心理療法に適応するための有効な手がかりについても検討する。合わせて、家族の問題が複雑化しつつある中国での臨床実践への活用のさらなる可能性についても考察したい。

II 研究 1 青年が認知した家族成員の勢力が家族認識に及ぼす影響 について -日本と中国の青年を対象に-

1. 目的

人間の発達にあたっては、青年期は重要な時期である。青年期は子どもが親から心理的に離れて自立し、個の確立を課題とする時期である(Blos, 1990)。そしてこの時期の家族の課題としては、青年が家族と外の社会とを自由に出入りできるように、家族の成員間の境界を拡大化、柔軟化していくことが挙げられる(Carter, E.A., and McGoldrick, M. 1980)。つまり、児童期までは親にある程度密着していた子どもは、青年期を通過していく中で親からの分離に直面する。またこれまで子どもに密着しながら子どもを守ってきた親は、子どもとの距離をあけ、遠くからその成長を見守るように態度を変化させていくことが必要になってくる。その意味では、青年期においては、子どもと両親との関係がこのように適切に変化していくという点が重要になってくる。

ある家族の状態、とりわけ健全な家族関係を把握するための1つの視点として、Olson, McCabbin, Larsen, Muxen, & Wilson(1985)の家族機能理論が考えられる。Olsonら(1985)は家族関係を、家族成員がお互いに抱く情緒的絆と定義される「凝集性」と状況的および発達の危機に直面する際の家族システムの勢力構造、役割関係、関係のあり方を変化させる能力と定義される「適応性」、の2次元で捉えようとしている。これまでは青年を対象としてこの2次元を用いた研究が多数見られるが、そのほとんどが青年心理の特性との関係についてのものであり、家族関係の親和性や葛藤性といった家族関係のほかの特性とこの2次元との関係についての研究はまだ多くない。

家族はしばしば1つのシステムとして見なされる。この意味では凝集性と適応性という家族機能の2次元は、1つのシステムとしての家族の全体的な特質と考えられる。そして、1つのシステムとして、家族にはこの全体的な特質のほかに、親や子どもといったそれぞれの家族成員に由来する特質、さらには夫婦間、親子間のような家族成員間の相互関係から由来する特質も存在すると考えられる。家族全体の特質、各家族成員の特質と家族成員間の相互関係の特質との間には何らかの関係があり、この3者の相互作用によって家族は営まれて

いるといえよう。さらに、家族システムの考え方を重視する家族療法の理論では、家庭内に問題が生じた時、それを家族の成員の誰かが問題を抱えたためだと個人の問題としてとらえるのではなく、むしろ家族メンバーが、家族システム全体の問題としてとらえる。つまりそれぞれ他のメンバーに対してどのような役割を請け負っているか、どんな心理的影響を与えているのかを重視し、家族ひとりの問題や性格を改善したとしても家族全体のシステムティックな問題を解決に導くことはできないととらえている。これらの考えを踏まえ吟味すると、各家族成員の特質に変化が生じる場合、家族成員間の相互関係の特質も変わるといことが考えられる。したがって、青年期の子どもをもつ家族を検討するに当たっては、凝集性や適応性といった家族全体の特質について検討するとともに、子どもとその親のそれぞれあり方や親子という二者関係から家族全体の特質への影響についての検討することも意味のある視点だと言えよう。

子どもが青年期に入ると、自分自身の力、つまり自分の勢力について改めて自覚するようになる。「勢力」は Minuchin(1974)や Haley(1976)に代表される家族療法において重要な概念である。そして、前述したように、青年期はそれまで主な依存対象であった親や家族から内的・心理的に自立し、自分のアイデンティティを確立する時期である。そのため、青年期では親子の間に葛藤や対立が増えると言われている(Dekovic et al., 1997)。その理由の1つとして、子どもが青年期に入ると自分の考えに基づき自己主張もはっきりするようになり、自分と親との関係についての認識が対等な関係へと変化していくため、つまり自分の勢力がより強くなると認識するようになるため(落合・佐藤, 1996)、物事に関する決定について親子間で対立が起りやすくなるということが挙げられる(板倉, 2012)。こうした状況からすると、家族成員の勢力は各家族成員自身の特性でありながら、親子といった2者関係、さらには家族全体にも影響を及ぼす要素であると考えられよう。

家族成員の勢力と家族関係との関係についての研究は野口・狐塚・宇佐美・若島(2009)の研究が挙げられる。野口ら(2009)は家族成員の家庭での全体的な「勢力」が、家族の凝集性と適応性とどのような関係があるかについて検討を行ったが、「勢力」の得点と凝集性の得点との間には有意な正の相関が見られた。野口らによれば、「勢力」は家族関係の特徴の把握に重要な概念となりうるという(野口・狐塚・宇佐美・若島, 2009)。しかしながら、野口ら(2009)の研究では、彼らが開発した家族構造尺度の妥当性を検討することが目的であったため、家

族成員の勢力と家族全体の凝集性・適応性との関係については相関関係の検討に留まり、勢力が凝集性・適応性に与える影響プロセスについての検討がなされていない。また、野口ら(2009)の研究では「勢力」を2人の家族成員間において1人の成員がもう一方の成員に保持しているものにとらえており、しかも凝集性・適応性との関係を検討するとき、夫婦間、父子間と母子間の「勢力」の平均値を用いて検討を行っていたため、個々の家族成員の「勢力」についての検討はなされていないと言える。

そこで、本研究では青年が認識した親と自分との間の力関係、つまり各家族成員の家での決定力や影響力といった勢力が家族関係に与える影響プロセスについて検討することを目的とする。また、各家族成員の特質に変化が生じる場合、家族成員間の相互関係の特質が変わり、それによってさらに家族全体も変わるというシステムティックな考え方を踏まえ、本研究では仮説として、各家族成員の勢力の強さについての認識が家族成員間の関係に影響を与えると同時に、凝集性や適応性といった家族全体のあり方にも影響を及ぼす、というプロセスも仮定した。

なお、家族は1つのシステムとして、様々なストレスに対して、1つの秩序あるまとまりを維持しようとするが、ストレスが強く対応がうまくいかない場合、システムとしての定常性が崩れてしまい、家族が危機的な局面に陥れる恐れがある(渡辺, 1989)。大学生になった子どもと親子間において起こった対立はこうしたストレスの一種になりうるであろう。前述のように、Olsonら(1985)は家族の適応性を、家族が危機を乗り越える能力と定義している。この意味で、家族成員の勢力の強さと家族の適応性の高さという両要因の間に関係性があると考えられよう。そこで、本研究では家族の凝集性に対する影響を分析すると同時に、主に家族成員の勢力が家族の適応性にいかなる影響を及ぼすかについて検討を行う。

2. 方法

2-1 協力者

日本人協力者は首都圏の私立A大学1～3年生167名(男性64名女性103名、平均年齢は22.3歳)。中国人協力者は日本の公立大学に相当する中国B大学の1～3年の学生170名(男性84名女性86名で、平均年齢は21.5歳)。この大学は

遼寧省の首都瀋陽市(人口は約 820 万人)にあり、学生数は 2 万 5000 人である。

2-2 質問紙の構成

質問紙はフェイスシート、家族構造測定尺度、家族機能測定尺度の 3 つの部分から構成される。

①フェイスシート：協力者の性別と年齢を記入してもらい、研究目的についての説明などを提示した。

②家族構造測定尺度:この尺度は野口・狐塚・宇佐美・若島(2009)が作成したものである。この尺度には、1.「結びつき」、2.「勢力」、3.「葛藤」、4.「社会的興味」、5.「ルール」、6.「利害的關係」、7.「開放性」、8.「統制力」、と家族関係や家族状態に関する 8 つの下位尺度がある。それぞれの尺度について協力者が 10 段階で点数をつけることでそれぞれの下位尺度が表す構成概念の強さを測定する。例えば、「ルール」を測る場合、家族内におけるルールが非常に弱い、あるいは非常に少ない場合を 1、家族内におけるルールが非常に強い、あるいは非常に多い場合を 10 とし、協力者に当てはまると思う点数を記入してもらうことで、「ルール」の得点を求めていく。なお、この尺度は野口ほか (2009) によって妥当性が確認されている。

本研究で家族関係構造測定尺度を用いた理由は、家族成員間の結びつきや各家族成員の勢力といった構成概念の強さをより直接的に測定できる点にある。本研究では協力者の負担を考慮し、野口ほか (2009) の 8 つの下位尺度の中から、研究目的に沿って 1. お互いの仲の良さや親密感を表す「結びつき」、2. お互いの感情を傷付け合う、口論で不快な気持ちになる、といった相手との衝突の大きさや頻度を表す「葛藤」、3. 家族内における規則の多さや強さを表す「ルール」、4. 影響力や決定力、発言力を表す「勢力」、の 4 つの下位尺度を使用した。

また、野口ら(2009)は「結びつき」と「葛藤」は二者関係における状態として、「勢力」を二者間において一方が他方に保持しているもの、また「ルール」は家族で共通するものとして捉えている。これに従い、本研究では「結びつき」と「葛藤」の得点は、協力者に両親間、父子間、母子間のそれぞれの「結びつき」及び「葛藤」を評定してもらったあと、両親間と父子間と母子間の 3 つの得点の平均値を算出し、これを「結びつき」得点及び「葛藤」得点とした。また、「ルール」の得点は協力者に家族全体のルールの強さを評定してもらった得点をそのまま「ルール」得点とした。「勢力」に関しては、本研究では 1 人の家

族成員(例えば父親)が他の家族成員(例えば母親と子ども)に与える影響力や決定力などを評定してもらった。具体的には、協力者に「父親勢力」と「母親勢力」と「子ども勢力」それぞれについて評定してもらった後、その得点をそのまま「父親勢力」得点、「母親勢力」得点と「子ども勢力」得点とした。

③家族機能測定尺度:Olson ら(1985)が開発した尺度である。この尺度は「家族成員間の情緒的絆」と定義される凝集性尺度 10 項目と、「夫婦及び家族システムが、状況的・発達の危機(ストレス)に際してその力構造、役割関係、関係のあり方を変化させる能力」と定義される適応性尺度 10 項目の計 20 項目から構成されている。各項目は 1 点～5 点の 5 段階で評定され、各下位尺度の最高合計得点は 50 点である。信頼性については、日本では凝集性尺度の α 係数が.88、適応性尺度の α 係数が.74、中国では凝集性尺度の α 係数が.85、適応性尺度の α 係数が.73、と両国ともに高い信頼性が確認されており(草田・岡堂, 1993; 費立鵬, 1999)、本研究においてもこの尺度を利用することにした。

なお、中国版尺度に関しては、家族関係構造測定尺度は日本語版を中国語に翻訳したあと、中国語から日本語に翻訳し直すというバックトランスレーション法により表現を一致させた。具体的には、「結びつき」は「牽絆」、「葛藤」は「隔阂」、「ルール」は「規矩」、「勢力」は「勢力」と翻訳した。そして、中国語を母国語とし、研究目的を知らない第三者 2 名に尺度の項目を提示し、概念が正確に理解されることを確認した。また、家族機能測定尺度は中国語版(費立鵬ほか, 1999)を使った。

3. 結果

Olson(1985)は家族の凝集性と適応性の得点によって、家族をバランス群、中間群と極端群の 3 種類に分けている。本研究でも Olson と同様に、両国の凝集性と適応性の得点の $M \pm 1SD$ によって、両国の家族をバランス群、中間群と極端群に分けてみたところ、日本では 164 名の協力者のうち、その家族はバランス群に分類されたのが 54 名、中間群に分類されたのが 79 名、極端群に分類されたのが 31 名、中国では 170 名の協力者のうち、バランス群に分類されたのが 37 名、中間群に分類されたのが 112 名、極端群に分類されたのが 21 名であり、いずれの国においても 3 群間にばらつきがみられた。そこで、両国のバランス群、中間群と極端群のそれぞれの得点に両国間で差があるかについて t 検定を用

いて検討したところ、いずれも有意な結果が得られなかった。こういった結果を踏まえ、本研究では両国のデータをバランス群、中間群と極端群の3群に分けず、全体的な視点から分析を行った。

3-1 勢力得点の差の比較

各家族成員の勢力の得点について両国の間に差があるかについて t 検定で検討を行った(表 1)。その結果、母親勢力と子ども勢力については両国の間に有意な差が見られなかったが、父親勢力については両国の間に有意な差が見られ、日本の得点と比べて中国の得点の方が高かった($t=-6.70(332)$, $p<.001$)。

表 1 各家族成員の勢力の平均, SD , t 値(df)

	国	N	平均値	SD	t 値(df)
父親勢力	日本	164	7.03	2.36	-6.70***
	中国	170	8.51	1.61	(332)
母親勢力	日本	164	7.39	1.77	-1.42
	中国	170	7.66	1.69	(332)
子ども勢力	日本	164	5.00	2.09	1.90
	中国	170	4.47	2.92	(332)

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

続いて、各国において「父親勢力」、「母親勢力」、「子ども勢力」の間に差があるか、分散分析で検討したところ、両国とも 0.1%水準で有意差が見られた(日本： $F(2,336)=272.39$, $p<.001$)；中国： $F(2,338)=256.59$, $p<.001$)。続いてそれぞれの国について多重比較を行った。日本では父親の得点と母親の得点の間には有意差がなかったが、両者ともに子どもの得点より有意水準 1%で高かった。一方、中国では父親の得点が母親及び子どもの得点より高く、さらに母親の得点も子どもの得点より有意水準 0.1%で有意に高いという結果になった(表 2)。

表2 「勢力」の分散分析の結果

		父親	母親	本人	F検定
日本	平均値	7.03	7.39	5.00	F=59.6
	SD	.184	.138	.163	p<.001
中国	平均値	8.51	7.66	4.47	F=256.59
	SD	.123	.129	.224	p<.001

3-2 「勢力」の得点と凝集性・適応性の得点の関係の比較

各国において、まず「父親勢力」、「母親勢力」、「子ども勢力」、「結びつき」、「葛藤」、「ルール」、凝集性、適応性との相関係数を計算した(表3)。

表3 「父親勢力」、「母親勢力」、「子ども勢力」、「結びつき」、「葛藤」、「ルール」、凝集性、適応性の相関係数

		父親勢力	母親勢力	子ども勢力	結びつき	葛藤	ルール	凝集性	適応性
父親勢力	日本	-	-.03	-.13	.40**	.02	.06	.05	-.13
	中国	-	.41**	.38**	-.08	.16*	.42**	.04	.30**
母親勢力	日本	-.03	-	.02	.12	.12	.02	.09	.09
	中国	.41**	-	.42**	-.12	.07	.08	.02	.03
子ども勢力	日本	-.13	.02	-	.15	-.02	-.09	.01	.31**
	中国	.38**	.42**	-	-.35**	.48**	.85**	.31**	.54**
結びつき	日本	.40**	.12	.15	-	-.27**	.14	.56**	.28**
	中国	-.08	-.12	-.35**	-	-.37**	-.34**	.03	.01
葛藤	日本	.02	.12	-.02	-.27**	-	.07	-.31**	-.24**
	中国	.16*	.07	.48**	-.37**	-	.51**	.06	.03
ルール	日本	.06	.02	-.09	.14	.07	-	.06	-.15
	中国	.42**	.08	.85**	-.34**	.51**	-	.36**	.61**
凝集性	日本	.05	.09	.01	.59**	-.31**	.06	-	.56**
	中国	.04	.02	.31**	.03	.06	.36**	-	.32**
適応性	日本	-.13	.09	.31**	.28**	-.24**	-.15	.56**	-
	中国	.30**	.03	.54**	.01	.03	.61**	.32**	-

** $p < .001$, * $p < .01$, * $p < .05$

続いて、各国において、「父親勢力」、「母親勢力」、「子ども勢力」、「結びつき」、「葛藤」と「ルール」を説明変数とし、凝集性と適応性を基準変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った。各国の結果はそれぞれ図1~4に示す。凝集性に関するモデルと適応性に関するモデルの適合度指標はともに十分な値が得られた(凝集性に関するモデル $\chi^2(7)=6.57$, ns, CFI=1.000, GFI=.994, AGFI=.971, RMSEA<.001; 適応性に関するモデル: $\chi^2(5)=3.32$, ns, CFI=1.000, GFI=.997, AGFI=.971, RMSEA<.000)。図中の矢印は有意なパスを示している。図中の数値は標準化された偏回帰係数を示す。誤差変数と誤差変数の相関係数は省略した。

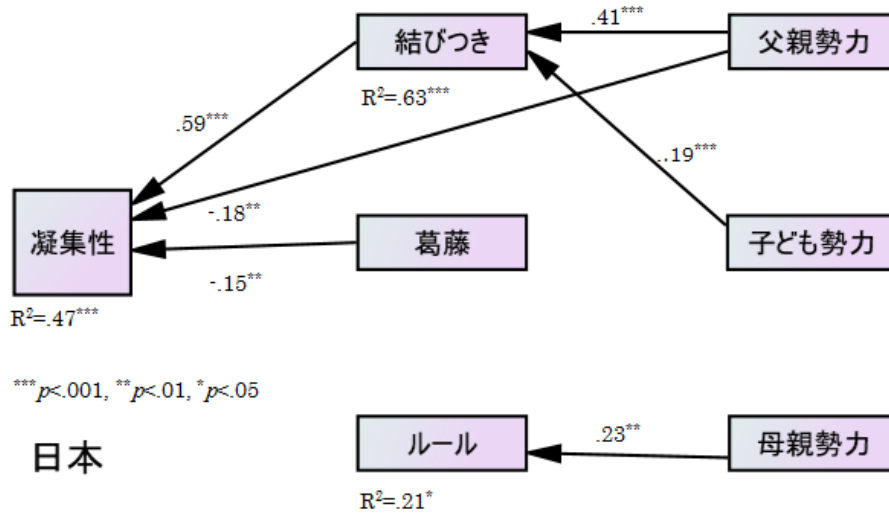


図1 日本の家族の凝集性に対する影響

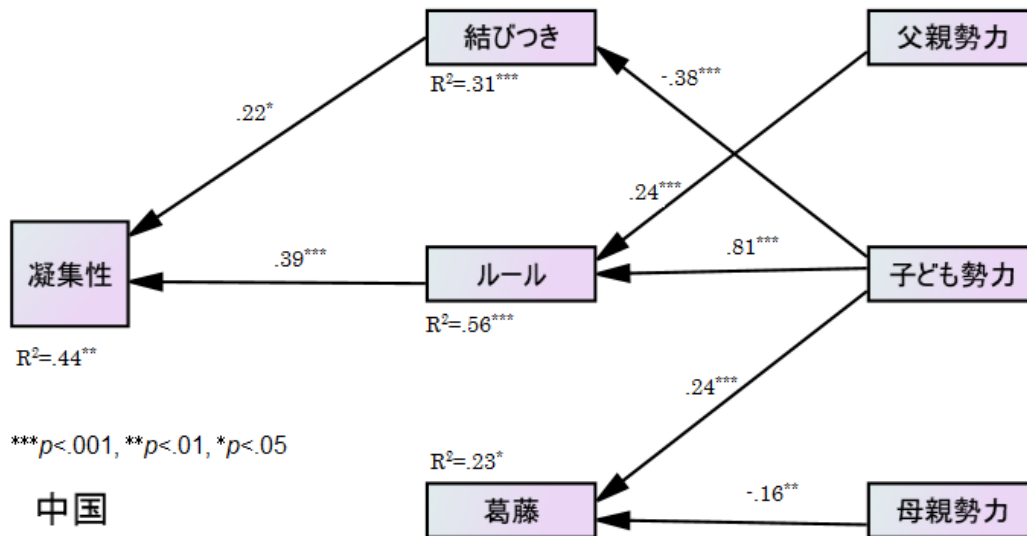


図 2 中国の家族の凝集性に対する影響

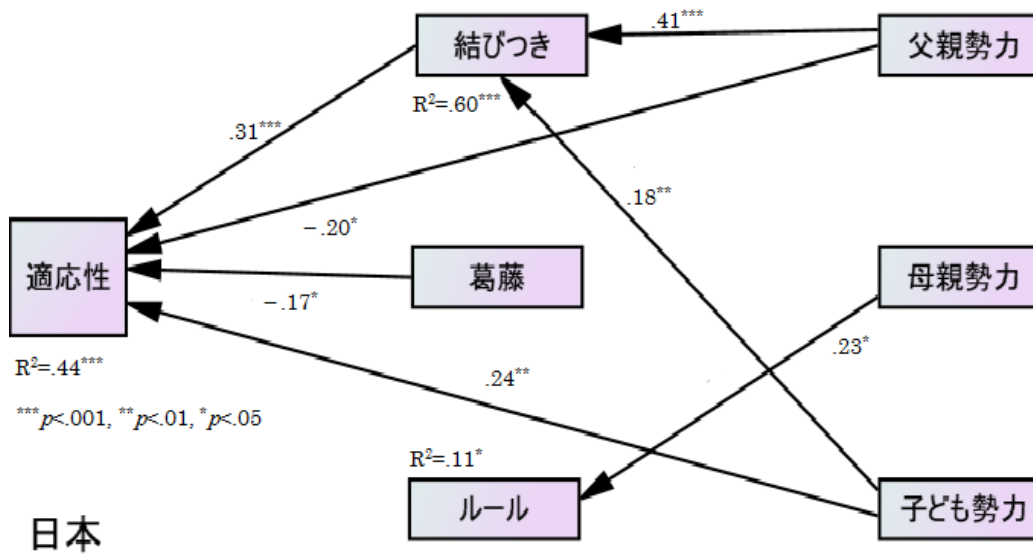


図 3 日本の家族の適応性に対する影響

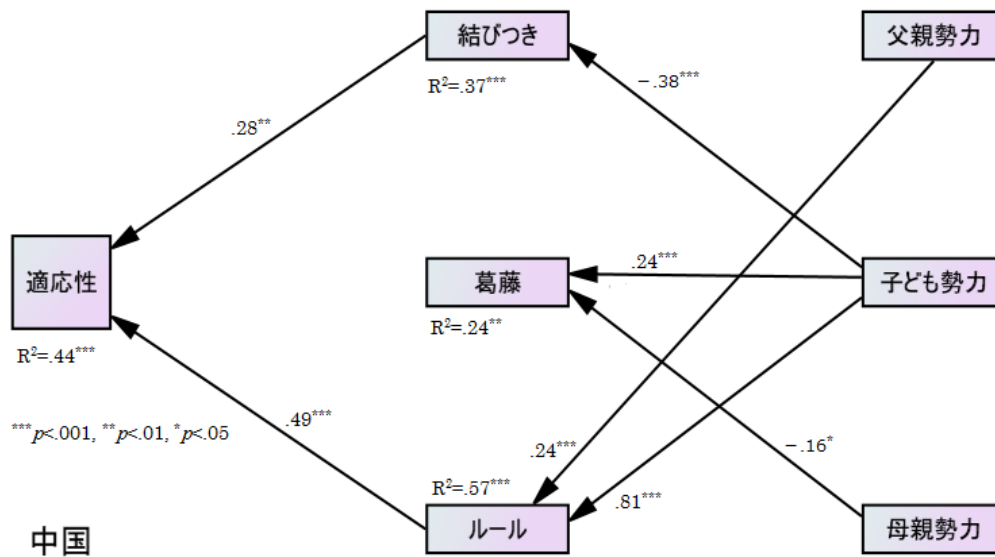


図 4 中国の家族の適応性に対する影響

①凝集性：

日本では凝集性の最も強い予測要因は「結びつき」であった($\beta = .59, p < .001$)。そして、「結びつき」の最も強い予測要因が「父親勢力」であり、その次が「子ども勢力」であった(「父親勢力」: $\beta = .41, p < .001$; 「子ども勢力」: $\beta = .19, p < .001$)。なお、「父親勢力」は影響が弱いながら、凝集性の抑制要因となっていた($\beta = -.18, p < .01$)。また、「母親勢力」は「ルール」の予測要因となっていた($\beta = .23, p < .01$)。

一方、中国では凝集性の最も強い予測要因が「ルール」であり、次に「結びつき」となっていた(「ルール」: $\beta = .39, p < .001$; 「結びつき」: $\beta = .22, p < .05$)。そして、「ルール」の最も強い要因が「子ども勢力」であり、その次が「父親勢力」であった(「子ども勢力」: $\beta = .81, p < .001$; 「父親勢力」: $\beta = .24, p < .001$)。なお、「子ども勢力」は「葛藤」の予測要因であり、「母親勢力」は「葛藤」の抑制要因であった(「子ども勢力」: $\beta = .24, p < .001$; 「父親勢力」: $\beta = -.16, p < .01$)。

②適応性：

日本では適応性の最も強い予測要因は「結びつき」であり、「子ども勢力」がその次であった(「結びつき」: $\beta = .31, p < .001$; 「子ども勢力」: $\beta = .24, p < .01$)。そして、凝集性の場合と同様に、「結びつき」の最も強い予測要因が「父親勢力」であり、その次が「子ども勢力」であった(「父親勢力」: $\beta = .41, p < .001$; 「子ども勢力」: $\beta = .18, p < .01$)。なお、「父親勢力」は弱い影響で適応性の抑制要因にもなっていた($\beta = -.20, p < .05$)。また、「母親勢力」も「ルール」の予測要因

となっていた($\beta=.23, p<.01$)。

一方、中国では凝集性の場合と同じパターンが見られた。つまり、「ルール」が適応性の最も強い予測要因となっており、「結びつき」がその次であった(「ルール」: $\beta=.49, p<.001$; 「結びつき」: $\beta=.28, p<.01$)。そして、「子ども勢力」が「ルール」の最も強い予測要因であり、「父親勢力」がその次であった(「子ども勢力」: $\beta=.81, p<.001$; 「父親勢力」: $\beta=.24, p<.001$)。なお、「葛藤」に対しては「子ども勢力」が予測要因であり、「母親勢力」が抑制要因であった(「子ども勢力」: $\beta=.24, p<.001$; 「母親勢力」: $\beta=-.16, p<.05$)。

4. 考察

以上、凝集性と適応性の両方について分析を行ってきた。家族の凝集性に関しては、両国とも、家族成員の勢力が家族成員間の結びつきを介して家族の凝集性に対して影響を与えるという傾向が見られたものの、凝集性と「結びつき」との定義内容を精査したところ、両者の概念には類似性があることが明らかになった。そこで本節では主に適応性に対する家族成員の勢力の影響について検討を行う。

4-1 日本家族の適応性について

日本では適応性に対して、「結びつき」、「葛藤」、「父親勢力」と「子ども勢力」からのパスが有意であった。また、「結びつき」に対して「父親勢力」からのパスと「子ども勢力」からのパスはともに有意であったが、「子ども勢力」と比べ「父親勢力」の方は「結びつき」に対する標準偏回帰係数が高かった。さらに、適応性に対して、「父親勢力」からの直接効果は負であったものの間接効果は正であり、しかも絶対値は直接効果より間接効果のほうがはより強かった。これらの結果からすると、日本では父親の勢力が強いと家族の適応性が強くなるという点が特徴になっていると考えられる。本研究では野口ほか(2009)の考えに基づき、「勢力」を“決定力や影響力、発言力”と捉えている。したがって、父親が家で持つ決定力や影響力、発言力が強いほど、家族のまとまり具合は高まり、危機に対応する能力も強まると考えられる。これに関しては他の研究においても類似の結果が得られている。たとえば、尾形・宮下(2002)は家族のまとまりや健全な関係が子どもの共感性の発達に影響すると述べた上で、特に父親の家庭

での協力に基づいた夫婦間の共感的な相互理解が重要であることを強調している。平山(2001)は父親の家庭関与と中学生の精神的状態との関連性を調べ、家族において父親の家庭関与が高いほど中学生の精神が良好になる傾向を見出している。また、中見・桂田(2008)は Family System Test(FAST)を用い大学生における父親の認知と家族機能との関連を調べたところ、父親は家族において権威があるとみなしている者の方が、家族を肯定的に捉え、家族の問題解決もうまくできていると捉えている傾向があると結論づけている。したがって、家族全体がきちんと機能するためには、父親が家庭で自分の力を発揮することが不可欠の条件になっていると言えよう。

なお、「父親勢力」はまた、影響は弱いながらも、適応性の抑制要因ともなっていた。これについては次のようなことが考えられる。社会心理学では勢力の概念として、“他者の行動、態度、感情など影響者が望むように変化させうる能力”と定義される「社会的勢力 (social power)」という用語が一般に用いられている(French & Raven, 1959)。そしてこの「社会的勢力」は、影響を与える人(影響者)を同一視しようとする傾向から生ずる「参照勢力」、影響者が特殊な知識や専門的スキルを持っていることから生ずる「専門勢力」、影響者の行動が正当な権力を持っているという認識に基づく「正当勢力」、影響者が報酬を与える能力を持っているという認識から生ずる「賞勢力」、そして、影響者が罰を与える能力を持っていることに基づく「罰勢力」の5種類に分けられており(French & Raven, 1959)、さらにサブカテゴリーとして参照-専門勢力、賞-罰勢力に集約することができる(今井, 1987)と言われている。野口・若島(2007)はこの「社会的勢力」を用い家族関係における勢力を検討し、父親の勢力が子どもに参照-専門勢力であると認知されることによって親子間のコミュニケーションは肯定的になり、逆に賞-罰勢力であると認知されることによって親子間のコミュニケーションが否定的になることを示した。さらに、野口(2009)は、参照-専門勢力と賞-罰勢力とは全く相反する影響を持っているというわけではなく、それぞれは独自の性質を持っていると指摘している。これらの研究から、2つの勢力が同じ強さであっても異なる効果を発揮する場合があります。つまり、一人の家族成員(父親)の勢力が同時に参照-専門勢力と賞-罰勢力の両方の特徴を備え、参照-専門勢力が優位に発揮されれば家族関係に良い影響をもたらすが、賞-罰勢力寄りに発揮されるならば家族関係に悪い影響を与える、と捉えることも可能である。この意味で、父親の強い勢力は家族を統合することにつながる

が、もし家族状況に慎重な配慮をせずに家族に対して威張った態度をとったり、理不尽な要求や矛盾した指示などを繰り返しているならば、やがてそれが、家族関係に悪影響を及ぼす可能性もあると考えられる。

なお、適応性に対しては「子ども勢力」は直接に正の影響を与えると同時に、「結びつき」を介して間接的に正の影響を与えていた。このことから、子どもの勢力が強くなると家族の危機を克服する能力が高まる、ということが言える。本研究の調査対象は大学生である。大学生になると、青年は関心が外部へと移るようになり、家族のことがしだいに生活の中心ではなくなっていくと考えられる。従って、子どもの勢力が強くなることは、家族成員間の情緒的絆を強めるということには、必ずしもつながらないかもしれない。しかし、もし家族が何らかの危機に直面した際に、子どもが家族成員の一人として力を発揮することが必要とされる場合もあるため、子どもである青年の力の強さは、一方で家族成員間の関係を深め、そのことで家族がまとまり、間接的に家族全体の解決力を高める方向に機能する可能性をもっていることになる。

4-2 中国家族の適応性について

適応性に対して、「ルール」と「結びつき」からのパスはともに正の値で有意であったが、「結びつき」の場合に比べて、「ルール」からのパスの標準偏回帰係数がより高かったため、適応性に対して「ルール」からの影響が強いと考えられる。また、「ルール」に関して、「父親勢力」と「子ども勢力」からのパスはともに正の値で有意であったが、「子ども勢力」からのパスの標準偏回帰係数の方が「父親勢力」よりも高かったため、「子ども勢力」からの適応性に対する影響の方が強いと考えられる。本研究では、「ルール」を“家族内における規則”ととらえその多さや強さについて協力者に評定してもらっている。したがって、子どもの勢力も父親の勢力も強くなると家族のルールが強まり、それによって適応性の両方が高まるというような可能性があると言えよう。しかしその一方で、適応性に正の影響を与える「結びつき」に関しては、「子ども勢力」からのパスは負の値で有意であった。つまり、子どもの勢力が強くなると家族成員間の関係が悪くなり家族の適応性が弱まる、というような可能性もあるといえよう。

前述したように、まず、父親、母親、子どものそれぞれの勢力を分散分析で検討した結果、「父親勢力」の得点が3者のうち最も高かった。この結果を踏ま

えて「父親勢力」がルールに影響を与えるということを考えると、確かにパス解析では家族の規則に対して、父親よりも子どもからの影響の方がより強い傾向が見られたが、子どもは父親を自分自身よりも勢力の強い人と認識する傾向があるため、実際の家庭生活では家族の規則に対する父親の影響も強く、家族の規則が父親によって規定される可能性があると考えられる。

子どもが青年期に入ると、理想化された親へのイメージが崩壊するとともに現実の親を批判し、親への心理的依存からの離脱が進む(長尾, 1991)。その意味で、子どもの勢力が強いと家庭内のルールが強くなるとともに、家族成員間の結びつきがむしろ弱まる、という前述の結果は、青年が親に対して反抗的な態度を取る場合には生じうると考えられる。つまり、権威を持つ父親によって決められたルールに対して、子どもが反抗的になり従いたがらない場合、父親は子どもを従わせるために既存のルールをさらに強化し、それによって家庭内のルールが強くなるという可能性が考えられる。

しかしながら、王ら(2008)は大学生を対象に親の養育態度と子どもの自我同一性の確立との関連性について調べたところ、親の養育態度を権威主義的にとらえる子どもの自我同一性の確立類型は早期完了型である傾向が強いという結果を得ている。この結果は、親は自分の行動を規制するが、適切な態度で自分に接すれば親の価値観などを自分のものとして受け入れようとする傾向が中国の青年にはある、という可能性を示唆しているにとらえることもできよう。さらに、親によって設けられるルールには、親の意志や価値観が反映される可能性があると考えられる。この意味で王らの研究結果を踏まえ本研究の結果について吟味すると、子どもが親の価値観を自分のものとして認識することは、ときによっては親によって決められた家族ルールに従うことをも意味する。したがって、父親によって決められたルールに子どもが従うような場合、その家族のルールは子どもの参加によって強化されることもありうると考えられる。そして、父親によって決められたルールに子どもが反抗せずに従う場合、家族内で緊張感が生じにくく、家族の結びつきがかえって高まる可能性もあると言えよう。さらに、前述したように、父親が自分の勢力を参照-専門勢力が優位に発揮される場合、つまり、家族ルールを子どもの意志を尊重する形で規定する場合、家族関係に良い影響をもたらすことは言うまでもない。したがって、数値的には、家族の凝集性と適応性に対する子どもからの影響の方が父親の場合より強かったが、実際の家庭生活では父親の影響も無視できないと言えよう。

5. 今後の課題

まず、本研究では適応性に対する父親の影響が見られたものの、母親の勢力の影響はいずれの国においても見当たらなかった。両親のこのような相違について、Shek (1999) は以下のように分析している。すなわち、父親は子どもとコミュニケーションをとる機会及び子どもとのかかわり全体が母親に比べて少なく、同時に、伝統的に「一家の主」として母親よりも大きい権威を持つ傾向があるため、父親の子どもに対する行為は子どもにとって影響力がより強い可能性がある。本研究では親の勢力の強さを分析対象としており、母親は家族に対して影響を与えるはずであるが、家族成員の勢力の強さという側面においてはその特徴が父親や子どもの場合ほど、顕著ではない可能性があったと考えられる。したがって、「勢力」についてはさらに別の角度からも母親の影響を評価する必要がある。また、日本では「葛藤」からのパスは凝集性に対しても適応性に対しても負の値で有意であったが、中国では「葛藤」からのパスはいずれに対しても有意ではなかった。これについては、中国では家族のルールの影響が大きいいため、もしその家でのルールがしっかりしたものであれば、たとえば家族関係がそれほど親密ではなくとも、その家族はある程度安定性を保ち、それなりに機能できると推測される。今後の研究では中国家族の「葛藤」の影響について更なる検討をする必要があろう。また、本研究では男女数に偏りがあったため、性差を変数として取り上げることができなかつた。したがって、本研究の結果に性差の偏りの影響があるということもあり得る。今後は子どもの性差が親の勢力評価にいかなる影響を及ぼしているかについてさらなる検討する必要がある。さらに、本研究では主に家族の適応性に対する影響について論じているかが、凝集性に関して、日本では「父親勢力」と「子ども勢力」が「結びつき」、中国では「子ども勢力」が「結びつき」を介して家族の凝集性に影響を及ぼすという傾向が見られた。しかしながら、本研究では「結びつき」と凝集性の両者には概念として類似した点があると考えられたため、家族成員の勢力、特に子どもの勢力が「結びつき」を介して凝集性に影響を与えるという結果について詳しく検討することができなかつた。今後の研究ではそれぞれの家族成員の勢力が家族の凝集性に与える影響についてさらにいくつかの側面から詳細に検討することが必要であろう。

Ⅲ 研究 2 心理的環境としての家族に対する認識について -日本と中国の青年を対象とした比較を中心に-

1. 目的

家族は我々が生まれながらにして所属する社会集団であり、子どもは家族成員との交流を通して、他者との社会的な相互作用を習得する(八木, 2010)。子どもが成長し、成熟した人間になっていく心理・社会的過程において、青年期は大きな節目である。青年期にいる大学生は「心理社会的な集団としての家族」(Moos, 1974)に対して、家族への依存と家族からの自立という葛藤を体験する。それによって、今まで自分を支えてきた自分の家族に対する印象に変化が生じることもあり得る。

また、アジアにおいては家族の様式も急変している。今日、急速な経済的発展や高度技術化などの影響によって、伝統的な多世代同居家族は確実に減少し、夫婦と子どもからなる核家族へと構造的な変化が起きている。このような変化は先進国の日本においても、まためざましい経済発展を遂げている中国においても例外ではない。こうした家族環境の変化も青年期にいる子どもの家族に対する認識に影響を及ぼしていると考えられる。現在、日本と中国の社会では、非行や無気力といった青年の不適應の問題行動は決して稀ではないが、このような問題行動の背後に、家族要因が絡むこともしばしばあると推察できる。したがって、このような傾向の背景になる要因として、青年が自分の家族に対してどのような印象を持ち、家族の様々な側面をいかに評価しているかについて検討することは意義があろう。

岡堂(1991)は子どもと家族がどのようにかかわりあっているかを適切に理解するために、「目に見えない家族構造」をアセスメントすることが必要だと述べている。このような「目に見えない家族構造」をアセスメントする手段として、言語水準から情緒的意味として捉える SD 法と家族を視覚的・空間的イメージとして捉える投映法が挙げられる(麻喜, 2010)。麻喜(2010)によれば、イメージ表現の情報量を捉える点では投映法のほうが適しているが、その内容を客観的に数量化して捉える場合のスコアリングの便利さと他の変数との関連性を検討できる点では SD 法に大きな利点があると述べている。今回の一連の研究では、日中両国の青年が持つ家族イメージを研究対象としているが、他の変数との関

連性を検討するために、また家族イメージを実証的に検討するための築くために、研究 2 では SD 法を用い検討を行った。

SD 法を用いて子どもと家族との関わりを検討した研究は幾つかある。たとえば、日韓の大学生の家族イメージを測定し比較した小倉の研究(1990)、青年のアパシーと親イメージとの関係性を検証している鉄嶋(1993)の研究、家族イメージ法との関連を検討している相模(1997)や横尾・亀口(1995)の研究、それに家族イメージと青年期における不適応傾向との関係について検証を行っている麻喜の研究(2010)、青年期の親子関係と父母関係の関連性について検証している板倉・長谷川の研究(2012)などが挙げられる。しかしながら、SD 法を用いた研究は数としては未だ少ないし、それに国際比較研究は小倉のものだけであり、ましてや日中比較研究はまだ行われていない。そこで、研究 2 では日中両国の大学生を対象に、彼らの家族に対する印象が家族についての評価にいかなる影響を及ぼしているかについて日中両国間で比較検討することを目的とする。

2. 方法

2-1 協力者

日本人協力者は首都圏にある R 大学 1～3 年生、中国人協力者は遼寧省の首都瀋陽市(人口は約 820 万人)にある S 大学(学生数は約 2 万 5000 人)の 1～3 年生であった。各国で回収された質問紙のうち、虚偽回答を含むと判断された質問紙と完成されていない質問紙を除き、最終的な有効回答は日本が 139 部(男性 54 名女性 85 名。平均年齢は 21.7 歳)、中国が 140 部(男性 78 名女性 62 名。平均年齢は 20.4 歳)であった。

2-2. 質問紙

①家族印象尺度：この尺度は小倉(1990)や麻喜(2010)などの研究を参考に、研究者がさらに必要な形容詞を加え、独自に作成したものである。この尺度は青年の考える家族印象を捉えると考えられる 26 個の形容詞から構成され、「とてもそう思う」、「かなりそう思う」、「どちらとも言えない」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の 5 段階で評定を行った。得られた結果に対しては、「とてもそう思う」を 5 点、「かなりそう思う」を 4 点、「どちらとも言えない」を 3 点、「あまりそう思わない」を 2 点、「全くそう思わない」を 1 点として得点化

した。

②家族環境尺度:家族環境尺度は Moos ら(1974)によって開発されたものであり、アメリカにおいて健康管理領域で最も使われている尺度である(大島, 1990)。この尺度は家族関係, 個人的成長, 家族システム維持, の3つの次元を測定するもので, 家族関係次元には凝集性, 表出性と葛藤性の3下位尺度, 個人的成長次元には独立性, 達成志向性, 知的・文化的志向性, 活動的・社交的志向性と道徳・宗教の強調性の5つの下位尺度, 家族システム維持次元には組織性と管理性の2つの下位尺度, 計10の下位尺度があり, 各下位尺度は9項目ずつ, 合計90項目がある。実施する際には協力者に「当てはまる」, 「当てはまらない」の2件法で回答を求めるものである。なお, この尺度には, 家族環境総合尺度得点といったものがなく, 各下位尺度を単独で用いるように作られている。

日本では野口ら(1991), 中国では費ら(1991)が家族環境尺度を紹介し, 検討を行っている。野口らと費らはこの尺度の信頼性と妥当性を各国で検討し, 日本で表出性, 独立性, 達成志向性, 道徳・宗教の強調性と管理性, 中国では表出性, 独立性, 道徳・宗教の強調性, 管理性が家族の状態を捉えるのに不適切な点があることを明らかにした(野口ら, 1991; 費ら, 1991)。本研究では野口らと費らの結果を踏まえて, 研究の目的に合わせて, それぞれの次元から, 両国ともに信頼性・妥当性が十分である5つの下位尺度, すなわち1.親密性, 2.葛藤性, 3.知的・文化的志向性, 4.活動・社交志向性, 5.組織性, を採用した。各下位尺度の意味は表1, 各下位尺度の α 係数は表2に示す。なお, 本研究では調査にあたって, 日本では家族環境尺度の日本語版を, 中国では家族環境尺度の中国語版を用いた。

表1 6つの下位尺度

1.親密性 家族の一体感, 家族の支え合い, 助け合いの程度
2.葛藤性 表面に出ている家族の葛藤。家族の間で, 怒りや攻撃的態度, 争い事がどれだけあるかどうか, 家族が喧嘩をしているかどうか
3.知的・文化的志向性 家庭内での文化的雰囲気。政治や社会, 知的文化的な活動にどれだけ興味をもっているか
4.活動・社交志向性 家族の活動, 社交について, 社交的活動にどれだけ参加しているか
5.組織性 家族の家事などの活動と責任の所在の明確さ。家事や家族旅行など, 家族で行う活動内容がはっきりしているか, 家族で行う活動は, だれが担当で, 誰の責任であるかが明確であり, また, そのことが重要だと認識されているかどうか

表 2 5つの下位尺度の α 係数

下位尺度	α 係数	
	中国	日本
1.親密性	0.75	0.79
2.葛藤性	0.67	0.63
3.知的・文化的志向性	0.64	0.64
4.活動・社交志向性	0.57	0.59
5.組織性	0.63	0.64

3. 結果

3-1 各国における家族印象尺度の因子分析

各国の得点に対して、因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った。回転前の固有値 1 以上の基準を設け、解釈の可能性を配慮し、固有値の減衰状況をみたところ、両国とも 2 因子の構造の可能性が示唆された。そこで 2 因子に設定し負荷量が.35 以上であることを基準とし、再び因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行ったところ、基準を下回った項目が幾つかあったためそれを削除し再々度因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行い、各国の最終結果が得られた(表 3)。なお、回転前の 2 因子の累積寄与率は日本が 50.19%、中国が 53.98%であった。

表 3 各国の因子分析結果

日本		中国			
項目	F1	F2	項目	F1	F2
8.幸福感がある	0.93	-0.10	19.寛大である	0.83	-0.19
6.充実している	0.88	0.03	10.頼もしい	0.82	-0.23
15.親しい	0.82	-0.06	15.親しい	0.78	-0.06
7.安定している	0.82	-0.16	8.幸福感がある	0.76	-0.14
24.満足している	0.80	0.07	16.健康である	0.73	0.03
18.意味を感じる	0.68	0.00	7.安定している	0.69	-0.08
16.健康である	0.67	0.06	20.まとまりがある	0.65	-0.01
20.まとまりがある	0.53	0.16	18.意味を感じる	0.63	0.05
5.大らかである	0.51	0.19	24.満足している	0.55	0.20
19.寛大である	0.50	0.09	5.大らかである	0.49	0.24
14.魅力がある	0.50	0.30	17.一貫性がある	0.48	0.03
10.頼もしい	0.44	0.24	14.魅力がある	0.46	0.36
17.一貫性がある	0.35	0.07	6.充実している	0.39	0.34
1.活動的	0.07	0.67	3.開放的	-0.07	0.72
23.変化に富んでいる	-0.06	0.65	1.活動的	-0.20	0.69
26.能動的	0.05	0.60	11.積極的	0.17	0.64
3.開放的	0.14	0.38	23.変化に富んでいる	-0.04	0.59
11.積極的	0.17	0.36	26.能動的	0.33	0.35

表 3 に示すように、両国の 2 因子の因子構成はほぼ同じであった。したがって、両国のデータを混ぜて因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った。2 因子に設定し負荷量が.35 以上であることを基準とし、因子分析を行ったところ、基準を下回った項目が幾つかあったためそれを削除し再々度因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った(表 4)。回転前の 2 因子の累積寄与率は 53.434 であ

った。因子ごとの信頼性係数 α を求めたところ、第 1 因子は $\alpha=0.920$ (日本は $\alpha=0.922$, 中国は $\alpha=0.903$), 第 2 因子は $\alpha=0.883$ (日本は $\alpha=0.876$, 中国は $\alpha=0.873$) となった。第 1 因子に負荷量の高い項目は「幸福感がある」, 「安定している」, 「親しい」, 「意味を感じる」, 「健康である」, 「満足している」, 「頼もしい」, 「寛大である」, 「充実している」, 「まとまりがある」, 「一貫性がある」など, 安定感や充実感を表す項目と考えられるため, 第 1 因子を「居心地よさ」と命名した。第 2 因子に負荷量の高い項目は「活動的」, 「積極的」, 「変化に富んでいる」, 「開放的」, 「能動的」など, 力動性を表す項目と考えられるため, 第 2 因子を「力動的」と命名した。

表 4 両国の因子分析結果

項目	F1	F2
15.親しい	0.85	-0.10
8.幸福感がある	0.83	0.02
16.健康である	0.78	-0.03
7.安定している	0.78	-0.13
24.満足している	0.73	0.02
18.意味を感じる	0.69	0.01
19.寛大である	0.66	0.03
6.充実している	0.63	0.14
10.頼もしい	0.56	0.17
20.まとまりがある	0.52	0.02
5.大らかである	0.51	0.27
14.魅力がある	0.49	0.23
17.一貫性がある	0.39	0.05
1.活動的	-0.04	0.90
11.積極的	-0.14	0.67
23.変化に富んでいる	0.18	0.61
3.開放的	-0.03	0.53
26.能動的	0.32	0.47

因子相関行列		
	1	2
1	-	.66
2	.66	-

3-2 各尺度の国別・性別による差の検討

まず、各国における家族環境尺度の結果に関しては、「当てはまる」を 2 点、「当てはまらない」を 1 点として得点化した。用いられた各下位尺度の 9 項目の得点を合計し、得られた結果をそれぞれ下位尺度の得点とした。次に国と性別による各尺度の得点に違いがあるかを検討するために、両尺度の得点について、国と性別を要因とする 2 元配置の分散分析を行った(表 5)。

①家族印象尺度

国別の主効果は、2 因子はともに有意であり(「居心地良さ」: $F(1, 274)=23.23$, $p<.001$, 「力動的」: $F(1, 274)=93.36$, $p<.001$), いずれも日本と比べて中国の方が高かった。性別の主効果および国と性別交互作用はすべてにおいて見られなかった。

②家族環境尺度

国別の主効果は、「葛藤」と「活動的・社会的志向性」は有意であり(「葛藤」: $F(1, 274)=7.82$, $p<.01$, 「活動的・社会的志向性」: $F(1, 274)=15.80$ $p<.001$), いずれも日本と比べて中国の方が高かった。残りの下位尺度は有意な国別の主効果が見られなかった。性別の主効果および国と性別交互作用はすべてにおいて見られなかった。

表 5 2 要因による各下位尺度の平均と SD

	性別	日本(N=138)		中国(N=140)		F値 (1, 274)		
		平均値	SD	平均値	SD	国差	性差	交互作用
居心地良さ	男性	3.45	0.84	3.95	0.65	23.23***	n.s.	n.s.
	女性	3.52	0.76	3.88	0.72			
	全体	3.49	0.79	3.92	0.68			
力動的	男性	2.89	0.73	3.87	0.60	93.36***	n.s.	n.s.
	女性	3.11	0.76	3.76	0.67			
	全体	3.02	0.76	3.82	0.63			
親密性	男性	14.42	2.27	14.76	1.21	7.82**	n.s.	n.s.
	女性	14.29	2.10	15.16	1.37			
	全体	14.34	2.16	14.94	1.29			
葛藤性	男性	12.85	1.54	12.27	1.84	n.s.	n.s.	n.s.
	女性	12.51	1.63	12.39	1.81			
	全体	12.64	1.60	12.32	1.82			
知的・文化的志向性	男性	12.76	1.79	13.03	1.74	n.s.	n.s.	n.s.
	女性	12.96	1.92	12.92	1.45			
	全体	12.88	1.87	12.98	1.62			
活動的・社交的志向性	男性	13.35	1.53	14.00	1.48	15.80***	n.s.	n.s.
	女性	13.33	1.42	14.16	1.77			
	全体	13.33	1.46	14.07	1.61			
組織性	男性	11.82	1.33	12.37	1.51	n.s.	n.s.	n.s.
	女性	12.28	1.22	12.29	1.45			
	全体	12.09	1.28	12.34	1.48			

** $p < .01$, *** $p < .001$

3-3 各国における家族印象尺度と家族環境尺度との関係

家族印象尺度と家族環境尺度との関連性を検討するために、日本と中国それぞれ変数について相関係数を算出した(表 6)。

表 6 両国における各下位尺度間の相関係数

		居心地	力動的	親密性	葛藤性	知的文化的志向性	活動社交的志向性	組織性
居心地良さ	日本	-	.556**	.245**	-.306**	.06	.141	.214*
	中国	-	.620**	.691**	-.189*	.328**	.451**	.359**
力動的	日本	.556**	-	-.027	-.06	.231**	.444**	.128
	中国	.620**	-	.459**	-.053	.301**	.498**	.267**
親密性	日本	.245**	-.027	-	-.287**	-.049	.082	.233**
	中国	.691**	.459**	-	-.207*	.214*	.306**	.278**
葛藤性	日本	-.306**	-.06	-.287**	-	.058	-.209*	.045
	中国	-.189*	-.053	-.207*	-	.154	-.049	-.126
知的文化的志向性	日本	.06	.231**	-.049	.058	-	.244**	.159
	中国	.328**	.301**	.214*	.154	-	.386**	.05
活動社交的志向性	日本	.141	.444**	0.082	-.209*	.244**	-	.105
	中国	.451**	.498**	.306**	-.049	.386**	-	.15
組織性	日本	.214*	.128	.233**	.045	.159	.105	-
	中国	.359**	.267**	.278**	-.126	.05	.15	-

** $p < .01$, *** $p < .001$

相関分析結果をふまえ、青年がもつ家族についての印象が家族環境についての認識に及ぼす影響を検討するために、国別に共分散構造分析によるパス解析を行った。モデル作成にあたって、家族印象という潜在因子が家族環境の各側面に影響を及ぼすという基本仮説を設定し分析を行った。その結果、中国では「家族評価」から「知的・文化的志向性」へのパスは有意ではなかった。そこで、これらのパスを削除し再度分析を行い、各国の最終的な結果を得た(図 1, 図 2)。日本では「家族評価」から「親密性」、「葛藤性」、「知的・文化的志向性」、「活動的・社交的志向性」と「組織性」に対して正の有意なパスを示していた。

中国では「家族評価」から「親密性」、「葛藤性」、「活動的・社会的志向性」と「組織性」に対して正の有意なパスを示していた。2つのモデルの適合度指標はともに十分な値が得られた(日本: $\chi^2(5)=3.32$, ns, CFI=1.000,GFI=.979, AGFI=.958,RMSEA=.000 , 中国 : $\chi^2(5)=3.32$, ns, CFI=.961,GFI=.963, AGFI=.922,RMSEA=.044)。図中の矢印は有意なパスを示している。図中の数値は標準化された偏回帰係数を示す。誤差変数と誤差変数の相関係数は省略した。

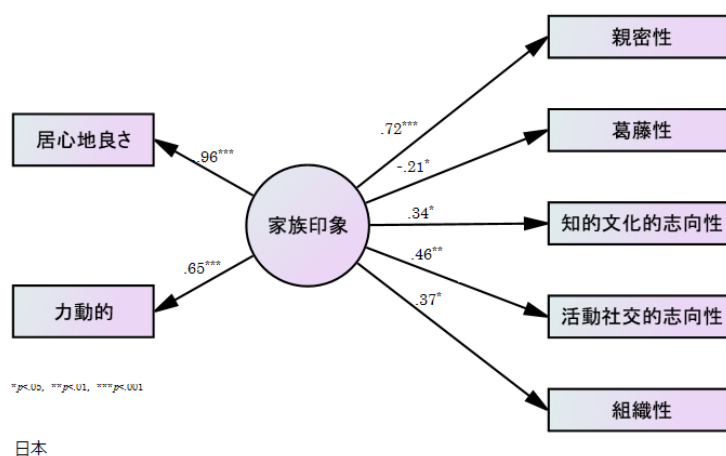


図 1 日本におけるパス解析

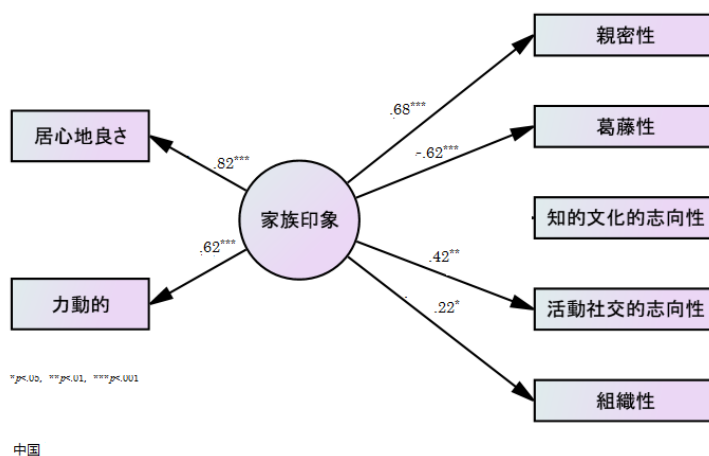


図 2 中国におけるパス解析

4. 考察

4-1 家族印象尺度の因子分析について

家族印象尺度の因子構造は日本と中国はともに「居心地良さ」と「力動的」の 2 因子が得られ、各因子に含まれる項目も共通していた。したがって、青年が自分の家族に対して抱く印象には文化の違いによる明らかな質的な違いは明白ではないと考えられる。また、相関係数を計算したところ、両国において「居心地良さ」は親密性との間に、「力動的」は活動・社会的志向性との間に強い相関が見られた。したがって、「居心地良さ」は家族成員間の関係を指す意味合いが強く、「力動的」は家族成員以外の人との関係をさす意味合いが強いと考えられよう。この意味では日本と中国ともに「居心地良さ」と「力動的」の 2 因子が得られていたという結果から、両国の大学生には自分の家族を考える際に、家族関係が良いかどうか、また外部との関係が良いかどうかという 2 側面から自分の家族に対する印象を評価しようとする傾向があると考えられる。青年期に入ると、家族からの支えは依然として必要であっても、関心は外部に向くようになりつつあると考えられるが、家族印象尺度の因子分析の結果もこのような傾向を示唆していると言えよう。

4-2 家族環境尺度との関係について

1.親密性, 2.葛藤性, 3.知的・文化的志向性, 4.活動・社交志向性, 5.組織性, の 5 つの下位尺度において両国の得点を比較し検討を行った。その結果、親密性と活動・社交志向性において、両国の間に差が見られ、ともに日本の得点よりも中国の得点が高かった。本研究では、親密性を「家族の一体感, 家族の支え合い, 助け合いの程度」, 活動・社交志向性を「家族の活動, 社交について, 社会的活動に参加している程度」と捉えている。したがって、日本の場合と比べて、中国のほうは青年が心理社会的環境としての家族を、親密的であり社会的であると評価する傾向がより強いと考えられる。

4-3. 両国における家族についての印象が家族環境の認識に与える影響

親密性, 葛藤性, 活動的・社会的志向性と組織性については日中両国において同じ傾向が見られ、いずれの国においても青年の家族に対する印象が家族の親密性, 活動的・社会的志向性と組織性に対してポジティブな影響を、家族の葛藤性に対してネガティブな影響を与えていた。本研究では、親密性, 葛藤性,

活動的・社会的志向性と組織性はそれぞれ、「家族の一体感」、「表面に出ている家族の間の怒りや攻撃的態度、争い事」、「家族の社会的活動」、「家族の家事などの活動と責任の所在の明確さ」と捉えていた。したがって、青年が自分の家族に対して良い印象をもつほど、家族成員の一体感が高く、家で表面に出ている争いは少なく、家族の社会的活動が盛んであり、家事などの活動と責任の所在が明確であると評価しようとする傾向が両国から見られた。このことについて、以下のことが考えられる。

まず、Moosによると、親密性と葛藤性はともに家族関係に関する側面である(Moos, 1987)。家族関係が親密であるかどうかはセラピストだけではなく、一般の人にとっても、ある家庭が健康であるかどうかを判断する際の主な基準となる(茂木, 2001)。したがって、大学生が自分の家族に対する印象を評価する際に、家族関係は欠かすことのできない側面だと考えられる。さらに、茂木(2003)は家族関係単純図式投映法を用い大学生を対象に、彼らの現実の家族関係と理想の家族関係を比較したところ、現実の家族がどのようなパターンであれ、理想の家族関係では各家族成員間の距離が近い関係を望むことが示されている。小島(2011)の研究でも同じ傾向が見られている。したがって、青年が自分の家族に対して良い印象をもつほど、家族関係を親密的であり葛藤が少ないと評価しようとする傾向が強いといえよう。

また、青年期後期に入ると、青年たちは外部世界との接触が多くなり、その関心が家族から外へと移る。Carter と McGoldrick(1980)は独身時代から結婚を経て老年期に至るまでの現代家族の発達を 6 段階に区分できるとし、それぞれの段階にはそれぞれの課題があると述べている。そして青年期の子どもを持つ家族の課題は、「青年が家族と家族の外の社会とを自由に出入りできるように、家族の成員間の境界を拡大化, 柔軟化していくこと」であると述べている(Carter, E.A., and McGoldrick, M. 1980)。前述したように、本研究でいう活動的社会的志向性は「家族の社会的活動」、言い換えれば家族と一緒に外部と接することを意味する。外部との社会的活動が多い家庭では青年が家族と一緒に家族の外の社会と接触する機会が多いため、青年が外部と接触することが促進されると考えられる。

さらに、組織性については構造派家族療法の「境界線(boundary)」という観念から理解することができる。構造派家族療法の考えによると、両親サブシステムと子どもサブシステムとの世代境界が明瞭な家族の場合、その家族はい

いわゆる正常に機能している家族と理解される(Minuchin, 1974)。本研究では組織性を「家族の家事などの活動と責任の所在の明確さ」と捉えていた。つまり、ある家族で組織性が高いということは、家族活動の責任所在が明確であることを意味する。このことは家族では各家族成員のそれぞれの役割が明確であり、親と子どもとの境界がはっきりしていると言い換えることができる。この意味では家族の印象が良ければ、家族の組織性についての評価も高くなると考えられる。

日中両国間には親密性、葛藤性、活動的・社会的志向性と組織性について同様の傾向が見られたが、その一方で、知的・文化的志向性については異なった傾向が見られた。日本では家族評価が知的・文化的志向性に正の影響を与えることが示されたのに対して、中国では家族評価が知的・文化的志向性に与える影響は見られなかった。本研究では知的・文化的志向性は「家庭内での文化的雰囲気」と捉えている。したがって、日本では青年が自分の家族の印象を高く評価することが、家庭内での文化的雰囲気が濃厚であると評価することにつながる傾向があるのに対して、中国ではこのような傾向がないと考えられる。これについては次のことが考えられる。高・木藤(2008)が日中の大学生を対象に比較調査を行ったところ、日本の場合と比べて、中国では成績ランキングの上位にいる生徒が優越感をもちやすく、下位の生徒が劣等感を感じやすい、という傾向が示されている。また、顧(2011)は日本人大学生の場合よりも、中国人大学生のほうが学習などが他者との関係において劣等感を触発しやすく、ストレスの原因になる可能性が高いと結論づけている。これらの研究結果を考えると、中国人協力者にとって、家庭内の文化的雰囲気が濃厚であるということは、青年の成績を親が重視するというような意味合いが強くなる可能性がある。成績が親に注目されることは劣等感やストレスなどネガティブな感情を自分が抱いてしまう可能性が高いため、文化的雰囲気が濃厚である家庭に対しては、中国の青年は良い印象をもちにくいと考えられる。

5. 今後の課題

研究 2 では日中両国の大学生を対象に、彼らの家族に対する印象が家族についての評価にいかなる影響を及ぼしているかについて日中両国間で比較検討を行った。その結果、まず日中両国の青年はともに、自分の家族を居心地良さと力動性という 2 つの側面から印象づけようとする傾向があることがわかった。

また、家族に対して印象が良いほど、家族を親密的であり、外部との社会的活動が多く、家事などの活動と責任の所在が明確であると評価しようとするという傾向が両国の青年に見られた。さらに、日本の青年は家族に対する印象が良いほど、家庭内の文化的雰囲気は濃厚であると評価しようとする傾向があるのに対して、中国ではこのような傾向が見られなかった。その理由として、中国の青年にとって、家庭内の文化的雰囲気が濃厚であるということは自分にストレスをもたらす可能性があるためと考えられるからである。

なお、研究 1 では日本の青年よりも中国の青年のほうが自分の家族を親密的と評価しようとするという傾向が見られた。また研究 2 では両国の親密性の得点を比較したところ、やはり日本の場合と比べ中国の得点が高いという、研究 1 と似たような傾向が見られた。このような傾向はおそらく日中両国の青年の家族イメージに関する違いを示唆すると考えられるが、質問紙による調査だけではそれを検討するには不十分なところがある。したがって、今後は質問紙だけでなく、投映法による調査も必要であろう。

IV 研究3 家族イメージの構造と特性に関する日中比較 －「家族イメージシステム法」を用いて－

1. 目的

日本と中国は共に儒教文化圏に属している。儒教文化圏とは、中国の孔子の教え(儒教)が根付いていた国のことをいい、中国をはじめ、日本、韓国のことを指す。儒教において、「家族」はきわめて重要な概念であり、人間社会の基本的な単位とみなされている。ある意味で儒教は家族あるいは家を核として成立した宗教、つまり「家の宗教」と言える(芦名, 2003)。

しかし、こうした家の宗教としての儒教が伝統に根ざしている東アジアにおいても、近代化による都市への人口集中、高齢化、個人主義の浸透などが伝統的な「家」が近代的な核家族へと急激に変貌しつつある。こうした近現代以降の家族をめぐる状況の変化の中、共にアジアの大国であり、文化や習慣など様々な側面で類似点が見られる日中両国の「家族」にはどのような異同が見られるだろうか。

中国と日本の「家族」についての比較研究はいくつかある。岩井・保田(2006)は日本、中国、韓国の3国において、家族観比較研究を行った。この研究ではそれぞれの国の家族観を12の質問項目で測定し、3国間でいかなる差があるかを検討している。調査の結果、特に日本と中国の家族と比較した場合、日本は個人より家族を優先させる考え方があまりなく、親の誇りのために子どもが努力する意識もより薄いということがわかった。また、日中両国の親族呼称上の相違に注目した研究も見られる。劉(2005)は、父方の祖父母に対する呼称は日中両国で同じであるが、中国では母方の祖父母が「外公、外婆」または「外祖父、外祖母」と呼ばれていることを取り上げ、中国の親族間の呼称が、お互いの関係がよく分かるほど明確であるのに対して、日本の親族の呼称は中国ほど明確ではないことを指摘している。そして、このことから中国は日本よりも血縁・親族関係と序列を重視し、身分や目上・目下の関係に敏感であることを示している。

ただこれらの研究は日中の家族の差異を認識することに大きな影響を及ぼすものの、そのほとんどが社会学的な視点から行われたものであり、調査方法も質問紙調査が主である。質問紙法はその利点として、個人に対しても集団に対

しても容易に実施できること、結果の分析に経験を要しないことなどがあげられる。しかしその一方で、家族の下位システム間の関係を測ることができないこと、社会的望ましさによって答えが歪む恐れがあること、国際比較を行う際に用いられる尺度の妥当性を配慮しないといけないことなどのような欠点もある。

質問紙法のこれらの問題に対して築地(2007)は家族査定法が 1.実証性を確認することの可能な量的研究法の検討, 2.二者関係以上を客観的に記述できる質的研究法の検討, という 2 つの課題に対応したものである必要があるとし、シンボル配置技法を唱えている。シンボル配置法とは表現空間にシンボルを用いることで家族関係を投影させ、協力者の家族関係に対する認知を捉えようとする方法である。シンボル配置法であれば、クライアントが検査を行う際に、家族全体という上位システムとその構成要素(主に家族成員)である下位システムを同時に評価できるという点で、家族査定法としての有効性はより高まると考えられる。

シンボル配置法の代表的なものとしては、Family System Test(FAST)があげられよう。この FAST は Gehring(1985)によって開発されたもので、チェスのようなボードに木製の人形を配置させることによって、家族関係を捉えようとするものである。その特徴は家族の親密さだけでなく、家族成員の階層性も評価できることにある。Shu & Smith(2001)は FAST を用いて、中国における三世代家族を調査した結果、祖父母-孫間の関係が比較的親密であり、父方の祖父の階層性(家族内の地位)が最も高かったことを示している。また、日本でも FAST を用いた研究がいくつか行われている(池田, 1996, 2001;河野, 2005;中見・桂田, 2007, 2010)。これらの研究のうち、特に中見・桂田(2007)は FAST の欧米の評価基準をそのまま日本の家族に用いる場合、必ずしも日本の家族関係を的確に捉えられると限らないという問題に対して、FAST を実施したあとに行う面接を分析し、大学生の FAST で表現される家族関係と比較したところ、日本人大学生が親密さを意識しやすいのに対して、階層性(家族内の地位)をあまり意識しないことが分かり、日本の家族に即した FAST の評価基準を提案した。

また、FAST と類似した検査法としては、「家族関係単純図式投影法」(水島, 1981)と「家族イメージ法 FIT」(亀口, 2003)が挙げられる。これらの方法はシンボルを使用することによって家族関係を測定できることにおいて FAST と

共通している。まず、家族関係単純図式投影法は、クライアントが認識している家族関係を視覚的に捉えようとするものであり、一円玉大の円形のコマを用いて、クライアントが自分や父、母といった家族成員を表すコマを円の中に配置するものである(草田・山田, 1998)。茂木(1997)はこの方法を用い、大学生の子どもを持ち臨床的な問題のない家族を対象に家族関係を調べたところ、大学生は両親間の距離が離れているほど、家族の心理的健康度が低く、問題解決が的確になされていない傾向があることを示した。そして、家族イメージ法は亀口(2003)が開発した、家族関係を図式化して把握しようとする投影法である。その特徴としては家族成員同士の「心理的距離」、心理的な向き、家族成員それぞれの「結びつき」の強さを測定できることがあげられる(徳田・柴田, 2005)。

このように FAST, 家族関係単純図式投影法そして家族イメージ法は家族の関係性を捉えるのに優れた方法であるが、いずれも家族内の関係性を把握することに重きを置いている。しかしながら、家族は1つのシステムである以上、その内部で動きが絶えず生じると同時に、家族システムより大きなシステムとしての外部の世界との関わりも絶えず生じると考えられるだろう。したがって、1つの家族の様式を明らかにさせるために、その家族の内部で生じることのみではなく、その家族と外界との関わりについても探求する必要が言えよう。

「家族」は、中国と日本が属する儒教文化の中で非常に重要な概念である。しかしながら、日中両国の「家族」の相違についての比較研究はまだ十分に進んでいないと考えられる。そこで本研究では、日中両国の「家族」という概念について、主に前述した3つの投映法を参考に今回独自に考案した、家族内部の動きと家族と外部との関わりの両方を捉える「家族イメージシステム法」によって比較検討することにより、両国の家族の構造や関係性の特徴を浮き彫りにし、今後の家族のあるべき姿について考察することを目的とする。

2. 方法

2-1 協力者

中国人協力者は中国遼寧省にある、日本の公立大学に相当する大学の1~2年生30名。性別は男性12名、女性18名で、平均年齢は19.6歳。日本人協力者は私立大学の学部3年生と大学院の1~2年生30名。性別は男性5名、女性25名で、平均年齢は22.3歳。

2-2 家族イメージシステム法

本研究では FAST, 家族関係単純図式投影法と家族イメージ法を基にして今回独自に考案した「家族イメージシステム法」を実施した。この方法は、以下に示す道具と手続きによって調査協力者の家族イメージを表現してもらうものである。

2-2-1 道具

①駒：立っている牛（以下は立ち牛と略す）と座っている牛（以下は座り牛と略す），キリン，馬，子馬，シマウマ，石(2個)，チンパンジー，サル，豚，海亀，貝(丸い貝と尖った貝の2個)，羊，仔羊，ロバ，白熊，仔熊，ライオン，猫，犬，アザラシといった，あらかじめ任意に選んだ23種類の動物駒を用いた。

②画用紙：45cm×35cmの画用紙。1つのシステムとして，その家族内のダイナミックだけではなく，家族と外界との関わり方をも検討するために，紙面に短径35cm，長径38cmで左側に開け口のある楕円を描き，そこに「外界」という文字を記し，「外界のライン」を設定した(図1)。

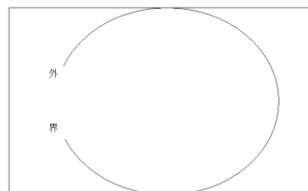


図1 画用紙

③筆記用具：クレヨンとペンの2種類を用いた。

④粘土：子ども用の紙粘土を使用した。

2-2-2.手続き

調査は中国では大学の学生相談室で，日本では大学の実験室と相談所の面接室で個別面接の形で行われた。はじめに，調査協力者にプライバシー保護に関する説明を行い，承諾を得てから，以下の教示を口頭で行なった。「これから『私の家族』というテーマで簡単な作品を作っていただきます。まず，ご家族の成員それぞれについて，イメージに合う動物を決めてください。現在は一緒に住んでいない人やペットなども，加えたいとき，一員として入れてかまいません。どうしてもイメージが合わない時は，粘土で新しく簡単に駒を作っても

かまいません。選び終わった後、駒を紙面上のぴったりする場所においてください。駒以外で、何かを加えたくなくなった場合はクレヨンなどで書き加えてかまいません」。

作品完成後、調査協力者に、使われた駒の意味と選んだ理由をたずねた。続いて、家族成員間の結びつきの強さについては 7 段階(1.非常に弱い～7.非常に強い)による評定を求め、さらに、家族成員間にある感情について自由に記述してもらった。

なお、本研究では主に協力者とその親との関係を分析の対象とする。以下「父子」は協力者とその父親との関係、「母子」は協力者とその母親との関係を意味する。

3. 結果

3-1 駒の数

両国の調査協力者個々人が使った駒の総数(外界に当てる所に置かれた駒も含める)について t 検定を行った結果、日本人協力者に比べて、中国人協力者のほうが使われた駒が多かった($t(62)=16.26$, $p<.01$)。駒の使用数を具体的に検討してみると、使用された駒の平均値は中国人協力者が 8.8 個で、日本人協力者が 5.5 個であった。日本人協力者の作品に出現したのは調査協力者本人、父親、母親、兄弟姉妹、祖父母の 5 種類のみだったのに対して、中国人協力者ではこれらの家族成員に加え、伯父や伯母といった親戚、さらには友達、隣人といった家族成員以外の特定の人物、それにしばしば家に来ている人、嫌な人、将来の恋人といった不特定の人物といった表現が見られた。加えて、馬の駒で「仕事」、石で「困難」、それになじみのない動物で「未知な物事」を見立てるなど抽象な表現もしばしばみられた。

3-2 駒の配置

日中両国の家族の顕著な相違点を検討するため、数量化されない、「家族イメージシステム法」作品の配置という観点からさらに比較したところ、日中両国は①「外界駒」の使用のされ方と、②家族イメージシステム法で使用された駒の配置されている方向性、という 2 つの側面で相違が見られた。

①「外界駒」

「外界駒」というのは円の中ではなく、円の外の部分、つまり、「外界」に当たる部分に置かれた駒のことを指す。「外界駒」を表現した協力者は中国では 30 人のうち、10 人(男性 4 人、女性 7 人)であり、日本では 30 人のうち、2 人(男性 1 人、女性 1 人)しかいなかった。 χ^2 検定で検討したところ、1%水準で有意差が見られ、中国側の数が日本側の数に比べて多かった($\chi^2(1)=7.88$, $p<.01$)。また、各国において、「外界駒」に男女差があるかについて、 χ^2 検定で検討したところ、全ての国において有意な差が見られなかった(中国： $\chi^2(1)=0.34$, n.s.);日本： $\chi^2(1)=1.71$, n.s.)。

なお、「外界駒」によって表された人物や事柄の具体的な内容に関しては、中国では 1)隣人のように特定できる具体的な人物、2)よく家に来ている人たち、親しい友人、嫌な人、恋しい人、支えてくれる人々など特定できない人物、3)仕事、困難、未知な物事といった抽象的な概念、4)飼っているペット、5)道端の石とか、草を食む馬といった風景を構成する駒などの 5 種類であった。

例えば事例 A(20 歳、女)では円の中におかれている駒が自分の家族(本人：貝、父親：馬、母親：サル、父方祖父：チンパンジー、父方祖母：豚、母の弟：立ち牛、母の弟の妻：鹿、母方祖母：カメ、弟：羊)であり、円の外に置かれた「外界駒」は各々個別な意味を持たず、すべてが自分の家族に対しての、外界からの支えを表現している。また、事例 B(19 歳、男)は「外界駒」の意味がそれぞれ違っており、チンパンジーと羊とライオンが「親しい友人」、ホッキョクグマと石と熊が「困難」、猿と子馬とシマウマと亀が「そんなに親しくない知り合い」、シカが「今はまだ存在しないがいずれ出会う彼女」、ロバと子羊が「嫌な人」、そしてアザラシが「未知な物事」を表しているなど、それらが意味するものはバラエティーに豊んでいる。基本的に家族は外界に対して開かれ、それぞれのレベルで関係性や意味の関連を維持しながら、それらすべてを包括したものとして家族を実感・経験していると推察できよう(図 2)。



図 2 中国の事例 A と事例 B の「外界駒」

一方、日本では「外界駒」によって表現されたのが「祖父母」の 1 種類のみであった。例えば事例 C(20 歳, 男)では円の中にある 5 つの駒が食卓を囲んでいて、それは協力者(豚), その兄弟(ゾウアザラシ), 父親(チンパンジー), 母親(牛)とペット(犬)であり、「外界駒」がそれぞれ実在するが同居していない父方の祖父(ライオン)と祖母(仔熊), 母方の祖母(羊)を表現している(図 3)。



図 3 日本の事例 C の「外界駒」

②使用された駒が「外界」に向けて置かれる配置

日本ではすべての駒が「外界」に当たる領域に向けて置かれたのが 30 人中 10 人にいたのに対して、中国ではこのような配置が一切見られなかった。このことから外界に対する意識の持ち方や外界と自分の家族とを分ける境界の設定の仕方にも両国間に明確な違いがあることが読み取れる。



図 4 「外界」に当たる領域に向けて置かれた日本の作品の例

2-3 家族認識の比較

両国の間に家族認識の差があるかについて、両親のイメージ、家族間の結びつき、家族間の感情の 3 側面から検討を行った。

①親に対するイメージ

両国の協力者がそれぞれもつ親イメージについて、父親・母親を表す駒の種

類と全体に占める割合の両側面から分析を行った。「父親駒」に関しては、使われた駒は中国 8 種類，日本 12 種類であった。駒の使われた回数と全体に占める割合を多い順にみると，中国では 30 人の作品のうち，最も多く使われた駒は立ち牛が使われたのが 12 回(40%)，大馬(8 回, 27%)，ライオン(5 回, 17%)であったのに対して，日本では大馬 (6 回, 20%) ，白熊と立ち牛(それぞれ 5 回, 17%)，座り牛(3 回, 10%)であった。また，男女別でみると，中国では男性協力者の 12 人の作品のうち，立ち牛と大馬(それぞれ 5 回, 42%)，ライオン，羊，シマウマ(それぞれ 1 回, 8%)，女性協力者の 18 人の作品のうち，立ち牛(7 回, 39%)，ライオン(4 回, 22%)，大馬(3 回, 17%)で最も多く使われた駒であったのに対して，日本では 5 名男性協力者の場合は大馬，座り牛，カメ，キリンとシマウマ(それぞれ 1 回, 20%)，25 名女性協力者の場合は大馬，白熊，立ち牛(それぞれ 5 回, 20%)，座り牛，ライオンと仔熊(それぞれ 2 回, 8%)，チンパンジー，ゾウアザラシ，鹿(それぞれ 1 回, 4%)であった。結果は表 1 に示す。

表 1 「父親駒」

		計			駒				
		男	女	駒	計	男	女		
中国	立ち牛	12	5	7	日本	大馬	6	1	5
	大馬	8	5	3		白熊	5	0	5
	ライオン	5	1	4		立ち牛	5	0	5
	羊	1	1	0		座り牛	3	1	2
	シマウマ	1	1	0		ライオン	2	0	2
	犬	1	0	1		仔熊	2	0	2
	鹿	1	0	1		チンパンジー	1	0	1
	チンパンジー	1	0	1		ゾウアザラシ	1	0	1
				カメ	1	1	0		
				鹿	1	0	1		
				キリン	1	1	0		
				シマウマ	1	1	0		

「母親駒」に関しては、使われた駒は中国 11 種類，日本 17 種類であった。中国では 30 人の作品のうち，座り牛(8 回, 27%)，大馬(8 回, 17%)，キリン，鹿とシマウマ(それぞれ 3 回, 10%)が最も多く使われた駒であったのに対して，日本では最も多く使われた駒は白熊 (5 回, 17%) ，座り牛(4 回, 13%)，犬と立ち牛(それぞれ 3 回, 10%)であった。また，中国では男性協力者の 12 枚作品のうち，座り牛(4 回, 33%)，大馬(3 回, 33%)，鹿とシマウマ (それぞれ 2 回, 17%) ，女性協力者の 18 人の作品のうち，座り牛(4 回, 22%)，大馬，キリン，

ロバと座り牛(それぞれ 2 回, 11%)が使われた回数が多かったのに対して, 日本では 5 名男性協力者の場合は立ち牛, 座り牛, 豚, ライオンと犬(それぞれ 1 回, 20%)で, 25 名女性協力者の場合は白熊 (5 回, 20%), 座り牛 (2 回, 8%)が最も多く使われた。結果は表 2 に示す。

表 2 「母親駒」

駒		計	男	女	駒		計	男	女
中国	座り牛	8	4	4	日本	立ち牛	3	1	2
	大馬	5	3	2		犬	3	1	2
	キリン	3	1	2		鹿	2	0	2
	鹿	3	2	1		ロバ	2	0	2
	シマウマ	3	2	1		豚	1	1	0
	ロバ	2	0	2		ライオン	1	1	0
	立ち牛	2	0	2		シマウマ	1	0	1
	ライオン	1	1	0		キリン	1	0	1
	サル	1	0	1		仔熊	1	0	1
	キリン	1	0	1		チンパンジー	1	0	1
	羊	1	0	1		仔馬	1	0	1
	白熊	5	0	5		羊	1	0	1
						猫	1	0	1
						カメ	1	0	1
						ゾウアザラシ	1	0	1

②家族成員間の「結びつき」

国と性別による家族成員間の「結びつき」の平均値の違いを検討するために, 両親間, 父子間と母子間の結びつき得点について, 国と性別を要因とする分散分析を行った。国別の主効果は「両親か結びつき」が有意ではなかったが, 「父子間結びつき」($F(1, 55)=13.50, p<.001$), 「母子間結びつき」($F(1, 55)=23.73, p<.001$)は有意であり, いずれも中国の方が高かった。国と性別の交互作用は全てにおいてみられなかった(表 3)。

表3 「結びつき」の分散分析の結果

		中国(N=30)		日本(N=30)		F 値(1, 55)		
	性別	平均値	SD	平均値	SD	国差	男女差	交互作用
両親間	男性	5.92	0.86	5.60	2.07	n. s.	n. s.	n. s.
	女性	6.38	0.89	5.24	1.86	n. s.	n. s.	n. s.
	全体	6.17	0.89	5.30	1.86	n. s.	n. s.	n. s.
父子間	男性	5.62	0.96	4.80	1.79	n. s.	n. s.	n. s.
	女性	6.00	1.16	3.88	1.42	n. s.	n. s.	n. s.
	全体	5.83	1.07	4.03	1.50	13.50***	n. s.	n. s.
母子間	男性	6.31	0.75	4.20	1.10	n. s.	n. s.	n. s.
	女性	6.44	0.81	5.08	1.47	n. s.	n. s.	n. s.
	全体	6.38	0.78	4.93	1.44	23.73***	n. s.	n. s.

*** $p<.001$

③両親，父子，母子間の「感情」

「感情」の分類にあたってはあらかじめこれを肯定的(例：お母さんが好き)、否定的(例：お母さんがうるさい)、両価的(例：お父さんがうるさいが、いろいろやってくれる)、中性的・他(例：感情的には自分がお母さんに似ていない)の4つのカテゴリーを設定した。また、中国の調査協力の記述は筆者が日本語に翻訳した。そしてまず60名の調査対象からランダムに10名を抽出し、心理臨床歴15年のカウンセラーと筆者とで別々に「感情」を前記の4つのカテゴリー分類したところ、一致率が84%であったので、全て筆者の判断に基づいて分類している。両親，父子，母子ごとに、両国の家族成員ペア間の感情を χ^2 検定と残差分析で分析した。

両親の場合では両国の間で1%水準で有意差が見られた($\chi^2(3)=17.37$, $p<.01$)。残差分析によると、中国人調査協力者が、肯定的だと評価する傾向が強く、否定的または両価的だと評価する傾向が低いのに対して、日本人調査協力者は、否定的または両価的だと評価する傾向が強く、肯定的だと評価する傾向が弱い、ということが示された。

父子と母子ではともに両国間で1%水準で有意差が見られ(父子： $\chi^2(3)=23.46$, $p<.01$ ；母子： $\chi^2(3)=24.81$, $p<.01$)、残差分析によると、父子と母子

では類似の傾向が見られた。具体的には、父子間の感情、そして母子間の感情について、中国人調査協力者は肯定的だと評価する傾向が強く、否定的または中性的だと評価する傾向が低いのに対して、日本人調査協力者は否定的または中性的と評価する傾向が強く、肯定的だと評価する傾向が低い、ということが示された(表 4)。

表 4 父子, 母子, 両親の感情の度数, 残差

感情	両親		父子		母子		
	中国	日本	中国	日本	中国	日本	
肯定	度数	29	12	24	11	27	10
	残差	4.9	-4.9	3.6	-3.6	17.9	19.1
中性	度数	0	11	5	6	1	9
	残差	5.3	5.7	5.3	5.7	4.8	5.2
両価	度数	1	4	1	7	2	5
	残差	2.4	2.6	3.9	4.1	3.4	3.6
否定	度数	0	5	0	8	0	8
	残差	2.4	2.6	-2.9	2.9	3.9	4.1

つづいて、各国において、「感情」に男女差があるかについて χ^2 検定と残差分析で分析したところ、すべてにおいて見られなかった(中国:「両親間感情」($\chi^2(2)=2.21, n.s.$), 「父子間感情」($\chi^2(2)=1.42, n.s.$), 「母子間感情」($\chi^2(1)=1.35, n.s.$); 日本:「両親間感情」($\chi^2(3)=0.79, n.s.$), 「父子間感情」($\chi^2(3)=4.88, n.s.$), 「母子間感情」($\chi^2(3)=4.32, n.s.$))。

4. 考察

本研究では「家族イメージシステム法」を用いて、日本と中国の「家族イメージ」の相違について調査を行った。分析したところ、両国の間では 1.駒の数, 2.駒の配置, 3.家族関係の認識において顕著な違いが見られた。

4-1 駒の数

本研究では、協力者は「『私の家族』という作品をつくってください」という教示を受けてから、作品を作成しはじめたため、用いられた駒が協力者によって「家族成員」と見なされた人物を示すといえよう。この理解に基づいて考えると、駒を用いて誰を表したかということは、どのような人が家族成員と見なされているのか、その判断基準を表すと考えられる。周知のように、中国でも日本でも核家族化は深刻になる一方である。この意味でもし両国の協力者たちの作品に表現された家族構造が核家族であるならば、用いられた駒の数に大きな差異がないはずである。

しかしながら、前述したように、駒の数を計算した結果、日本側よりも中国側の方が有意に多かった。さらにもっと詳細に分析していくと、両親、本人、兄弟と祖父母しか表現されなかった日本の場合に比べて、中国ではその他に、1.親友や隣人といった家族成員以外の特定の人物、2.嫌な人や将来の恋人といった不特定な人物、3.困難や未知な物事のような抽象概念も表現されたため、使われた駒の数は多くなったと推測される。したがって、駒の数の違いは中日両国のそれぞれの「家族成員」とみなされる基準が異なっていることを示唆していると言えよう。

両国の間の「家族成員」とみなされる基準にどのような差異があるか、駒の数を計算した結果に基づいて吟味してみると、日本人協力者と比べて、中国人協力者は自分の家族を構成する要素、つまり彼らの家族イメージは直系家族成員以外にも多くのものを含んだ成員から構成されていると捉えることができる。すなわち、日本では「家族成員」とみなされる基準が基本的に「直系血縁」に限られているのに対して、中国では「直系血縁」のみならず、より広い「血縁」が基準となっていると考えられる。さらに加えて、中国では親友や隣人など関わりのある他人が現れることも多く、普段の生活から家族同然の存在であると認識されることから、日常の対人相互の「関係性」も家族成員と認識される基準の1つとなっていると考えられる。

さらに、日本側では親や兄弟のなど具体的な実在する人物のイメージしか見られなかったのに対して、中国側ではこのような具体的なイメージのみならず、「困難」、「将来」などが「外界駒」として表現されるなど抽象的なイメージも見られたということから、日本の家族と比べて、中国の家族では具体的な家族関係がより複雑ということだけではなく、家族に含まれる意味は多種多様なニュアンスをもち、それだけ豊かなイメージが込められていると言えよう。

4-2 駒の配置

駒の配置に関しては、中国側では「外界駒」が多く用いられたこと同時に、使用された駒の多くが「外界」に向けて置かれたことがなかったのに対して、日本側では用いられた「外界駒」が少なかつただけでなく、円の中、すなわち家族の枠内にあるすべての駒が「外界」に向けて置かれていた、という違いが見られた。この相違は両国の協力者の「外界」に対する関心の異なった示し方を反映していると考えられる。つまり中国人協力者は家族の枠を出た「外界」にも駒を置くことで外への関心を示しているのに対して、日本人協力者は「外界」に向けて駒をおくことで関心を表現する、と理解することができよう。

さらに、この外への関心の示し方の違いは両国の家族の境界の柔軟さの違いをも示唆していると考えられる。すなわち、日本の家族では「外界」への興味や関心を持ちながらも、他方で内(家族)と外(外界)とを分ける境界線も明確に存在していて、家族成員がその枠の中で1つのまとまりを形成しようとする力動が働いていると考えることができる。それに対して中国の家族では、内と外の区別をはっきり持ちながらも、その境界線は比較的柔軟であるがゆえに、外界とのやり取りはそれほど抵抗感なく交わされ、外の人を家族の内に取り込むことも容易に行われやすい構造をもっていると推測できる。

この境界線の柔軟さの相違は家族成員と見なされる基準の相違に関係すると考えられよう。すなわち、前述したように、家族成員と見なされる範囲は日本では「直系血縁」という明白な判断基準に限られた傾向があるのに対して、中国ではより広い「血縁」と「関係性」が基準となっているのであり、それ故に、日本の家族の境界線ははっきりしているのに対して、中国の家族の境界線は比較的柔軟であり、外界とのつながりも容易に形成されやすいと捉えることもできよう。

4-3 家族に対する認識

家族関係の認識については①「父親イメージ」・「母親イメージ」、②両親、父子、母子間の「結びつき」、③両親、父子、母子間の「感情」の3点から分析を行った。調査の結果、「結びつき」に関しては日本人協力者と比べ、中国人協力者は家族成員間の結びつきをより強いものとして評定する傾向が認められた。また、「感情」に関しては、中国人協力者が自分の家族を肯定的に評価することが多く、否定的に評価することが少なかつただけでなく、日本人協力者

は自分の家族を両価的または否定的に評価することが多く、肯定的な評価はそれほど多くない、ということが明らかにされた。そして、両親のイメージに関しては中国では両親が牛あるいは馬に集中して例えられることが多かったため、両親のイメージはある程度共通する傾向が見られたのに対して、日本では両親がある動物に集中して例えられることが少なく、いろいろな動物に例えられたため、両親のイメージがある程度で共通するというより、むしろ人によってそれぞれ違っているという傾向が見られた。

これらの結果を踏まえて、日本人協力者よりも中国人協力者のほうが両親関係と親子関係、つまり核家族の成員間の関係を親密であると捉えており、両親に対するイメージも安定していることが分かる。

この違いは家族成員と見なされる両国間基準の相違も関係していると考えられる。というのは、中国の場合では家族成員と見なされる基準がより広い「血縁」と「関係性」であるため、家族全体の構成がより複雑であり親友や親戚などの本人の直系家族でない人たちをもそのなかに含めてしまう可能性がある。それ故に、父・母・子といった直系家族や身内の関係をかえって親密かつ明白なものとして認識していると捉えることができる。これに対して、日本の場合では家族成員と見なされる基準が「直系血縁」であり、内と外との区別がそもそも明白であるため、中国の場合ほど父・母・子の間の関係をあえて親密なものとして位置づけて、他者との関係を明確に区別する必要には迫られていないと考えられる。

以上、両国の間に見られた3つの相違点について論じたが、これらの相違点についての理解を総合的に考えると、本研究では中国と日本の家族イメージに関する主な違いが家族成員と見なされる基準であると言えよう。つまり、「家族」というイメージは日本の場合には「直系血縁」を中核としたいわゆる核家族として認識されやすいのに対して、中国の場合では、「家族」は「拡大家族」、時には「拡大家族」に「関係者」をも加えた複合家族として認識されることも少なくない、ということである。

ここで注意しなければならないのはこれまで論じできた両国の家族の特徴や差異は時間の経緯につれて、小さくなっていくかもしれないということである。周知のように、日本は戦後急激な経済的発展のため、核家族化が進んできた。そして今の中国はまさに戦後の日本のように経済の高速成長期に入り、さらに一人っ子政策もとられており、核家族化はますます深刻になっていく。確かに

今回の研究では家族イメージが日本の場合では核家族として、中国の場合では「拡大家族」として認識されやすいという結論に至ったが、中国の作品のなかに少ないながらも日本の核家族に非常に似ている作品もいくつ見られたということもまた事実である。この現象を考えると、本研究を行った時点では中国における家族イメージはまだ「拡大家族」意識が強いが、将来核家族化がさらに進展していくにつれて、現在の日本の家族イメージと変わらなくなる可能性もありうるだろう。

5. 今後の課題

本研究では投映法を用い、日中両国の「家族」という概念についての検討を試みた。しかし、本研究ではデータ数が少なく、さらに男女差にもアンバランスがあるため、得られた結果が両国の特徴を十分に示しているか疑問が残る。今後の研究において、様々な地域や階層での調査を行い、両国の特徴を十分に表す結果を得ることが必要である。また、本研究で論じられた家族作品は「子」という視座から作成されたものであり、1つの視点からみた家族構造にすぎない。完全な家族像を検討するためにはさらに、「親」、そして「祖父母」といった視点からの検討も必要となろう。

<付記>本論文は、家族心理学研究 27(2)に掲載された論文の一部に加筆・修正を行ったものである。

V 研究4 青年期の家族に対する認識と体験プロセスに関する検討

－「家族イメージ配置法」を用いて－

1. 目的

青年期は人生の1つの大きな節目と言える。今まで家族に支えられてきた子どもが青年になると、家族の存在は依然として不可欠ではあるものの、しだいに彼らの視線は自分の家族から外の世界に向かうようになる。そのためこの時期、青年にとって家族は非常に身近で、しかも外界をも含んだ錯綜した関係になりやすいのが特徴である(岡堂, 1991)。現在、青年期の子どもが学校に行けず家に引きこもっていたり、家庭内で暴力を振るうといったことなどが増えているが、こうした問題の背後には青年とその家族との関係が1つの要因になっていると思われる。その意味で、青年期に入った子どもが自分の家族をどのようにとらえているか、その様態を把握し理解することは重要な意味があると考えられる。2013年の国民生活基礎調査によると、日本の平均世帯人数は2.57人であったが、中国では1979年から実施された一人っ子政策によって、少子化が進行しており、1980年の平均世帯人数は4.4人だったものが、2010年(中国・第6回人口国勢調査)には都市部で2.87人まで減少し、日本の場合とかなり近づいてきている。しかしながら、構造や機能の様相については両国の家族には多少の違いがあることも想定される。したがって、このような家族構造の変化の中で日中両国の青年たちが抱いている家族のイメージを把握し理解することは重要な意味があると考えられる。

家族の関係構造や家族イメージなどをとらえる有効なアセスメント法はこれまでにも数多く開発されている。例えば Family System Test・FAST (Gehring, T. M. 1985; 中見ほか, 2010)などは、家族構造をとらえる上で「親密さ」と「階層性」に着目し、この2つの要因の組み合わせによって家族関係を評価しようとしている。また家族関係単純図式投影法(水島, 1981; 草田・山田, 1998)は、家族の枠を示す直径12cmの円の中に家族成員名を記入したコマを置いていくことで、個々人が抱いている家族に対するイメージを図式化していくというユニークな方法である。その方法では、自分の家族イメージにぴったりあうまで時間をかけて作品を吟味し、作り替えることができるため、心理治療の過程でもしばしば導入されている。

同様に、家族イメージ法・FIT(亀口, 2003 ; 中坪ほか, 2006.)も、自分の家族にどのような視覚的イメージを抱いているかを把握する目的で開発されたものである。対象者には5種類の円形シールがわたされ、それを個々の家族成員に見立てて正方形のボードの上に自分で配置するように求められる。また、相互の結びつきの強さも3種類の直線で表現できる。これを家族が同席している場面で実施することで、家族イメージを皆で共有したりすることも可能なのである。

このように、これらのどれもが家族全体を容易にアセスメントすることができ、かつ数量化しやすく、客観的なデータとして分析するのもに適している心理テストなのであるが、同時に、導入や施行法をさらに工夫することにより、心理療法におけるクライアントの家族イメージを把握し吟味していくための貴重な媒体として活用できる可能性も十分に備えているものであると考えられる。

研究3では、胡(2013)はこれらの家族アセスメント法を参考にしながらも、独自に考案した「家族イメージシステム法」によって日本と中国の青年を対象に家族に対する認識の様相を調査している。具体的には、家族の枠を意味する楕円を中心に、『私の家族』というテーマで箱庭のミニチュアをそれぞれ家族成員に見立てて自由に配置してもらおうというものである。もし、家族成員のイメージに合うコマがない場合、紙粘土で新たにコマを作ることでもできる。作成終了後、作品の説明と内省を求めたのであるが、そこにはこれを単なる家族アセスメント法にのみ留めることなく、臨床の現場における治療技法の一つとして効果的に活用できるように改善していくための示唆に富む内容が多く含まれていた。

その内容をまとめてみると、その一つは、「作品を眺め、吟味しながら説明している内に、そこに投映されている家族は自然に動きだしてイメージは随時変化していき、最初の作品よりも家族をより実感をもって感じられるようになった」というものである。また、「目の前にあるミニチュアの種類や形状に規定されて家族イメージを浮かべていた側面もあるので、選択肢の幅がさらに広がるような多くの種類を備えていたり、抽象度の高いコマや素材が用意されているのであれば、その瞬間に抱いていた家族イメージはより自然に表現できたと思う」という主旨の意見を60名の作成者のうち45名(75%)が述べている。とりわけ曖昧で混沌とした内的世界を抱え、そのニュアンスを言葉でうまく表現することのむずかしさを感じているような青年にとっては、これはとても大切

な条件である。そしてもう一つは、「この家族イメージを何回か繰り返して表現することで、家族を現実やファンタジーというように異なった次元から体験できるし、他者や社会といった日常とは違った視点から多面的にとらえ直すことも可能になるのでは」、といった主旨の指摘も 57 名(95%)から得られた。こうした意見や指摘のどれもが家族をテーマとする治療的アプローチを効果的に展開していくために欠かすことのできない重要な要因であることは言うまでもない。そこで研究 4 では、これらの貴重な意見や指摘を踏まえ、これを心理療法に可能な限り適用できるように家族イメージシステム法の改善を試みた。

このことを実現するために、今回の研究では調査のための素材として、基本的には家族イメージを多面的、多層的に捉えることを可能にする箱庭用具を表現媒体として調査に導入することにした。箱庭は、認知世界の具体的、現象的把握をめざすものではあるが、それは単に家族に対する過去の出来事や現状の再現にとどまるものではなく、言葉ではうまく表現しがたい漠然とした家族状況や将来や理想の家族、それに仮想の家族のヴィジョンといったものまでなど、表現できる範囲は比較的広い媒体であるといわれている。しかも家族イメージとして実際の家族成員に加え他の人間や動物などのコマを使用する必要が出てきたような場合、箱庭の箱(72mm×52mm)程度の表現空間はどうしても必要であり、またその箱そのものが作成者の表現を保護する機能も果たしている。さらに、序論ですでに論じているように、①ミニチュアの効果的な活用、②表現される物語性、③砂箱の機能、といった側面において Family System Test(FAST)や、家族関係単純図式投影法、それに家族イメージ法(FIT)といった既存の方法と比べ箱庭用具セットの方がイメージを捉えるのにより適切な表現媒体であると考えられる。

そこで研究 4 では、これらの考えを踏まえ「家族イメージシステム法」を改良し、新たに「家族イメージ配置法」を考案した。これは作成者に多種多様なコマやミニチュアを自由に用いて箱庭という空間に『家族』をテーマに 10 回連続して作ってもらうというもので、その作成の過程での体験や表現された内容をじっくり吟味したり、理解することに主眼を置いた方法である。これにより、家族の箱庭作品で表現されるテーマや家族成員などを象徴するコマの使われ方の特徴、また作成過程での自分自身や家族に対する新たな気づき、課題の自覚などを中心に分析することで、「家族」というものに対して日中両国の青年が抱いているイメージについて検討を試みるとともに、「家族イメージ配置法」の臨

床での適用の可能性を検討することを目的の1つとする。

なお、箱庭療法は日本では多く行われている心理療法の1つであることが言うまでではないが、中国でも広く知られている。箱庭療法は張(1998)や申(2004)によって導入されて以来、箱庭は中国において子どもから大人までの心理療法に盛んに利用されており(李・楊, 2014), うつ病や強迫性障害などに箱庭を用いた治療に関する研究が進んでいる(張ほか, 2010; 譚ほか, 2010; 訾, 2010; 李ほか, 2011; 林ほか, 2011; 徐ほか, 2011; 張ほか, 2012)。また、家族全員が協同に1つの箱庭作品を作ってもらい、その制作過程を観察し検討することによって、その家族の関係性やダイナミクスを分析しようとしているという作成者の家族をアセスメントしようとする動きもある(徐・張, 2007)。さらにわずかながら、箱庭表現の国際比較も行われている(角田・沈, 2002)。

このように、中国では箱庭に関する研究が盛んに行われているが、それらの研究が大学生や小学生の箱庭作品の全体的な特徴をまとめることや、心理面接の際に作られた箱庭作品のミニチュアの象徴的な意味を理解することに集中していたが、作られた作品イメージを単に外的刺激と知覚によって生成された「視覚像」ではなく、あくまでも個人に内的起源をもつ心的事実として扱うという「臨床イメージ」を重視する立場に立ち、作り手の心の世界を見ようとする視点に立った研究はまだ多くない。さらに、近年、日本では箱庭に関する研究において、箱庭の制作者の体験に重きが置かれた研究の重要性が指摘され(中道, 2010), このような視点をもつ研究は多く行われているが(例えば, 平松, 2001; 石原, 2001, 2002; 大前, 2007)が、中国ではこのような研究はほとんどなされていない。

そこで、本研究では事例数としては少ないが、中国の心理臨床ではまだほとんど触られていない「臨床イメージ」という視点から、家族イメージ配置法を用い青年の家族イメージを検討する。それと同時に、家族イメージ配置法、つまりテーマを「家族」と指定した箱庭制作を心理療法に適応させるための有効な手がかりを検証し、臨床実践に効果的に活用するための糸口を見出すことも試みたい。

2. 方法

2-1 作成者

日本人作成者は8名(男性3名, 女性5名, 平均年齢は22.88歳, 19歳~25歳幅), 中国人作成者は4名(男性3名, 女性1名, 平均年齢は23.75歳, 22歳~27歳幅)。調査作成者のプロフィールを表1に示した。日本人作成者は主に心理学を専攻する大学生と大学院であり、箱庭制作については知っているものの、実際に体験したことがなかった。中国人作成者ア、ウ、エはパソコン関係会社の新人社員であり、大学では経済、情報処理などを専攻した。作成者イは美術を専攻する大学院生である。4人とも心理学に関心があるため、調査に協力したが、全員箱庭制作について知識がなかった。なお、作成者イは、姉は父親と、兄は母親と血縁関係があり、両親が再婚して作成者イを生んだ。また、作成者エが中学校2年生のとき、父親が他界し、母親は再婚していない。

表1 作成者のプロフィール

国	作成者	性別	年齢	職業(当時)	家族構成	家族との同居の有無
日本	A	女	21	大学生4年生	父親, 母親, 弟	無
	B	女	23	大学院1年生	父親, 母親, 姉2人	無
	C	女	24	大学院1年生	父親, 母親, 妹	有
	D	男	19	大学1年生	父親, 母親	有
	E	男	22	大学院1年生	父親, 母親, 弟	有
	F	男	20	大学生3年生	父親, 母親, 姉, 妹	有
	G	女	25	大学院1年生	父親, 母親, 姉, 弟	無
	H	女	21	大学4年生	父親, 母親, 妹2人	
中国	ア	男	27	会社員2年目	父親, 母親	有
	イ	女	22	大学院1年生	父親, 母親, 姉, 兄	有
	ウ	男	27	会社員2年目	父親, 母親	有
	エ	男	25	会社員1年目	母親	有

2-2 材料

日本では大学で常設されている箱庭用具セットを用いた。中国で実施する場合は砂箱(縦×横×高さは 57×72×7cm)、人、動植物、建物などからなっている市販されている箱庭用具セットを用いた。人物のコマは年齢層や人種、職業などに偏りがないように、赤ん坊から老人までと年齢幅は広く、人種や職業なども多種多様なものが約 50 個備えられている。動物や植物も種類は豊富で両方を合わせると 90 個以上が棚に並べられている。また、家や車、橋、トンネル、ベンチ、それに各種の遊具など、建築物や車両などもバラエティーに富んだ種類のものが 60 個ほど用意されている。なお、箱庭用具セットの他、両国で面接を実施する際に、調査同意書、作成後の質問の記録用紙、デジタルカメラと IC レコーダーも準備した。

2-3 手続き

いずれの国において、次の手続きで面接を進めた。

①倫理の説明：第 1 回目の調査の際に作成者に対して本調査の概要と原則として 10 回の参加が必要となることを説明するとともに、面接の途中で気分が悪くなった場合、調査はいつでも中断ができること、希望があればいつでもとりやめることができること、また個人情報の管理を徹底すること、不調を訴えた場合は臨床心理士が対応するように準備を整えてあることを伝え、調査同意書の署名をしてもらった。さらに、作られた家族イメージの作品はデジタルカメラで撮影し、作品完成後の半構造化面接の過程は IC レコーダーで録音することについても承諾を得た。

②作品の制作：第 1 回から第 10 回まで、「ご家族のことを心の中でイメージし、それを箱庭で自由に表現してください」と教示し制作を始めてもらった。各回の間隔は原則として 1~2 週間(10 回でおよそ 3~4 ヶ月間)であり、1 セッションの所要時間は約 45 分~1 時間となっている。

③作成後質問：第 1 回から第 10 回まで、作品が完成されたあとに毎回半構造化面接を行い、作成者に「1.ここに配置したコマはそれぞれ家族の誰を表していますか」、「2.この家族の箱庭にタイトルをつけて内容を説明してください」、「3.ここで展開されている家族関係は主にどのようなものですか」、「4.この作品を作成していて、あるいは今内容を説明していてあなたのご家族やご自身について新たに気づいたこと、課題だと思ったことはありますか」を質問した。この質

問 4 は、家族イメージが深まるにつれて、作成者が家族の中での自分について理解を深め、それに伴いこれから自分や自分の家族が乗り越えていくべき課題についてどのような自覚がもてるようになってきているかを捉えるために設けた。なお、調査者からの付加的な質問は不明な点、疑問な点など必要最低限にとどめた。

2-4 分析方法

すべての調査終了後、まず、中国人作成者の作品については、筆者により中国人作成者の面接記録を中国語から日本語に訳した。その次に作成者全員について、同一の作成者の作品の展開に関して予測や先入観が入るのを出来るだけ抑え客観性を維持するために、12人×10回=120セッションからブラインドで1セッションずつランダムに抽出し、「1.作品全体に展開される家族のテーマ、関係性」、「2.家族成員を表現するコマの種類(人形、あるいは動物など)」、「3.作品を通じて得られた家族や本人についての気づき、課題」、という3つの観点から各作成者の作品を分析した。具体的には、各セッションごとに筆者と1名の臨床心理士がそれぞれに独立して、家族イメージの作品と面接の記録を資料に、前述の3つの観点について要約してカードに記入した。今回の調査ではあらかじめ明確な分類カテゴリーや段階評価尺度などが設定されている訳ではないので、一致率を数値で示すことはできない。しかし家族イメージとして表現された内容の主旨の理解については概ね85%程度で一致していることは2人の分析者間で確認している。また主旨の理解が違っていたり意見が異なる場合は、両者の記述内容を突き合わせ、時間をかけて十分に協議し調整している。

3. 各事例の概要と分析

以降は前述した3つの観点を中心に、日本人作成者8名中国人作成者4名計12名作成者の10回のセッションの概要をまとめ、各々作成者の継続的に表現された家族イメージについて分析を行う。以下は、①はテーマ・関係性、②はコマの種類、③は気づきや今後の課題を示す。なお、コマの種類に関しては、家族成員を表すコマに限定して検討を行う。また、家族成員を表すコマは人間のコマを見立てて配置しているものである場合「人形」、動物やキャラクターのコマに置き換えて表現しているものである場合「動物」と記入する。

日本人作成者 A



作品 1

タイトル：「お昼の 12 時ごろ」

- ① 家族の日常：アパート暮らしの自分と実家という風景
- ② 人形
- ③ 離れていてもお互いのことを考えている



作品 2

タイトル：「潮干狩り」

- ① 家族で潮干狩り：小学 6 年. 皆で楽しく遊び, 親は子どもを見守っている
- ② 人形
- ③ 弟とはもう少し仲良くしなければと思う



作品 3

タイトル：「行楽日和」

- ① 家族で栗拾い：皆は森に住む熊や蛇にも注意を払っている
- ② 人形
- ③ 最初はバラバラでもいつの間にか家族はまとまっていった



作品 4

タイトル：「家族旅行」

- ① イルカショー：家族で水族館に行ったときのこと(中学生)
- ② 人形
- ③ 自分たちが大きくなると家族旅行も難しくなるのでは



作品 5

タイトル：「田植え」

- ① 田植え：祖父母の畑で春恒例の田植えを親戚，家族で手伝っている風景
- ② 人形
- ③ もっと大人の世界にも入っていけるようにならなければ



作品 6

タイトル：「買い出し」

- ① 買い出し：弟とコンビニに買い出しに行こうとしている
- ② 人形
- ③ 平凡な普通の日と同じ。のんびりした気分でしたらこのイメージが浮かんだ



作品 7

タイトル：「日常」

- ① 秘密基地：小学生の時，弟と川の堰を乗り越え，ドキドキしながら秘密基地をつくった
- ② 人形
- ③ 川(次のステップ)を飛び越える



作品 8

タイトル：「夕暮れの海」

- ② 夕日の思い出：小学生の時，家族で海に遊びに行った時の回想．弟と砂でゲームをして遊んでいる
- ③ 人形
- ④ 弟にはもう少し寛大な姉でありたい



作品 9

タイトル：「動物園」

- ② 親離れ：大学入学直前，家族で動物園に来ている
- ③ 人形
- ④ これからアパートで一人暮らしが始まるので淋しいが早く親離れしなくては



作品 10

タイトル：「ドライブ」

- ① 買い出し：家族で都会に買い物に来た．買いたいものは自分のお小遣いで買うつもりでいる中学生の自分
- ② 通りを走る車のみ 5 台
- ③ 特に感想なし

日本人作成者 A の流れの分析

I 作成者 A の説明	
項目	変化
1.ストーリー	終始家族との活動に関するものであった。
2.家族関係	多少紆余曲折は見られたが、基本的には家族との良好な関係、とくに弟との良い関係が見られた。
3.家族の雰囲気	第 1 回目は普通の日常生活の雰囲気であったが、第 2 回から第 7 回までは楽しい雰囲気になった。そして、第 8 回と第 9 回は寂しい雰囲気であったが、第 10 回は再び普通の日常生活の雰囲気になった。
4.家族の課題	相手との関わり方や思いやり等、日常生活に関するものが多かった。
5.作成者(主人公)の課題	一見すると様々であったが、1 回目の課題「実家に帰るか、東京に残るか」が一貫して課題になっている。
6.気づき・感想	前半は家族が集まることの難しさについてもの多かったが、後半になって自分がどれにするか決断するときの気持ち、つまり自分の気持ちに対する気づきについてのものが多くなった。
II 分析	
<p>作成者 A の 10 回の作品は大きく 3 つに分けられる。第 1 は 1 回目の作品である。これはそれぞれの家族成員について説明する作品であり彼女の家族に対する認識を窺うことは難しいかもしれないが、彼女の抱える「実家に帰るか、こっちに残るか」という課題が見られた。</p> <p>第 2 は第 2 回から第 5 回までの 4 回の作品だと考えられる。この部分では作成者は「子ども頃の家族との遊び」を主なテーマとして作品を作っている。そして、「子ども頃の家族との遊び」に関しては第 2 回から第 5 回まで楽しい遊びその思い出は楽しいものだったと述べた。第 2 回、第 3 回の比較的純粋な楽しさから、第 4 回の最後の家族旅行を楽しんでおこうという気持ち、第 5 回のいとこたちとの遊ぶのは楽しいが、もうその年ではないから大人の女性の世界に入っていくことへと変わっていく変化が見られた。これは子どもから大人への</p>	

変遷と言えよう。

第3は第6回から第10回までの5回である。この間の作品の特徴としては、作品では家族が意識されているものの、それほど重要ではなくなり、その代わりに作成者が自分自身についてより強く意識するようになったことが挙げられる。この意味で、ここでは作成者が家族から分離しようとする傾向が見られたと考えられるだろう。同時にここでは家族との分離によって生じた寂しさを伴いながらも、独立という試み、意志を作成者が強く体験したと言えよう。

以上のことを踏まえて作品を全体的に見てみると、作成者Aは10回の箱庭体験のなかで、子どもときの楽しい遊び、そして大人の世界に入ろうと意識し、最後は家族からの分離という流れを体験したと考えられ、作品を重ねるごとに作成者Aの家族に対する認識は着実にまとまりと統制がとれるようになり、明確化の方向に変化していることが理解できる。すなわち、テーマはあくまでも家族との関わりなのであるが、その体験の過程を通して、作成者は自己へも視点をおけるようになり、自立・成長に向けて寂しさといった複雑な感情体験も認められるようになり、自己認識はより明確になっていったと考えられる。

日本人作成者 B



作品 1

タイトル：「私の家族」

- ① 拡大家族：祖父母の家族も一緒になった三世代家族の平穏な日常風景
- ② 人形
- ③ 父が病気になったら働いて看病し家族を支えていくつもり



作品 2

タイトル：「葛藤」

- ① 姉との葛藤：我儘な姉への反発心。親も甘やかしている
- ② 人形
- ③ 大人にならなければならない反面、母には甘えたいという気持ちがある



作品 3

タイトル：「境界線」

- ① 家族の境界線：自分の家族，祖父母の家族，姉夫婦の 2 家族を並置
- ② 人形
- ③ 相互に境界線は引かれているが，それを超えて親密になったり喧嘩をしたり



作品 4

タイトル：「誕生日」

- ① 父親の誕生日会：全員で父の誕生日を祝っている。一家団欒
- ② 人形
- ③ もう少し家族，姉のことをいたわれるようにならなければ



作品 5

タイトル：「期待と不安」

- ② 出産間近(1)：姉の子どもの出産を控えた家族。お互い緊張しながら気遣いも
- ③ 人形
- ④ 出産後この家はどうなるのかという期待と不安からトンネルを置いた



作品 6

タイトル：「見守る」

- ① 出産間近(2)：家族は姉を温かく見守り，自分はクールな気持ちで見ている
- ② すべてが動物のミニチュア
- ③ 姉を中心に優しい雰囲気支え合っている



作品 7

タイトル：「安全な場所」

- ① 安全基地としての家族：家族はいつでも帰れる守られた場所
- ② 人形，豚(自分)
- ③ 自分(豚)も社会に出たいが変化が苦手



作品 8

タイトル：「変化」

- ② 赤ちゃん誕生：皆が赤ちゃんを見守りながらお喋りをしている
- ③ 人形，怖いものの象徴としてのゴリラ
- ④ 突然誰か家族の死を意識したら怖くなる



作品 9

タイトル：「仲良し」

- ② 姉と仲直り：姉と仲直りをして手をつなぎ周囲はそれを見ている
- ③ 人形，家族の危うさを吊橋で表現
- ④ 家族が互いに適切な距離をとることの大切さ



作品 10

タイトル：「対面」

- ① 家族の個別性：家族一人一人をイメージしてコマを置く．お互い温かく支え合っている
- ② 全員が動物
- ③ 家族全体のバランスを保つことの大切さ

日本人作成者 B の流れの分析

I 作成者 B の説明	
項目	変化
1.ストーリー	第 4 回までは現在の家族の様子について説明するものが多かったが、第 5 回からは将来家族がどう変わっていくかについての展望も多くなった。
2.家族関係	基本的に姉が家族の中心であるという観念を持ち家族関係全体を認識することが多かったが、この認識に伴う感情はネガティブなものからポジティブなものになり、最後にはより客観的なものになった。
3.家族の雰囲気	ネガティブな雰囲気から、「期待と不安」が混じった雰囲気を経て、最終的には「穏やかで平和な」雰囲気になった。
4.家族の課題	家族のバランスが崩れてしまうことに関するテーマが多かった。その理由は両親の不仲という想像上のものから、姉のわがままという具体的なものになり、最後に家族の誰かの突然の死亡という漠然としたもの変わった。
5.作成者(主人公)の課題	第 1 回と第 2 回は大人になることなど漠然としたことであった。第 3 回から第 5 回までは姉との関係に関するものが多かった。第 6 回は自分の甘えたい気持ちに関するものであり、第 7 回から第 10 回までは将来家族と離れ外部の世界で自分の力でやっていけるかどうかというものが多く見られた。
6.気づき・感想	第 7 回までは自分と姉との関係あるいは姉についての認識に関するものが多く見られたが、第 7 回からは家族そののが自分にとってどのような意味を持つのか、さらには自分自身についての明確な認識に関するものが多くなった。
II 分析	
作成者 B の作品は 2 つの部分に分けることができる。まず前半は第 1 回から	

第4回までである。この部分の作品は、父親の誕生日パーティーなど家族の状況あるいは家族関係を現実的に即して再現しようとするものが多くあった。とくに姉との関係がうまくいかないことをテーマとするものが多数見られた。また、作品の表現の仕方としては、家族成員のミニチュアが人間のミニチュアであり、家族全員が緊密に1つのところに集中して置かれることが多かった。

後半の部分は第5回から第10回までであり、前半と異なった所が多くあった。まず、この部分では作品は家族の状況を説明しようとするものではあるが、前半と違い、赤ちゃんが生まれた後の家族というような、これからの家族の行方についてのものが多くなった。また、前半では1人の家族成員としてではなく、1人の個人としての自分自身について触れることがあまりなかったが、後半では社会の中に1人の個人としているというような内容が多くなり、家から外に出ようとする自立の動きと意欲が多く見られた。さらに、作品の表現として、第6回から家族成員のミニチュアが人間ミニチュアからそれぞれ家族全員の特徴を表すのに適した動物に変えられている。動物というような家族成員の特性を抽象的に表すミニチュアを用いることで表現はかえって自由になり、家族成員のミニチュアの配置も閉鎖的から開放的になり、作成者のミニチュアがほかの家族成員のミニチュアと離れていくことが見られた。

つまり、作成者Bは10回の箱庭作品を繰り返し体験しているうちに、家族そのものに対する認識が自分を守ってくれている場所というものから、自分の社会への進出や自立を支えてくれている安全基地というものに変わり、自分自身も家族から独立しようとする心の動きが芽生えはじめると考えられる。

なお、前後期ともに、姉に関するものが数多く見られていることは特徴である。まず、最初は姉のわがままな態度に「イライラする」というネガティブな感情を抱いたが、何回かの作品を作っていくうちに、なぜ姉にネガティブな感情を抱くのか、その理由を自分に問うようになり、「自分も母に注目されたい」という気持ちに気づくようになり、「家族だから姉をサポートしたい」というように分化が進んでいる。そして、姉はわがままという認識に変わりはないが、「姉のほかの面を見つけたい」と思うようになっている。

前述したことをまとめると、作成者Bは箱庭作品を繰り返し体験していくうちに、家族を総括的に捉えられるようになるとともに、特定の家族成員に対する認識のみならず、1人の個人としての自分自身に対する認識にも変化が生じたと考えられる。

日本人作成者 C



作品 1

タイトル:「夏休み」

- ① 夏の思い出(1):夏休みに田舎の祖父母の家を家族で訪ねている
- ② 家族成員は登場しない
- ③ 外とはあまり交流がない家族だが内は穏やかな雰囲気



作品 2

タイトル:「夏休み part2」

- ① 夏の思い出(2):家族で海に来てただボーとしている
- ② 動物
- ③ 淡々としていて、ときに「この家族はバラバラでは?」とも思ったりする



作品 3

タイトル:「サバイバル」

- ① 夏の思い出(3):「前回の続き」だがファンタジー. キャンプを無邪気に楽しんでいる
- ② 動物
- ③ 自分だけ「お澄まし」のキャラクターかもしれない



作品 4

タイトル：「牧場」

- ① 牧場見学：自然が好きな家族なので遊びに来た
- ② 動物
- ③ 家族の一体感を感じるが、妹だけ外れているのが気がかり



作品 5

タイトル：「大航海」

- ② 大航海：家族が舟に乗って航海に出るが荒波にもまれている。やがて太陽が出てきて海は穏やかに
- ③ 動物
- ④ 冷静に家族のサポート役になりつつあること



作品 6

タイトル：「我が家」

- ① イメージ上の家族：家族がお花畑の中を揺れるトロッコで帰っていくところ
- ② 動物
- ③ 誰も怖がらずに機嫌良く楽しんでいる



作品 7

タイトル：「秋の行楽」

- ① 動物園：家族が動物園に来て遊んでいる
- ② 動物
- ③ 皆は楽しんでいるが、私はもっと積極的に家族とかかわらなければ



作品 8

タイトル：「犬の躰」

- ② 犬を飼う：家で犬を飼うことになった。ちゃんと躰けようとしている
- ③ 動物
- ④ ペットを仲介にして家族は以前より一つにまとまっている



作品 9

タイトル：「バレーボール」

- ② バレーボール試合：自分と妹のチームと父親のチームとの試合，母は点数係
- ③ 動物
- ④ これで家族の団結力が深まっていった感じ



作品 10

タイトル：「山」

- ① 家族登山：家族で山に登り山頂には誰も知らない家があって，結局それが自分たちの新しい家になる
- ② 動物
- ③ 前よりも温かみのある時間を過ごす

日本人作成者 C の流れの分析

I 作成者 C の説明	
項目	変化
1.ストーリー	第1回だけ実際にあった出来事であった。残りの9回は全部ファンタジーに近いストーリーであった。また、第2回から第7回までは家族4人で旅する場面であったが、第8回と第9回は家族4人で家にいる場面となり、第10回は再び家族4人で旅する場面に戻ったが、旅の目的地が第2回から第7回までの作品よりも明白になっている。
2.家族関係	第1回は自分を中心とした家族関係であった。第2回から第7回までは基本的に家族がそれぞれのことを考えられる関係であり、具体的な動きも認められるようになっていた。第8回から第10回まではまとまった家族関係が見られた。
3.家族の雰囲気	ネガティブなものは終始なかったが、第1回と第2回は和やかな雰囲気であり、第3回から第9回までは楽しい雰囲気となったが、第10回は和やかで安心感のある雰囲気変わった。
4.家族の課題	第1回と第2回は家族が自分勝手にバラバラということが課題にされている。第3回から第10回まではストーリーの場面によって、家族の課題も違ったが、家族のまとまりをいかに強めるかに関するものが多かった。
5.作成者(主人公)の課題	第1回から第2回までは家族との関わり方に関することが課題にされた。第3回から第10回まではそれぞれの場面において、家族の団結力を高めるため具体的にどうすればいいか、や家族内における役割に関することが課題として挙げられたことが多かった。ただ、第7回から第10回までは自分の役割について明確な認識を持ちながら、家族に対する甘えのためその役割を十分に果

	たせないのではないかと懸念する傾向も見られた。
6.気づき・感想	最初は漠然としたものしか語らず，また家族の凝集性のなさにしか触れていなかったが，回数を重ねるにつれて少しずつもともと存在していた家族の凝集性に気づくようになり，また家族成員，とくに妹について自分との間に共通点を見つけたことで受容的な認識のし方を示し，より良い家族になるために家族と積極的に接しようとする意欲が見られた。最後は家族に甘えたい気持ちと家族を大切にしたい気持ちとの葛藤に気づくようになり自分自身そして家族に対する認識がより深まったコメントが見られた。
II 分析	
<p>自分の家族を主人公としたファンタジー的な物語は作成者 C の作品の特徴の 1 つだと考えられる。これらの物語自体は必ずしも作成者 C の今の家族の生活がそのまま反映したものとは限らないが，作成者 C は自分の本音を隠すためこのような物語を作成したわけではなく，自分の家族に対する認識をストーリーの中に確実に投影させていたと考えられる。</p> <p>また，全体的に見ると作成者 C の作品は幾つかの段階に分けることができるが，家族に対する認識に変化が起きるとともに，自分自身についての認識も変化することがもう 1 つの特徴と考えられる。</p> <p>第 1 段階は第 1 回から第 2 回までだと考えられる。この段階では家族成員のミニチュアを選ばなかったり(第 1 回)，ミニチュアを選んでも「ただ家族でいるだけ」とダイナミック性の少なかったストーリーだった(第 2 回)。また，この段階では作成者 C はテーマの 1 つである家族としてのまとまりの弱さについて言及した。従って第 1 段階はこれからイメージが動き出すための準備期だと考えられる。</p> <p>第 2 段階は第 3 回から第 5 回までだと考えられる。この段階ではストーリーの内容が豊かに，しかも動きを伴ったものになり，家族に対するイメージが活性化されたと考えられる。また，家族に対する認識にも変化が生じた。まず，家族と楽しく遊ぶ場面を表現したことで，自分が求めている家族像をより具体的に捉えられるようになっていく。そのあと，自分の家族とくに妹について，</p>	

自分と似たような経験があると思うようになり、理解しがいと感じていた妹に、より受容的な態度がとれるようになった。最後に、家族と一緒に試練を耐えていく場面を表現したことによって、家族のまとまりを改めて認識した。なお、これらの家族に対する認識の変化が生じてくるにつれて、家族における自分の役割について「裏方みたいな感じでサポートしていく」や「妹にアドバイスとかもできる」という認識が芽生えてきたと考えられる。

第3段階は第6回から第9回までである。この段階ではより良い家族になるために、作成者Cは自分がどうすればいいのかについて考え、前の段階で見られた外側から家族を眺めるという姿勢から、家族の内側に入り積極的に家族と関わろうとする強い意識が中心的なテーマになったと考えられる。しかし、それと同時に、「急に変わると恥ずかしい」というような態度の変化に対する懸念も見られた。

第4段階は第10回である。この段階では家族に対し、積極的に関わりたいと思うと同時に、自分が果たすべきことを果たせるかという懸念を意識するようになった。さらに、それを理解するために内省を深めたところ、家族に甘えたい気持ちと家族を大切にしたい気持ちとの葛藤が自分の中にあることに気づくようになり、自分自身そして家族について、より統合的に認識することができるようになったと考えられる。

なお、箱庭を体験することによって、家族からの自立をより明白に意識できるようになることは今までの協力者のほとんどに見られたが、作成者Cの場合、むしろ箱庭を体験することによって自分の家族と親密な関係を作りたいという意識を強めたと考えられる。この考えから、子どもの家族からの自立とは家族の支えを土台にして、心理的側面のさらなる発展を図ることであり、しっかりした家族関係なしにはなかなか実行しにくい過程であると考えられる。

日本人作成者 D



作品 1

タイトル：「私の家族」

- ① 家族の日常(1):親は街で働き学生の自分は家
にいる。橋の向こうの都会は危険もある
- ② 人形
- ③ 父を中心に信頼感でまとまっている



作品 2

タイトル：「私の町と家族」

- ① 家族の日常(2): 早朝父は仕事に出かけ、太陽
が昇って新しい朝を迎える街はすがすがし
い
- ② 人形
- ③ 安心しきっている



作品 3

タイトル：「私の夢と支え」

- ① イメージ上の家族: 父はビルで働き、母は森
の中にいる。自分は道化師になって人に振る
舞っている
- ② 人形
- ③ 失敗しても見守ってくれる親



作品 4

タイトル：「私の後押ししてくれるもの」

- ① 子どもの頃の家：引っ越す前の小2の頃の家族の風景。父と釣りをしている
- ② 人形
- ③ 今は家族から独立し始めていると感じる



作品 5

タイトル：「家族旅行での学び」

- ② 家族旅行：子どもの頃に船に乗ったりして旅行し、親にいろいろ教わった
- ③ 人形
- ④ 親の躰や道徳観を再吟味してみるの必要性を感じる



作品 6

タイトル：「今までの家族とこれからの家族」

- ① 過去の家族：心の中の家の歴史。若い頃の両親と赤ん坊の自分が登場する
- ② 人形
- ③ 親からの自立を自覚すると親との死別も意識させられる



作品 7

タイトル：「自分が死ぬまでの家族と道程」

- ① 家族の現在と未来：現在の家族と自立を試みても困難がありそうな将来
- ② 人形
- ③ 混沌とする将来への恐れを感じる



作品 8

タイトル：「自分がここにいる理由」

- ② 自己の存在理由：自分の立ち位置を認識するために高層ビルなどの中に自分を置く
- ③ 雑多な種類のコマを使用
- ④ この社会でいかに自分の価値を実現するか



作品 9

タイトル：「家族の歴史」

- ② 家族の歴史：家族旅行や両親の喧嘩など過去の出来事などをいろいろ込めた
- ③ 人形
- ④ 振り返って親には支えられていたと感じる



作品 10

タイトル：「いつもの家族」

- ① 家族の日常(3)：家族が趣味などで一緒に過ごしている風景
- ② 人形
- ③ 表面は違っていても家族は同じ方向に進んでいる感じ

日本人作成者 D の流れの分析

I 作成者 D の説明	
項目	変化
1.ストーリー	第 5 回までは家族の様子を紹介し、家族が自分を支え、自分が家族から教えてもらった経験を土台に外界に進むといったことについての作品が多かったが、第 6 回から第 7 回までは親との死別と将来の厳しさ、さらに家族関係のネガティブな側面について触れた作品となり、第 8 回から第 10 回までは家族が自分の支えるであること、家族と自分との違いと共通点についての作品が多かった。
2.家族関係	第 1 回から第 5 回までは基本的に温かくて協力的な家族関係が見られた。第 6 回は自分の家族からの自立が、第 7 回はネガティブな家族関係が、第 8 回から第 10 回まではいざこざがあっても、温かい家族関係が見られた。
3.家族雰囲気	終始温かいものであったが、第 6 回では両親と作成者が感じる雰囲気が違っており、また第 7 回では「一見するとたぶん温かい」というように変化している。
4.家族の課題	第 1 回から第 4 回までは両親の老後についての課題が多く見られたが、第 5 回から第 10 回までは家族の課題が親の子育て方針、親との死別、自分の生活と親を養うこととの両立、家族の今後、相容れない価値観の受容といったことであり、一貫したものが見られなかった。
5.作成者(主人公)の課題	第 1 回から第 3 回までは時間のやり繰り、現実を考えることといった作成者自身に関するものであったが、第 4 回から第 10 回までは独立、親の死の受け、親孝行、妥協など、家族と自分自身との関係に関するものが多くなった。

6.気づき・感想	第1回から第4回までは家族の大切さについての言及が多かったが、第5回から第7回までは自分のやりたいことと親の期待を両立させるのが難しい、自分が親と違うことなどについての内容が多くなり、第8回から第10回まではまた家族の大切さや家族に対する感謝についての感想が多くなった。
----------	---

Ⅲ 分析

家族からの支えと家族からの独立との相互関係は10回の作品に渡って一貫してみられたものであり、作成者Eの主要なテーマであると考えられる。しかしながら、主要なテーマとはいえ、家族からの支えと家族からの独立との相互関係は終始同じ形で現れたわけではなく、幾つの変化が見られた。

まず、第1回から第5回までの作品は、第1段階だと考えられる。この段階では家族という内側の世界について注目し、家族が自分を温かく見守ってくれていることや、両親が自分を家族の中心にして育ててくれたことを強調することが多かった。また、外部の世界については「未知の場所にいる人たちが自分の世界に侵入してくる」、「地元から離れて知らない所に行く」と問題が生じてくる」という「未知への恐怖」を感じるが、家族は自分が「未知への恐怖」をもつ将来に向かって進むための土台になっていると捉え、それについて多く語った。したがって、第1段階は作成者Eが自分の家族関係のポジティブな側面に目を向け、家族に支えられることにより自分の自立が達成できると考えていた段階と考えられる。

この段階において両親の老後がよく作成者Eの課題としてあげられたことは注目に値する。「親の老後」と自分の自立との関係を否定することはできない。しかし、親の老後ということはある意味で「親の死」を意味することである。そのため、実際にそれほど老いていない自分の親の「老後」に言及したことは単なる老いた親の介護よりも深い意味を帯びていると考えられる。

つづいて、第2段階は第6回から第7回までであり、幾つかの変化が起きたと考えられる。家族については第6回では親の死について明言すると同時に「自分は親と違う」と語り、第7回では「父親は自分の考えを僕に押し付けようとする」、「家族は一見すると温かいが近くで見ると微妙」というような家族についての批判的な言及も見られた。また、外部世界への進出について、自立して1人で将来へと向かうとき「何が起きてくるかもわからない未知で恐怖がたく

さんある」,「頼れる相手がなかなかいない」といった不安と心細さが見られた。そのため、第2段階では作成者が自分の家族関係のネガティブな側面にも目を向けるようになると同時に、これから自分が向かっていく未来に対する不安も増したと考えられる。

第3段階は第8回から第10回までである。この段階では第2段階からの回復と家族認識のさらなる変化が見られた。まず、家族関係について、「それぞれの人がそれぞれのものを持っている」と家族成員間の違いを認めるとともに、「家族がいるからこそ、今の自分がある」、「違うものを持っていても、家族だから時間を共有している」というように、親のイメージが弱まってしまった分を家族との一体感を見つけることによって修復しようとする心の動きが見られた。とくに第9, 10回ではネガティブな感情と自分を守ってくれることに対する感謝の気持ちの両方を親に対して感じていることを認め、さらに自分と違うものをもつ親が自分と同じ時間を共有しており、意見に不一致が生じたとき妥協点を探すといったがより柔軟で包括的な認識が見られた。また、外界については困難であるという見方に変わりはなかったが、再び家族が自分を支えてくれると思うようになるにつれて、挑戦しようとする気持ちも見られた。

なお、この段階で見られた作品の特徴としてはバラバラであった部分が統合していくことが挙げられる。第10回と第6回は作品の配置が似ているところがあるが、内容的に見てみると第6回は内側から分化が生じてくるものだと考えられるのに対して、第10回は一度分解したものを再び統括したものだと考えられる。

日本人作成者 E



作品 1

タイトル：「将来の理想」

- ① 将来の理想の家族(1): 両親と二世代住宅に住み自分の稼ぎで親の介護もしている
- ② 人形
- ③ 親が病気になっても支えられるように



作品 2

タイトル：「現状」

- ② 家族の日常：両親と祖父母は緑の多い実家のマンション住まい。自分は都会で一人暮らし
- ③ 人形
- ④ 自分の自立への願望の強さを自覚



作品 3

タイトル：「思い出」

- ① 家族旅行：小学4年の楽しい家族旅行の思い出。普段は喧嘩もするが森の中では結構楽しくやれている
- ② 人形
- ③ 安定した家族の基盤が感じられた



作品 4

タイトル：「夫婦仲」

- ① 両親の口論：父の煙草について両親の意見の対立。自分は結局仲直りすると思って眺めている
- ② 人形
- ③ 両親の話にも耳を傾けられるようになること



作品 5

タイトル：「距離」

- ② 家族間の距離：皆は勝手に動いていて夜の帰宅はバラバラ。淋しい思いで一人待っている母
- ③ 人形
- ④ もっと家族がコミュニケーションを取らなければ



作品 6

タイトル：「勢力図」

- ① 家族のダイナミズム：家族の力関係を意識して置いた。母と弟，父と自分という 3つの勢力の間には軋轢がある
- ② 人形
- ③ ことばで家族を納得させること



作品 7

タイトル：「自立」

- ① 自立の試み：一人暮らしを始め、期待と不安からいろいろなことがあった
- ② 人形
- ③ 解放感と以前よりしっかりしてきた自分を感じる



作品 8

タイトル：「一家団欒」

- ① 家族団欒：夏休みに帰省し久しぶりに家族が集まり楽しく過ごす
- ② 人形
- ③ 親や弟の欠点をきちんと忠告できるようになること



作品 9

タイトル：「目標」

- ① 将来の理想の家族(2)：父は退職して趣味を楽しむ、子どもは自立して稼いでいる
- ② 人形
- ③ 1回目の「理想の家族」よりずっと現実感がある



作品 10

タイトル：「集合写真」

- ① 集合写真：家族が集まって思い出を残すために写真を撮っている
- ② 人形
- ③ 子どもは巣立っていくが、やはり家族の基盤は仲が良いことだと思う

日本人作成者 E の流れの分析

I 作成者 E の説明	
項目	変化
1.ストーリー	終始実際の家族との活動に関するものであった。
2.家族関係	家族内の葛藤やトラブルがあっても、基本的には家族成員間に良い関係が見られた。
3.家族の雰囲気	ネガティブな家族雰囲気はほとんどなかった。
4.家族の課題	日常生活に関するものが多かった。
5.作成者(主人公)の課題	第 1 回と第 2 回は就職など具体的なことであった。第 4 回から第 10 回までは家族が何かに直面したとき自分の果たす役割に関するものが多かった。
6.気づき・感想	家族関係の良さや家族の大切さについての再認識が多く認められた。
II 分析	
<p>作成者 E の箱庭作品はイメージを動かすというよりも、時系列がどうであれ、家族の様子を出来るだけそのまま表現しようとする傾向が強かった。そのため、10 回の作品は固定的でやや固い印象があり、箱庭を通して作成者自身の内面世界イメージを窺うことはそれほどなかった。</p> <p>しかしながら、だからといって、作成者 E が箱庭を体験しても何の変化も生じていなかったとは考えがたい。というのは作成者が両親の口喧嘩や母親の心配症といった少しネガティブな日常生活の箱庭作品を完成することで、自分の家族の揺らぎのない基盤を改めて認識したということは 10 回の箱庭体験の中でしばしば報告され、このような日常生活を表す箱庭作品を繰り返し作ることによって、家族に対する認識を深めていったことが作成者 E の 1 つの特徴と考えられる。</p> <p>また、作成者 E のもう 1 つの特徴として、家族のなかにいる自分のイメージの変化が挙げられる。最初の 2 回では作成者が挙げた自分の課題は就職など比較的個人的なことであったが、第 3 回からは家族の課題と作成者自身の課題が相互に密接に関連して認識されるようになり、本人を含めた家族全体の様相に</p>	

視点がおけるようになっている。ただし、第6回と第7回は特別だと考えられる。第6回は家族の勢力図であり、口喧嘩で母親に勝ちたいというそれまでなかった作成者の母親に対する攻撃性を示すなど、母親からの分離をしようとする動きが見られた。第7回は一人暮らしを表現したものであり、いよいよ家族からの自立がメインテーマとして表に現れてきたといえる。しかも「家族の元に戻っても一人の人間として自立できている」という「家族内の自分」に関する認識を得ている。そして、第8回から第10回までは家族の課題を解決するために自分がどうすればいいのかが作成者自身の課題になっている、つまり家の中で1人の独立した人間として自分の役割をどう果たせればいいのかに関することがテーマとして展開されている。

以上の考えをまとめると、作成者 E は日常生活をそのままを表す箱庭作品を作ることで、自分の家族の仲の良さを改めて認識することができたと同時に、自分が良い家族関係の中にいながら1人の独立した人間として家族と関わっているという新たな認識を得ることもできたと考えられる。

日本人作成者 F



作品 1

タイトル：「交差」

- ① 家族の日常：父はリビングにいて、紫の服を着た母は少し疲れている。活動的な姉と大人しい妹
- ② 人形
- ③ 問題はないが家族はバラバラな感じ



作品 2

タイトル：「音楽，皆聴いている」

- ① 音楽家族：楽器を奏でる家族は音楽で結びついている
- ② 人形，他に宇宙人，鯨なども配置
- ③ 家族は大切だが，一緒に暮らすと大変なことも多くある



作品 3

タイトル：「壁」

- ① 父と息子：知性豊かな尊敬できる父。父と他の家族との間には境界線がある
- ② 父の人形と柵(境界線)のみ
- ③ 境界線の内側に入りたいが簡単には乗り越えられない



作品 4

タイトル：「遊び」

- ① 3つの家族：浜辺で遊ぶ娘と両親の家族と子ども連れの若い母親という架空の家族
- ② 人形，宇宙人(本人)
- ③ 自分もこのような感じで家族と旅行したことを思い出す



作品 5

タイトル：「距離感」

- ② 3つの世界：上部は神社や仏像やマリア像などが混在する悩みの世界，下部は5人が食卓に座る現実の家族
- ③ 人形
- ④ 家族とはドライに程よい距離感を保ちたい



作品 6

タイトル：「理想」

- ① 理想と現実の家族：ペットと仲良く暮らす理想の家族と両親と子ども達の現実の家族
- ② 人形，宇宙人
- ③ 5人家族なのに食卓の椅子はいつも4つしかなかったのに気づく



作品 7

タイトル：「留学」

- ① 海外生活：父の海外赴任で家族も一緒に引越すことに
- ② 人形
- ③ 海外生活への期待と不安で家族内がこんなにもざわつくとは思わなかった



作品 8

タイトル：「お出かけ」

- ① イメージ上の家族(1):公園で父と子はキャッチボール, それをベンチで見ている母
- ② 宇宙人(本人)は子どもと遊ぶ男の子に変わっている
- ③ ③穏やかな雰囲気



作品 9

タイトル：「牧場」

- ① イメージ上の家族(2):牧場に若夫婦や赤ちゃん連れの家族が遊びに来ている
- ② 人形, 牧場に牛馬など
- ③ 子どもは成長して聞き分けが良くなる



作品 10

タイトル：「寂しさ」

- ① 自立の試み:子どもが留学を決意し親の経済的援助を得て海外に
- ② 人形
- ③ 親への甘えと分離・独立の気持ちが未だに交差していることに改めて気づく

日本人作成者 F の流れの分析

I 作成者 F の説明	
項目	変化
1.ストーリー	第1回から第6回までは基本的に家族関係や家族の様子を表そうとするものであった。第7回から第10回までは過去の出来事に基づき改めて作られたストーリーが多く見られた。
2.家族関係	第1回, 第5回, 第6回といった家族の様子をそのまま表現しようとする作品の場合は「淡々としている」, 「ドライ」な家族関係であったが, 第4回, 第7回や第9回など, 過去の出来事に基づいたストーリーの場合は「暖かい」や「親しい」家族関係であった。
3.家族の雰囲気	家族関係の場合と似たような傾向が見られた。
4.家族の課題	最初は父親あるいは母親といった家族成員のことを課題として挙げたが, 回数が重なるにつれて, 全体の家族関係が課題として挙げられる回数が多くなり, 最後は自分自身のことが課題になっている。
5.作成者(主人公)の課題	作成者(主人公)の課題がないか, あるいは挙げられなかったことが数回あったが, 家族としてまとまりたいということから, 家族と適切な距離を持つことを経て, 自分が素直に両親に甘えられないことへと変わっていた。
6.気づき・感想	第6回までは家族関係についての理解が正しくないのではないかというような, 家族の現在に関する気づきが多く見られた。第7回からは過去の出来事について再認識し, 親に甘えたい気持ちに関する気づきが多くなった。
II 分析	
<p>全体的に見てみると, 作成者 F の 10 回の箱庭作品は物語ではなく主に家族の現状を説明しようとするものから, 過去の経験に基づいて作られたストーリーへと変わっていくというような流れが見られた。また, 作成者 F が作品を作成</p>	

する際の感情を考えると、最初は一步引いて家族全体を冷静に見ようとする傾向があったが、家族に対して自分が抱いている感情に直面するようになるという流れが見られた。このような変化の傾向を踏まえると、作成者 F の 10 回の箱庭作品が幾つかの部分に分けられると考えられる。

まず 1 つ目は第 1 回から第 6 回までである。この部分の作品は第 4 回を除き、ほとんどが客観的で冷静に家族の様子を表現しようとするものである。この部分では家族全体がバラバラで家族成員間の凝集力は弱い。そして父親が優れた才能の持ち主であり、外では尊敬されているが、家族のことにあまり関心を示さず、母がこのギャップに対して悩みを抱えている、というようなことを様々な形で表現しようとした。

また、作成者 F は自分のイメージとして、遠くから人間を観察する宇宙人をしばしば用いた。この宇宙人は最初は砂箱のなかには置かれなかったが、少しずつ砂箱のなかへと移行していた。ただ、砂の上に置かれたことはなかった。

このような家族に対して、作成者 F は家族にまとまってきたきほしい気持ちが強いものの、家族のまとまりのなさに悩まされていたは自分だけではないか、というようなジレンマを抱えているようであった。さらに、作成者 F は最初に母親を守りたいという気持ちに重きを置いたが、回数が重なるにつれて、あまり家族に関心を示さない父親にネガティブな感情を抱きながら父親に認められ、父親と親しくなりたいという気持ちがより明白になっている。第 3 回ではこのようなことがとくに明白であった。

なお、この部分では箱庭の配置に関して最初は乱雑で作成者 F 自身でもうまく説明できないようなファンタジーの要素がたくさん含まれていたが、段々秩序が立っていき、ファンタジーの要素も減っていき、現実性が強くなっていった。

2 つ目は第 6 回から第 10 回までである。この部分では家族の現状を反映しようとする作品がなくなり、ほとんどの作品は家族旅行というような過去に実際にあった家族との出来事に基づきながら幾つか修正を加えたものである。また、加えた修正に関しては、当初は第 7 回での家族に関心を示す「父親」、第 8 回での親密な家族というように、不快な経験を望んでいる形でに変えていたが、第 9 回では祖父母に連れてこられた男の子、第 10 回では 1 人で出かけた青年というように、快くない経験をそのまま表現しようとするものに変わっていった。

また、作成者 F の自己イメージに関しては、宇宙人は依然として用いられて

いたが、砂の上に置くようになり、しかもそのあと普通の男の子に変わって他人から見えないものではなくなり、周りとの関わりを持つようになった。また、「海外に行く」というテーマも見られるようになっている。作成者 F ははじめの部分では家族の凝集性を強く求めていたが、第 2 の部分では外の世界に対して関心を示すようになるなど、家族から自立しようとする心の動きが芽生え始めていると考えられる。さらに、親に対する自分の感情に関しては、第 1 の部分では家族としてのまとまりを強く求める気持ちの背後に親に甘えたい気持ちが潜んでいると推測されるが、第 2 の部分では作成者 F が自らこのような「甘え」について触れるようになった。

以上のことをまとめると、箱庭体験がもたらした最も顕著な変化は作成者 F が継続的な箱庭体験を通して、もともと自分のなかに存在していた、親に甘えたい気持ちに目を向けるようになったことだと言えよう。

日本人作成者 G



作品 1

タイトル：「ジャングルでの休日」

- ① 家族の個別性：家族 5 人それぞれについて複数の動物を使って表現する
- ② 動物
- ③ 皆一人ひとり違うが、父とはいつか友達的な関係になりたいと思う



作品 2

タイトル：「南国の島」

- ① イメージ上の家族(1)：南国の海で動物のキャラクターの家族が楽しく過ごす
- ② 動物，本人はフクロウ
- ③ おおらかな気分なので知らない事にも挑戦したくなる



作品 3

タイトル：「渦巻きの巻」

- ① イメージ上の家族(2)：突然、渦巻きが現れたときの家族の反応を想像して置いた。全員が動物
- ② 動物
- ③ それぞれが別個の反応をするのに気づいた



作品 4

タイトル：「森の中」

- ① イメージ上の家族(3)：森の湖に家族(動物)が水を飲みに集まって会話している
- ② 動物
- ③ いつもと変わらぬ静かな雰囲気



作品 5

タイトル：「小人の休日」

- ① イメージ上の家族(4)：小人(自分)が休日なので綺麗な観光地で釣りをしている。周りには家族を象徴する動物がいる
- ② 動物
- ③ 時間がゆっくり流れている



作品 6

タイトル：「カーニバル」

- ① 道端のパフォーマンス：路上でやっている楽器の演奏を家族で見ている。人混みに鹿の父は苛立ち始める
- ② 動物
- ③ 賑やかで楽しい雰囲気が満ちている



作品 7

タイトル：「南の島での休日」

- ① 家族旅行：南の島で家族と休日を自由に過ごす。周りで動物たちが好奇心をもって見ている
- ② 動物
- ③ リラックスしていて平和な雰囲気



作品 8

タイトル：「海の底」

- ① イメージ上の家族(5):深い海の底で父と弟と自分の3人で好き勝手に泳いでいる
- ② 動物
- ③ 海の底は平和なイメージだが突然サメが入ってきたら怖い



作品 9

タイトル：「夢の世界」

- ① イメージ上の家族(6):フクロウの自分が迷路にはまっている. 危険がいっぱいだが出口が見つからない
- ② 動物
- ③ 新奇なものにはワクワクする反面, 強い不安も感じている



作品 10

タイトル：「フクロウ」

- ① 家族の日常:それぞれのキャラクターの家族がただ一緒に生活している家族
- ② 動物
- ③ 日常と変わらない雰囲気, それぞれが独立している

日本人作成者 G の流れの分析

I 作成者 G の説明	
項目	変化
1.ストーリー	ストーリーは家族と一緒に何かの活動を行ったり、イベントに参加したりすることがほとんどである。ただ、内容として、第1回から第4回までは作成者Gの家族全員が同じことをするストーリーが多かったが、第5回からそれぞれの家族が一緒にいながらも個人個人で別の行動をすることが増え、第9回と第10回では家族がむしろストーリーの背景になっている。
2.家族関係	第1回から第4回まではそれぞれの家族成員の性格の特徴あるいは行動の特徴について説明するものであった。第5回から第8回までは家族でいながらもそれぞれの人がそれぞれのことをするというようになっている。第9回と第10回は作成者G自身のことがメインとなり、家族関係に触れなかった。
3.家族の雰囲気	「自由な雰囲気」または「日常的な雰囲気」が多かった。
4.家族の課題	盗難や迷子といった非常に具体的課題が多く、またこのような課題によって、家族がある安定した状況から突然思いがけない危機に遭遇するというようなことも多くあった。
5.作成者 G(主人公)の課題	第1回は現実世界で作成者Gが直面している具体的な課題である。第2回と第3回の課題は作成者Gが想像した挫折であるが、非常に具体的なものである。第4回から第8回までは家族と別れるか、あるいは家族に取り残されることが課題として挙げられることが多かった。第9回では「誰かが課題を解決してくれる」ということで課題がないとされていたが、第10回では「自分は自分が思っているほど人を信頼していない」という「今までで一番難しい課題」が挙げられている。
6.気づき・感想	それぞれの家族成員について認識が深まったと考えられる気づき・感想(例えば第4回, 第7回)が見られたと同時に、自分自身について認識が深まったと考えられる感想は第9, 10回で見られた。

II 分析

全体的に見ると作成者 G の場合、家族成員を動物のミニチュアで表現することが多くあったことや、10 回の作品のなかにはファンタジー的な内容が多く見られたといった特徴が挙げられるが、最大の特徴として、作成者 G の外界に対する「不安」が 10 回の作品にわたって見られたことが挙げられる。

このような不安は最初からはっきりした形で表現されたわけではなく幾つかの段階を経たと考えられる。第 1 段階は第 1 回だと考えられる。第 1 回は作成者 G の自分の各家族成員についての説明が主題であり、内部世界のイメージがまだ十分に活性化されておらず、自分自身と家族についての認識もあまり深まっていなかったため、心の深いところにある「不安」は顕在化されていなかったと考えられる。

第 2 段階は第 2 回から第 8 回までである。第 2 回ではストーリーの内容は説明的なものから物語的なものに変わり、作成者 G は「旅行中の盗難」を家族の課題として、「旅行中の病気」を自分自身の課題として挙げている。これらの課題は非常に具体的なものであるが、その背後に外界に触れると家族が侵入されてしまう＝盗難、自分が外界で守られていない＝病気になる、という外界に対する不安の象徴的なイメージがあり、潜んでいる「不安」が少しずつ表面に現れてきていると考えられる。第 3 回からはファンタジー的な内容が多くなっている。また、第 3 回から第 8 回までは、「外界が危険だ」という作成者 G の不安はより明白な形で作品から観察できるようになっていると考えられる。例えば、第 3 回では「渦巻」を家族で楽しんでいる間にいきなり後ろから「知らない人」に追い出されてしまう。第 7 回と第 8 回では家族でくつろいでいるときに、サルやサメがいきなり家族の中へ侵入してきてしまう。そして、これらの不安は外界からいきなり危険がやってきて、家族の安定が崩れてしまう点で共通しているため、外界の刺激によって安定した家族の状態が崩壊することに対する不安だと考えられる。

これと別に、もう 1 つの不安が見られた。例えば、第 4 回と第 6 回では家族がどこかに行ってしまう作成者 G が森や人混みといった外界で迷子になってしまう。また、第 8 回では家族が先に行ってしまう作成者 G が 1 人だけ海の底に残されてしまう。このような不安は前述した不安と違って、外界から危険がいきなりがやってくるということではなく、むしろ突然家族と別れて 1 人だけ外界に残されることに対する不安と考えられる。

このような 2 種類の不安に対して、作成者 G は家族に外界に残されるという不安を「究極に怖い」(第 8 回)とより強く感じているようであるが、作成者 G が思いがけないときに外界からの要因によって、家族内の位置づけが変化させられてしまうという点において 2 種類の不安は共通していると考えられる。

第3段階は第9回だと考えられる。第9回はそれぞれの家族成員と、「全ての状況を把握している鷹」に見守られながら中作成者Gが1人で「いい人もいれば、悪い人もいる」迷路をさまよっているという内容である。「家族がその場から離れて、自分を見守る人が少なくなる」という家族から1人だけ外界に残される不安は依然としてみられたものの、全てを把握している「鷹」が味方になってくれれば問題ないとし、このことにより「究極に怖い」という家族に取り残される不安の軽減もあったと考えられる。なお、「鷹」というイメージについて、作成者Gは詳細な説明をしていなかったが、作成者Gがしばしば「フクロウ」を自分のイメージとして用いることから連想してみると、「鷹」というのが進化を遂げた作成者Gのセルフイメージであるという可能性が考えられよう。

第5段階は第10回だと考えられる。第10回は内容的に第1回と同じように、1つのストーリーになっているというよりも、作成者G自身を含めた家族全員の特徴について説明をしていたと考えられるが、説明の重きがほかの家族成員に置いた第1回と違って、第10回では作成者Gが自分自身について、深く語っている。

第10回では作成者Gは「外は楽しそうに見えるけど、実際に外に出てみたら何が起こるか、分からなくて、怖い」と述べており、第2段階と比べて、外界に対する不安についてより明確に意識するようになっていると考えられる。さらに、「いつも柵の中にいる自分がいつか外に出て、全然適応できない」ことを課題として挙げ、その対応が「問題があったら先生や友達に助けを求める」としたものの、作品について感想を述べる際に「自分は自分が思っているほど人を信頼していない」と語り、より深い自己認識を行うようになったと考えられる。

なお、第9回では作成者Gが「鷹」に見守られながら自ら外界を探索しているという意識が見られたにもかかわらず、第10回では柵の中に引きこもっているというのは逆戻りのように見えるが、よく吟味すると作成者Gは第9回の表現をしたために、第10回の表現ができるようになったと考えられる。つまり、第10回の「柵」は作成者Gの行動を制限するもののように見えるが、作成者Gが「怖い」とする外界から守る役割を果たしている。このような「柵」ができているからこそ、作成者Gは自分の不安について語れるようになったのである。そして「作成者Gを守る」という意味において、第10回の「柵」のイメージは第9回の「鷹」というイメージと同じだと考えられる。つまり、作成者Gは「鷹」「柵」という、不安感から自分を守ってくれるイメージを獲得したことで不安を語るようになったと考えられる。

自分自身についての認識の以外に、作成者Gはまた、家族成員についても認

識と深めたと考えられる。たとえば、第7回では父親のイメージだけキャラクターのミニチュアで表現したがそれを通して、父親が自分にとって特別な存在だと気づくようになっている。

以上のことをまとめると、作成者 G は 10 回の箱庭体験を通して、家族成員に対する認識を変化させるとともに、自分自身について、とくに外界に対する態度について、より認識を深めることができたと考えられる。

日本人作成者 H



作品 1

タイトル：「もう一度行きたいところ」

- ① 家族旅行：以前に旅行した島の風景。妹たちは遊びに熱中し、一人淋しく犬と遊ぶ私
- ② 人形
- ③ 当時、親に言いたいことを言うと叱られるというイメージを持っていた



作品 2

タイトル：「日曜日の夕方」

- ① 家族の日常：家族イメージで一番に浮かぶのがオーストラリアでの高校時代。犬を散歩に公園へ
- ② 妹の人形のみ登場
- ③ 今、自分がしたいことをすればいいと思った



作品 3

タイトル：「船」

- ① イメージ上の家族：以前からの家族イメージ。森の奥に住んでいて、子どもが舟で外に出ていくのを母は心配気に見送っている
- ② 人形
- ③ 親は私が少し大人になったと思っているはず



作品 4

タイトル：「不器用な小人」

- ① 小人のファンタジー(1): 小人は迷いや考え事がいっぱいあるが蛇に邪魔されている
- ② 人形
- ③ 蛇(問題)を解決する前に自分のモヤモヤをクリアにすることが大切



作品 5

タイトル：「理想と現実」

- ① 家族のファンタジー：子どもを守るために親が敵に向かっていくシマウマの家族と親を守るために子どもが戦おうとしている羊の家族
- ② 動物
- ③ 前に出るのを怖がっている自分



作品 6

タイトル：「里帰り」

- ① 竜のファンタジー(1): 竜が修行の成果をもって家族のところに帰ってくる
- ② 家族で登場は竜のミニチュア一つのみ
- ③ まだ修行の成果に自分は自信が持っていない



作品 7

タイトル：「女の子の人生」

- ① 少女のファンタジー: 少女の前には乗り越えるべき山があり、これから挑もうと思っている
- ② 人形
- ③ 一人で山を越える自信は自分にはまだついていない



作品 8

タイトル:「どうしよう」

- ① 小人のファンタジー(2): 小人がオールのない小舟に乗りマリア様の地に着くか鬼のいる地に着くかは舟任せ
- ② 小人, マリア像, 鬼
- ③ オールなしで舟に乗った甘さ(情報収集の甘さ)を悟る



作品 9

タイトル:「小人だよ」

- ① 小人のファンタジー(3): 小人は4人の家族に近づこうか躊躇している。小人と母親との距離が一番近い
- ② 小人, 人形
- ③ 小人(自分)が人の目を気にするのを直したい



作品 10

タイトル:「行ってらっしゃい, 私が守ります」

- ① 竜のファンタジー(2): 竜(自分)が父の代わりに家族を守るために戻ってきた
- ② 竜と木(母)のみ
- ③ 責任感に押し潰されないようにしなければ

日本人作成者 H の流れの分析

I 作成者 H の説明	
項目	変化
1.ストーリー	最初の 2 回は自分自身そのままが主人公であったが、第 3 回目から小人、女の子、竜などに自分自身を象徴的に置き換えられ、それが主人公となり、イメージが展開された。
2.家族関係	1 回目は「姉妹、カップル」というような表面的かつ客観的な記述であったが、2 回目からは自分自身もつ他の家族に対する認識か、あるいは他の家族もつ自分に対する認識についての推測に変わった。
3.家族の雰囲気	最初は「楽しい、のんびり」であったが、中盤から「今のところが良いがこれから悪くなるかもしれない」と揺れたが、最後になって「悪くない、ネガティブなものがない」と基本的にはポジティブなものになった。
4.家族の課題	ほとんどが子どもが親とどう関われば良いのかに関連するものである。
5.作成者(主人公)の課題	ほとんどが子どもが親に自分の気持ちを伝えられるか、理解されるかに関するものであり、家族の課題との関連性がある。
6.気づき・感想	最初は表面的なものであったが、媒介(例えば「蛇」)を通して徐々に自分の内面と自分の家族に対する気持ちを語るようになり、最後は自分自身そして家族に対する認識がより深まったというコメントが見られた。
II 分析	
<p>作成者 H の 10 回の作品のうち、最初の 2 回は過去の現実生活を表すものであったが、第 3 回から第 10 回まではファンタジーであった。ただし、ここでいうファンタジーは作成者 H のイメージの流れで作られたものというより、むしろ作成者 H が自分の現実生活の状況を表そうと意識的に作ったものと考えられる。ただ、意識的に作ったものと言えども、作品のすべてが作成者の意識の下にあるわけではなく、作品について説明しているうちに、自分自身あるいは家族に対して新しい気づきが生じてくることもしばしばあった。このように、ファンタジーの中の主人公を媒介にして家族に対する自分の気持ちを表し、作品を説明するうちに家族に対する認識が深まっていたことが作成者 H の最大の特</p>	

徴と考えられる。すなわち、直接的に自分自身を投射した具体的なミニチュアではなく、小人や竜、女の子のミニチュアを登場させ、抽象的なファンタジーの世界で家族の物語を展開させることで、かえって自己理解や家族の現状の把握が促進されたのである。協力者の家族に対する気持ちを分析するには最初の2回の作品も重要である。とくに第1回で見られた「家族に関わりたい」という気持ちが作成者 H の重要なテーマだと考えられる。

具体的にいうと、作品から作成者 H はとくに父親に対して、自分のやることに干渉しないでほしいが、認めてほしい、応援してほしいと葛藤する気持ちを抱いていることが作品からも読み取ることができる。まず、このような気持ちは作成者 H が父親の意見に反して大学院の進学を選んだものの、入試に失敗してしまったときに最も激しかった。作品 4, 5, 6 はその現れであろう。ただ、このような葛藤する気持ちは親からサポートを得ることによって、一旦収まることができたため、作成者 H の当面の課題が家族のことから大学院の進学に移ったように見える。作品 7 と 8 がこのような変化の表現だと考えられる。そして、父親が単身赴任で実家から離れ、作成者 H が父親の期待に応じて実家に帰りかつ地元の大学にも進学できたため、作成者 H はしばらくこの葛藤に悩まされることがないと言えるだろう。10回の箱庭作品、特に第4回と第9回の作成は、作成者 H が自分のこのような葛藤に気づくことに役に立ったと考えられるだろう。

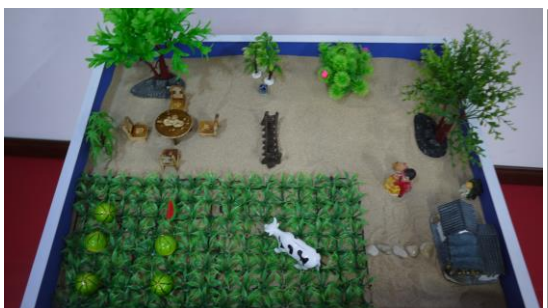
中国人作成者ア



作品 1

タイトル：「莊園」

- ① 将来の理想の家族(1): 莊園のようなハウスに親と妻と子どもと一緒に住んで、誰もがストレスもなく過ごしている
- ② 人形
- ③ 皆が健康で穏やかな関係



作品 2

タイトル：「ハニームーン」

- ① 将来の理想の家族(2): 気が向いたら畑仕事をしたり遊んだりして、毎日喧嘩もなくのんびり暮らす
- ② 人形
- ③ 母とは考えが合わない面があるのを自覚する



作品 3

タイトル：「温かい家族」

- ① 将来の理想の家族(3): 家族はお茶を飲みゲームをして楽しく過ごしている
- ② 人形
- ③ 健康でいられるよう親孝行しなければ



作品 4

タイトル：「一日」

- ① 家族の日常(1)：朝仕事に出かけ、夜皆で食事をする毎日の生活
- ② 人形
- ③ 次第に家族の感覚が鈍っていくように感じる



作品 5

タイトル：「毎日の繰り返し」

- ① 家族の日常(2)：前回と大枠では変わらない. お互いに気を配ってはいる
- ② 人形
- ③ 誰もが心配事や悩みを表現しないようにしていた



作品 6

タイトル：「遊ぶ」

- ① 家で友人とゲーム：自宅で友人とトランプゲームを楽しむ. そのときは家族のことは考えたくないなのでここには一人も登場しない
- ② 人形
- ③ 友人とは親しくやっている



作品 7

タイトル：「昔」

- ① 友人の家でゲーム：友人の家でトランプや麻雀を楽しむ.
- ② 人形
- ③ 外では楽しいが自分の家はつまらない



作品 8

タイトル：「傍観者」

- ① 友人関係：友人がかかえている恋愛や仕事のトラブルを自分はいつものように傍観者の立場で眺めている
- ② 自分と友人の人形のみ
- ③ 友人を助けるべきか悩む



作品 9

タイトル：「一人」

- ① 一人だけの空間：自分一人で、周囲にいるのは牛などの動物ばかり
- ② 人形は本人のみで、他は牛、馬、犬といった動物
- ③ 静かで縛りがなく自由だが、しばらくすると退屈しそう



作品 10

タイトル：「一日」

- ① 家族の日常(3)：いつもの日常だが食事はバラバラにしている
- ② 人形
- ③ 家族関係は悪くなく、皆が一生懸命なのは理解できる

中国人作成者アの流れの分析

I 作成者アの説明	
項目	変化
1.ストーリー	第1回から第3回までは理想の家族の様子であった。それが第4, 5回は家族の現状を表すものになった。第6, 7, 8回は家族とほとんど関係のない, 主に友人との関わりに関するものであった。第9回は1人で休むというものであり, 家族を含めた人間関係が見られなかった。第10回は再び家族の現状を表すものになったが, 以前とよりも, 自分の家族について触れるようになっていく。
2.家族関係	良好な家族関係を理想としているが, 実際の家族関係はつまらないと見なす傾向が見られた。ただし, 第10回では実際の家族関係にかかわらず, 家族関係が良好だと認識された。
3.家族の雰囲気	家族関係の場合と似たような傾向が見られた。
4.家族の課題	主に父方の祖母の健康が家族の課題として取り上げられることが多かった。
5.作成者ア(主人公)の課題	家族の健康, 友人との関係, また母親からの電話というような様々なことが課題として挙げられた。さらに, 課題がないとした回もあった。
6.気づき・感想	最初は理想とした家族像と現実の家族とのギャップが大きいことについての感想が多く見られた。その後, 家での生活がつまらない, 昔友人と一緒にいるのが楽しかったというような感想が多かったが, 最後になって, 家族関係あるいは自分の性格の特徴についての感想が見られた。
II 分析	
<p>作成者アは家族のイメージを表現するようにと教示されたにもかかわらず, 家族と全く関係ない作品を制作したことが何回かあった。さらに, 表現された家族イメージには, 実際の家族のほかに, 理想の家族のイメージも含まれている。こういった特徴を踏まえると作成者アの作品は幾つかの部分に分けることができると考えられる。</p> <p>第1部は第1, 2, 3回である。この3回の共通点として, 作成者アが表現し</p>	

たのは実際の家族の様子ではなく、理想としての家族のイメージであるということである。なお、作成者アは理想としての家族の特徴について、「ストレスがない」、「のんびりしてられる」、「楽しい」というようなことを挙げており、理想としての家族を実現させるために、お金がいることを強調している。

第2部は第4, 5回である。この部分では第1部分と異なり、実際の家族の様子が表現された。作成者アは家族との日常生活について、ストレスがたくさんあり、毎日同じことが繰り返され、とてもつまらないと理想の家族生活と全く違うものとして、認識しているようである。また、それぞれの家族成員および自分自身について、深い感情をこめて語ることがあまり見られなかった。さらに、箱庭の表現としては、第1部は豊かであったのに対して、第2部は不毛と言えるほど貧弱であった。

第3部は第6, 7, 8回である。この部分では作成者アは家族をまったく表現せず、昔の友人と楽しく遊んだ経験を再現しようとし作品を作っていた。「友人と遊ぶことが楽しい、家にいるのがつまらない」というような認識の傾向が見られたが、家族関係の場合と同様に、友人関係についても深い体験を語らず、表面的なことしか語らなかったと考えられる。

第4部は第9回である。第9回では「このような静かなところで休みたい」ということで、1人しかない場面を表現した。それまでは箱庭の作成は出来事の再現という意味が強かったが、第9回ではむしろ作品を作り、作品の完成を体験するという意味合いが強かったと考えられる。

第5部は第10回である。この部分では「つまらない」日常生活が再び表現されたが、第2部の場合と比べて、作成者アは自分の家族関係を良好なものとし、家族成員および自分自身について、より感情を伴って語ったことが認められた。

今まで述べてきた5つの部分を総合し、全体的に考えると、作成者アは箱庭を継続的に体験したあと、つまらないが現実である家族イメージに目を向けるようになり、自分の家族について感情をこめて表現するようになったと考えられる。なお、作成者アは表面的な表現をあまりせず、自分の内部の世界にあまり目を向けようとしない傾向があると言わざるを得ない。このような人に対して箱庭を実施する場合は工夫する必要があると考えられよう。

中国人作成者イ



作品 1

タイトル：「小人の国」

- ① 小人の国：小人の世界で親が作った雪だるまが自分
- ② 雪だるま，動物
- ③ 動けない雪だるまが友人たちと遊びたがって動き出そうとしたとき問題が生じると思う



作品 2

タイトル：「お正月」

- ① 拡大家族：両親，兄，姉，祖母に親戚も加わり庭の大樹の下で歓談している
- ② 人形，車 6 台
- ③ 金銭面から微妙な関係が生まれるような気配がする



作品 3

タイトル：「命」

- ① 祖母のお見舞い：癌で入院している祖母(天使)のお見舞いに多くの親戚が集まっている
- ② 人形の他にキリスト像
- ③ 家族が亡くなったときそれをどう受け入れるか



作品 4

タイトル：「遊びに出かけよう」

- ① 兄弟関係(1)：子どもの頃，兄弟で放課後ゲームセンターや動物園に行ったりして母に叱られた
- ② 人形
- ③ 親は心配するが早く家を出て解放されたい



作品 5

タイトル：なし

- ① 祖母の死：昨日亡くなった祖母の黄泉の世界。祖母の好きなもので飾る
- ② 黄泉を象徴する多くのものを配置
- ③ これまでの不愉快なことや誤解は解けた



作品 6

タイトル：「昔の写真」

- ① 昔の写真：自分が生まれる前の家族。親は兄と姉を自転車に乗せたり，ケーキを食べたりしている
- ② 人形
- ③ 自分はあまり構われなかったが愛されたと実感している



作品 7

タイトル：「飛び出す」

- ① 兄弟関係(2)：姉は母の手伝いをしていたが，兄と自分は早く家から逃げ出したいと思っている
- ② 人形
- ③ 自分が自立するのはまだ無理と感じた



作品 8

タイトル：「果物をたくさん食べて」

- ① 兄への思い：サッカー好きの兄は足を骨折。酒や煙草が好きなので健康のためにフルーツと医者を使った
- ② 人形
- ③ 兄にはどうしても健康の大切さを分からせたい



作品 9

タイトル：「晦日」

- ① 母方の祖父母：10年以上入院している祖父を献身的に看病する祖母。家族もお見舞いに
- ② 人形
- ③ 大人たちが親孝行する姿を見てとても気持ちよかった



作品 10

タイトル：「後悔しない」

- ① 成長の物語：早く自由になりたい赤ん坊。やっと家から出られて望みの世界を旅する
- ② 危険は恐竜で表現
- ③ いつも守られていて、結局自分を制限しているのは自分自身

中国人作成者イの流れの分析

I 作成者イの説明	
項目	変化
1.ストーリー	場面は様々であり、一貫したテーマが見られなかった。また、実際にあった出来事とファンタジー的な物語をあわせたストーリー、または幾つかの実際にあった出来事を合わせたストーリーが多くあった。だが、最終回のストーリーはまとまりを備えたファンタジーのストーリーと考えられる。
2.家族関係	基本的には家族間の絆の強さを強調するものが多かったが、家族関係の独特さについて説明するもの(第2回)や家族の大切さを分かりながらも家族からの自立を求めるもの(第10回)も見られた。
3.家族の雰囲気	基本的には家族雰囲気の良さを主張するものが多かったものの、両親間のゴタゴタ(第4回)やお兄さんとの喧嘩(第8回)といったネガティブな側面や家から出たい気持ち(第10回)について触れた記述も見られた。
4.家族の課題	家族の健康やマイホームを買うお金といった非常に具体的なことが多かったが、第10回だけは想像したことの感情的な処理仕方に関するものだった。
5.作成者イ(主人公)の課題	家族からの自立が課題として多く挙げられた一方、家族を離れたあとの困難に関する課題も多く見られた。
6.気づき・感想	「自分が考えていることがはっきりとなった」(第5回)や「以前怖くて口にすることができなかったことに直面できようになった」(第8回)といった、箱庭の体験によって家族あるいは自分自身についての認識が深まったことについてのコメントが多くあった。
II 分析	
<p>家族に対する意識に関しては、作成者イの場合、家族からの自立が1つの核心的なテーマだと考えられる。10回の箱庭の作成の中で、家族からの自立は作品の中で繰り返し表現されていたが、こうした過程で自立に対する作成者イの気持ちにも変化が生じたと考えられる。</p> <p>第1回は作成者イを象徴すると思われる雪だるまが主人公であり、「雪だるまが生まれた場所から離れたがっている」ということが課題として挙げられた。</p>	

つまり、作成者イは明言していなかったものの、最初から「家族からの自立」を意識していたと言えよう。第2回では作成者イが一応、家族の1つ生活場面を表現したが、それはむしろそれぞれの家族成員について自分の気持ちを整理してみたとも考えられる。なお、作成者イの家族構成は両親が互いに再婚相手であり、しかもそれぞれに子どもがいるという独特なものである。そして、この独特さが作成者イに対して及ぼす影響は決して弱くはないと考えられる。

第3回から第5回までは父方の祖母の死が1つのテーマとして登場した。身近な親族の死は誰に対しても大きな影響を及ぼすが、作成者イの場合、祖母の死は家族から自立したいという強い気持ちと相まって、祖母の死は普通の場合と比べ、作成者イに対してより深い影響を与えたと考えられる。家族から自立を凶ろうとする青年がイメージの世界において自分の親に不幸なことでも起きてしまうのではないかと不安や悲しみといったネガティブな感情を感じることも有り得るが、家族から自立を凶ろうとする作成者イの場合ではまさに現実世界でも祖母の死という喪失体験をしたことになる。さらに、「世の中で自分を最も愛していた」祖母の死を悲しむ姉の存在も作成者イの喪失体験を増したと考えられる。そして、確かに作成者イの喪失体験は一見すると激しくないように見えるが、祖母の死が本人の心のなかで深刻な体験となっていたと考えられる。

第6回から第9回までの作品はほとんどが作成者イの子ども頃のエピソードであり、箱庭の作成が退行をもたらしたと考えられる。これらの作品においてはテーマとして「家族から自立」(第7回)も見られたが、それだけではなく、「自分が生まれていなかった頃の家族旅行」(第6回)について言及したり、「大好きな兄の怪我・病気」(第7回)もの見られた。こういったことはある意味で、家族から離れることに対する悲しみや不安の表れと考えられるよう。

最終回の第10回では幾つかの変化が見られた。それまでの作品は説明的な内容が多かったのに対して、第10回は「赤ちゃんが大人になり旅をする」というファンタジー的な内容であった。また、第10回では作成者イが自立を求める気持ちについて語るだけではなく、自立に対して葛藤する気持ち、つまり家族からの自立を求めている一方で、家族から離れて1人でやっていけるかどうか、さらに自立がうまくいかず助けを求めることになった際に家族に突き放されるのではないかと懸念についても触れていた。

作成者イの家族に対する認識の変化について、これまでの内容をまとめると、作成者イは箱庭の体験を通して、今までの自立を強く求める気持ちの背後に、自立への不安も存在することにより明確に気づくようになり、自分と家族との関係についてより包括的に認識できるようになったと考えられる。

中国人作成者ウ



作品 1

タイトル：「晩ご飯」

- ① 家族の日常：両親と3人でいつものようにTVを見ながら静かに夕食をとっている
- ② 人形
- ③ 親の健康維持をはかることの大切さ



作品 2

タイトル：「サプライズの旅」

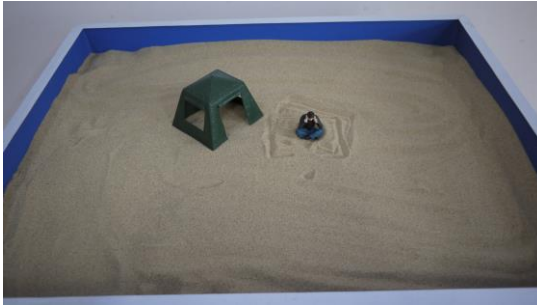
- ① 家族旅行：家族と列車で行った旅が浮かんた。家の外だから家族同士が適度に心配りをして心地よい
- ② 走る列車と風景の木だけ
- ③ 家では味わえないようなお互いに優しい関係



作品 3

タイトル：「家族についての自分の理解」

- ① 家族の個別性(1)：3人について個々にイメージして動物を置いた。父：カバ、母：羊、自分：ゴキブリ
- ② 動物
- ③ カバと羊はゴキブリを気にかけている



作品 4

タイトル：「テント」

- ① 安全地帯としてのテント：テントは両親のイメージ. 困ったときはいつでも帰れるし無条件に守ってもらえる
- ② テントと本人の人形のみ
- ③ テントに安心感がもてる



作品 5

タイトル：「小船」

- ① 小舟：港に泊まっている小舟に乗っている自分を両親が橋から見守っている
- ② 小舟と両親
- ③ 他に自分の拠り所が見つかったらこの港を出て行くかどうか躊躇するだろう



作品 6

タイトル：「木暮での静けさ」

- ① 家族の個別性(2): 蛇(父), 犬(母), それに馬(自分)という違う動物が大樹(我が家)の木陰で一緒に暮らしている
- ② 動物
- ③ 大樹を傷つけないように仲良く暮らす但对立することもある



作品 7

タイトル：「父と遊ぶ」

- ① 父と遊ぶ：幼い頃、父と共通の趣味のミニ四駆で遊んでいる。母はそれを不機嫌な顔をして見ている
- ② 人形, ミニ四駆 2 台
- ③ 尊敬する怖い父だが、この時だけは楽しかった



作品 8

タイトル：「家族の集まり」

- ① 拡大家族：自分の家族 3 人に，祖母，叔父，叔母など大勢が加わって仲良く過ごしている
- ② 家の前に 10 体の人形が集っている
- ③ 誰もが祖母の健康を気遣う



作品 9

タイトル：「牛に育てられたライオン」

- ① 家族の個別性(3)：自分はライオンで二頭の牛(両親)はライオンを見守りつつ動きを抑えようとしている
- ② 動物
- ③ ライオンは自分がいくら努力しても親が望む牛にはなれないと気づき始めている



作品 10

タイトル：「木の上にいるサル」

- ① 大樹の上の猿：森の大樹(家族)の上にいる猿(自分)が世界を眺めている
- ② 動物
- ③ 自分は大樹(家族)を通して周りのことを知ったが，もっと外のことを知りたい

中国人作成者ウの流れの分析

I 作成者ウの説明	
項目	変化
1.ストーリー	第1回と第2回の作品は実際にあった出来事を表現しようとした。第3回から第6回までは例えを用いて、家族というイメージについての考えを表そうとしている。第7回と第8回は実際にあった出来事の表現であった。第9回と第10回は例えを用いて、家族からの自立というイメージを表している。
2.家族関係	ネガティブな側面に触れることもあったが(第6回)、ほとんどは家族関係の良さに言及したものである。
3.家族の雰囲気	「小さな対立をやめない」(第6回)など、ネガティブな家族の雰囲気に言及したこともあったが、基本的には「調和」、「淡々としている」、「楽しい」といったポジティブな面を強調することが多かった。
4.家族の課題	第1回と第2回は「両親の健康」や「旅行中自分の体調不良」など具体的なことが課題として挙げられている。第3回から第6回までの間には「なかなか一致した意見を出せない」、「両親間の小さな対立が絶えない」といった家族の不和、また家族からの自立に関することが課題として挙げられている。第7回と第8回は祖母の健康や遊ぶことをやめるかどうかといった具体的なことが挙げられたが、第9回と第10回は家族からの自立に関することが課題として挙げられている。
5.作成者ウ(主人公)の課題	両親の意見との不一致が生じた場合どうすればいいのか、また外でやりたいことがあった場合家族から離れるかというような、家族からの自立に関する課題が多く見られた。
6.気づき・感想	一般的な意味の「家族」についての理解が深まったというような感想(例:第3回,第8回)が見られるとともに、家族について今までと異なった視点からの再認識(例:第1回,第6回,第7回)または包括的な認識(例:第9回,第10回)に関する感想も見られた。
II 分析	

作成者ウの場合、意図的に例えを用いて、自分が思っている家族関係または家族そのものについてのイメージを表そうとすることが特徴だと考えられる。また、用いられた例えによって、作成者ウの10回の箱庭作品は幾つかの部分に分けて考えることができる。そして、このように分けられた段階に沿ってみていくことにより、箱庭体験によって作成者ウの家族に対する認識にどのような変化が生じてきたかについて吟味することができる。

まず、第1部は第1回と第2回である。この2回の作品は実際の生活場面または実際にあった家庭内の出来事をそのまま表現しようとするものであったため、例えの使用が見られなかった。しかしながら、この2回では作品を完成するにあたって、作成者ウが両親の性格の特徴及び自分の家族関係の特徴について説明することで、「我が家は淡々としすぎる」(第1回)というような、普段あまり意識されないところにも気づくようになり、家族に対する認識がより活性化されたと考えられる。さらに、家族に関して、作成者ウの核心的なテーマと思われる「親の希望と自分の本当にしたいこととの不一致に対する対処」はこの部分で取り上げられている。

第2部は第3回から第6回までだと考えられる。この4回は例えの利用が特徴である。ただし、この部分では例えの利用が毎回で見られたとはいえ、それぞれの例えが同じであるわけではなかった。第3回では両親と自分を違う種類の動物に例え、性格の違いが多いが1つの家族なら親密で深い関係も共有できることを説明している。第4回で作成者ウは「テント」と「テントの下にいる」という例えを用い、困った子どもを両親が一生懸命守ることを表現している。第5回では作成者が自分と両親との関係を「小舟と港」に例えて、自分にとっての両親の大切さとともに、両親の元から自立したい気持ちを表そうとしていた。第6回では大きな木の下で一緒に生きていく3種類の動物という例えを使って、それまで良いとした家族関係のなかに不調和なところもあるということ表現しようとした。

第3部は第7回と第8回だと考えられる。この部分の内容は第1部と同様に、実際の生活に基づいたものであり、例えは見られなかった。ただ、第1部では作成者が家族から距離をとり、客観的に表現しようとしていたのに対して、この部分では家族に対して、作成者のより生き生きとした感情を窺わせる。

第4部は第9回と第10回である。この部分では作成者は再び例えを用いたが、第2部の場合と比べ第4部のほうが「自分は両親と違う」といった家族から自立したいという気持ちがより鮮明になっていると考えられる。

これまで例えの使い方によって10回の作品を4部分に分けられてみたが、4部分をまとめ、作成者ウの家族に対する認識にどのように変化したかについて考察すると、制作の回数が重なるにつれて、もともと存在している自立意識が

より明白になり，それにより自分と両親との関係について新たな視点から見ようとする意識が芽生え始めていると考えられる。

中国人作成者エ



作品 1

タイトル：「実現」

- ④ 将来の理想の家族(1)：一生懸命に稼いで買ったマイホーム。母とは別に生活
- ⑤ 家と本人の人形
- ⑥ 一人暮らしなので生活レベルを維持していくことの大切さ



作品 2

タイトル：「頑張ろう」

- ⑤ 将来の理想の家族(2)：家から仕事に出かけるところ。忘れ物をチェックしている
- ⑥ 家と本人のみ
- ⑦ 職場で信頼される人間関係を築くことの大切さ



作品 3

タイトル：「しっかりやっていく」

- ④ 将来の理想の家族(3)：仕事に出かけるところ。自分は大手のメディア会社の社長
- ⑤ 家と本人のみ
- ⑥ 仕事は成功しているが感情面のトラブルを克服しなければ



作品 4

タイトル：「母の接し方」

- ④ 将来の理想の家族(4):センスのある美術品が飾られている家から仕事に行く
- ⑤ 家と本人のみ
- ⑥ 仕事上の人間関係を乗り越えなければ



作品 5

タイトル：「理想を貫く」

- ⑤ 将来の理想の家族(5):家では会社の経営方針や儲けをいろいろ考えている
- ⑥ 家と本人のみ
- ⑦ 人付き合いがうまくて素晴らしい人になる



作品 6

タイトル：「いつも通り」

- ④ 将来の理想の家族(6):家で自分の好きにやっている
- ⑤ 家と本人のみ
- ⑥ 会社運営をさらに向上させて母にプレゼントを贈る



作品 7

タイトル：「迷わなく進み続ける」

- ④ 将来の理想の家族(7):大手のメディアの社長で家から仕事に行くところ
- ⑤ 家と本人のみ
- ⑥ 騙されないように人の心が読めるように



作品 8

タイトル：「目指す方向」

- ⑤ 将来の理想の家族(8)：マイホームから仕事に行くところ
- ⑥ 家と本人のみ
- ⑦ 仕事でお金が入ったら母に欲しいものをたくさん買ってあげる



作品 9

タイトル：「進む道」

- ⑤ 将来の理想の家族(9)：家でリラックス. ストレスでの失敗は考えられない
- ⑥ 家と本人のみ
- ⑦ 会社の発展と社内の人間関係をうまくこなす



作品 10

タイトル：「努力し続ける」

- ④ 将来の理想の家族(10)：会社を経営しているが家で休んでいる
- ⑤ 家と本人のみ
- ⑥ 自分の考えは理想的過ぎて実現できないのでは？

中国人作成者エの流れの分析

I 作成者エの説明	
項目	変化
1.ストーリー	ストーリーのほとんどは「未来の自分とマイホーム」である。ただ、第1回から第8回までは主人公が家から仕事に出かける場面であるのに対して、第9回から第10回までは主人公が家で休んでいる場面である。
2.家族関係	第1回から第3回までは「一人暮らし」のため、「家族関係がない」とされたが、第4回から第10回の家族関係は「一緒に暮らしてはいないが、定期的に母親に会いに行く」というものだった。さらに、第4回から第8までは「母に良いものを買う」というような物質的な関わりを強調したが、第9回から第10回までは物質的な世話に加え、「母親とおしゃべりをしたりする」というような精神的な関わりも見られるようになった。
3.家族の雰囲気	毎回の作品が「一人暮らしをしている人」という内容だったので、家族の雰囲気はほとんど「淡々としている」ものであった。
4.家族の課題	「課題がない」とされることが多かったが、課題があった場合は全てが「母親の死別」であった。
5.作成者(主人公)の課題	ほとんどが仕事場での人間関係のことであった。
6.気づき・感想	主に母親に対するアンビバレントな気持ちについてのものであった。他には自分の理想に関するものも見られた。
II 分析	
<p>作成者エの全ての作品は人間とハウスの2個のミニチュアによって構成された「将来の自分とマイホーム」である。</p> <p>作成者エの父親は子どもの頃に他界し、作成者エはその母親と生活してきたが、作品のなかに「母親」のイメージは一回も見られなかった。しかしながら、「母親」との関係はほとんど毎回見られ、核心的なテーマになっている。さらに、作成者エは終始同じ配置の作品を作り続けてきたにもかかわらず、「母親」との関係についての認識は少しずつ変わっていくことが観察された。</p> <p>すなわち、作成者エは母親に対して葛藤を抱えていると考えられる。つまり、</p>	

自分の母親に対して、作成者エは甘えたい気持ちが十分に満たされない故に母親を責め、母親から離れたと思う一方で、このような責める気持ちを抱いていることで母親に申し訳なさも感じており、さらに母親を失うことに恐れを感じている。このような葛藤は10回の作品に渡って見られたが、第1回から第6回までは母親を責める気持ちが強く、母親との交流を諦めようとしていたのに対して、第7回から第10回までは責める気持ちが依然としてあるものの、母親とよりよいコミュニケーションを取ろうとする意志が芽生え始めていると考えられる。

また、「母親」との関係についての認識の変化はストーリーの設定の変化と関連する可能性があるとも考えられる。第8回までの設定は全て主人公である「将来の自分」が家から仕事に行く場面であったが、第9回から設定が「将来の自分」が家で休む場面が変わった。これを理解する仮説としては第8回で作成者エが前述した母親に対する葛藤を自ら意識するようになり、作成者エが母親に対する感情から解き放され、それにつれて「家」というものが休めない場所からリラックスできる場所が変わったと考えられる。なお、主人公である「将来の自分」は終始成功を掴んでいる「成功者」であったが、いつか騙され、すべてを失ってしまうのではないかといつも心配している人でもあった。これは作成者エが自分の家族を頼りにできず、すべて自分1人でやるしかないことに起因する脆弱性を伴った空想として考えられるかもしれないが、さらなる検討は必要である。

なお、箱庭の作成によって母親に対する認識に変化が生じたと考えられるが、「箱庭作品」そのものは「切り口」であり、それよりも、むしろ面接者との関係のなかで、家族について自分の考えや感情を自由に語ることもたらす影響のほうが大きいと考えられる。

4. 結果

これまでは日本人作成者 8 名中国人作成者 4 名計 12 名作成者の各回のセッションおよび表現された家族イメージの表現プロセスをまとめた。これからは各々作成者に見られた特徴について全体的な検討を行う。

4-1 日本の場合

4-1-1 家族の箱庭のテーマ

箱庭は認知世界の具体的、現象的把握を目指すものであるが、それは単に家族に対する過去の出来事や現状の再現にとどまるものではなく、言葉ではうまく言い表しがたい漠然とした家族のイメージやファンタジー、ヴィジョンといったものの表現をも可能にする媒体である。そこでそうした特性を生かし、これを把握するために家族の箱庭のモチーフから「Ⅰ.家族の具体的な出来事の回想、家族の現状の再現」と「Ⅱ.心に描いたイメージ上の家族、ヴィジョン」という 2 つのメインカテゴリーを設定した。そしてこの 2 つのカテゴリーを基準に 80 セッションすべてについて類似したテーマごとにまとめて分類したところ、計 6 つのサブカテゴリーが抽出された(表 5)。

表 5 4 つのメインカテゴリーと 6 つのサブカテゴリー

	Ⅰ.家族の具体的な出来事の回想、家族状況の再現
サブ	1.家族の風景：過去の家族の回想や日常の再現など 2.家族のイベント：家族や自分にとって意味ある出来事、経験など 3.家族の相互関係：家族の関係構造、家族内葛藤など
	Ⅱ.心に描いたイメージ上の家族、ヴィジョン
サブ	4.家族や自己の意味付け：家族の独自性、自己の存在理由など 5.家族や自己の将来、ヴィジョン：家族の未来、理想の家族など 6.イメージ上の家族：心に描く想像の家族、ファンタジーなど

この 2 つのメインカテゴリーと 6 つのサブカテゴリーに基づき、全セッション

ンについてその分布を表示したのが表 6 である。例えば、作成者 A はセッション 1 では「1. 家族の風景」、セッション 2 では「2. 家族イベント」について示していた。全体としては 48 セッション(60%)がメインカテゴリー I, つまり昔、家族で出かけた海や高原、動物園などでの楽しい思い出、それに両親や兄弟との葛藤や競争心、嫉妬などをリアルに展開させるなど、家族の具体的な出来事を回想したり、日常の家族関係などを再現した家族イメージであることがわかる。これに対して 32 セッション(40%)は、家族成員のそれぞれが小人や動物のキャラクターに置き換えられて海底や深い森を探索したり、未来の家族、あるいは理想の家族が生き活きと描かれたりするなど、メインカテゴリー II に分類されている。作成者も含め家族成員一人ひとりが具体的な人形ではなく、彼らを象徴する動物などに置き換えられ、それを素材にして家族イメージを創作していた箱庭が数ケース見られたのも、このカテゴリー II に含まれる箱庭の特徴でもある。また個人的には、メインカテゴリー I が 7 割以上を占める作成者(A.B.C.D)と、反対にメインカテゴリー II が 7 割以上あった作成者(G.H)もいることから、明らかに個人差も認められる。家族イメージの作品には、作成者の自分の家族に対する主観的な認識がさまざまな形で表現される。しかもこれをシリーズとして続けていると、つまり個人内の家族イメージの変容のプロセスとして追ってみると箱庭の中で一定の流れが生じ、独自のプロセスが進行していくことが多いことがわかる。このとき家族イメージ作品のモチーフとなるのは、その家族の過去のイベントや現状についての回想、再現といったものばかりではない。心に描いたイメージ上の家族、将来の家族、理想の家族などのモチーフも出現している。

表6 テーマの推移

	作成者	セッション										メイン	
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	I	II
サブ	A	1	2	2	2	2	1	2	1	2	1	10	0
	B	1	3	3	2	2	2	4	2	3	4	8	2
	C	1	1	1	2	6	6	2	2	2	2	8	2
	D	1	1	6	1	2	1	5	4	1	1	7	3
	E	5	1	2	3	3	3	4	3	5	4	6	4
	F	1	2	3	6	6	5	2	6	6	4	4	6
	G	4	6	6	6	6	2	2	6	6	1	3	7
	H	2	1	6	6	6	6	6	6	6	6	2	8
											計	48	32

またこれを回数を追って検討してみると、全体として前半よりもセッションを重ねた後半になるにつれ家族のモチーフは日常の具体的な事象から離れ、心に描かれたイメージとしての家族がモチーフになっていく傾向にあることが認められた。表7は家族イメージの作品の制作を継続していくにつれ、テーマそのものにもどのような変化が生じているかをとらえるために、最初の3セッションと最後の3セッションについて各カテゴリーの出現頻度を示したものである。その結果、メインカテゴリーIは前半と比べ後半はやや減少する傾向にあり、反対にメインカテゴリーIIは後半でやや増加している傾向にあることがわかる($\chi^2=3.2$, $df=1$, $p<.1$)。サブカテゴリーのなかでは「1.家族の風景：過去の家族の回想や日常の再現など」の後半での減少が特徴的である。事例数が少ないので、一般化はできないが、10回のうち、メインカテゴリーIが7割以上を占める《作成者A, B, C, D》は、総じて現実の家族関係や出来事を基盤に、そこからイメージを展開させて家族や自分の将来、夢を箱庭で表現しようとする傾向が窺えた。これに対して、メインカテゴリーIIが7割以上あった《作成者G》は、家族のイメージを自由に浮かべ、そのなかで自分が主体的に行動しようしたり、家族を展開させていくような動きが見られたが、反対に《作成者H》は、できるだけ現実に触れることは避け、空想やイメージの世界でなら自分の

気持ちや夢、将来など表現できるといった傾向が窺え、作成者 G とは異なる反応を示していた。

表7 カテゴリーの(前後3回)出現頻度

カテゴリー		前3回	後3回
I	1	10	5
	2	5	5
	3	3	2
	計	18	12
II	4	1	4
	5	1	1
	6	4	7
	計	6	12

また個々の作成者の作品のテーマを追ってみると、メインカテゴリー I、あるいは II のどちらか一方に偏っているといった個人差は認められるものの、1名を除くほとんどの作成者のモチーフはこの両方のカテゴリーに及んでいる。

例えば《作成者 D》は、前半では子どもの頃の思い出や家族の日常、それに町の風景といったことがテーマの中心になっていた。やがて中盤になると、背景では依然として‘家族旅行’という現実的な家族関係を展開させながらも、これまでの親の躰や道徳観に対する不満や疑問を本人のコマに「本当かよ!」と本音で語らせている(セッション 5)。そしてセッション 6 では‘これからの家族’というタイトルをつけ、頑丈な家の柵の中にいる自分が両親との死別の不安を実感しつつも、同時に自立への気持ちも強いことを自覚するようになっている。これがセッション 7 になるとテーマは未来の家族がメインとなる(図 1)。上部中央の橋を渡っていくとそこが未来の家族。「両親はあと数年で入ることになるお墓に向かって歩いている」と説明する。そこは自分がこれからやりたいことがいっぱいある世界なのだが、困難もたくさんあって頼れる人もいない。そんな不安は 5 匹の蛇を配置することで表現している。セッション 8 では、背景はビルや神社が建っている現代の街並みなのだが、そこには家族の他にもすでに亡くなっている祖先も来ている。今、自分がここにいられること、これから挑戦しようと思えることは「すべて祖先や家族のおかげ」だと思えるので、これらすべてを含めた家族イメージの作品の中に自分の立ち位置を見つけ実感しようと

している(タイトル‘自分がここにいる理由’)。こうしてセッション 9 では再び家族との楽しい思い出を回想してコンパクトに再現するとともに、最後のセッションには‘いつもの家族’というタイトルをつけ、それぞれ個性を持つ家族成員が家族という枠を共有しながら生活しているという家族の日常を描いている。このように個人差はあるものの、家族の箱庭を 10 回連続して作成していく過程では、テーマは様々に展開していくということが明らかになった。



図 1 作成者 D のセッション 7

4-1-2 コマの使用

家族成員を表すコマに限定して検討してみると、人間のコマ、つまり人形を家族成員に見立てて配置しているセッションは全体の 61%，動物に置き換えて表現しているのが 31%，その他、人形と動物を混在させたり、家族成員を象徴するコマがまったく登場していないセッションも 8%認められた。こうしたことから、作成者は家族成員のコマを画一的に当てはめたり、特定の家族成員に一度使用すると、そのコマをいつまでも固定化させて用いるのではなく、それぞれのテーマごとにキャラクターに合ったコマを工夫して探し、家族の箱庭を作成していると推測できる。

例えば《作成者 F》などは他の家族成員は人形を用いて表現しているにもかかわらず、本人とおぼしき人物についてはしばしば宇宙人として登場させている。いずれの場合も、家族と一緒に遊んだり行動しているとき、宇宙人(本人、男性)

はその流れに入れず、少し距離を置いたところから眺めているといった状況は共通している。男子の人形ではなく宇宙人としての登場は、家族からの距離感や孤立感を実感するのを少しは緩和させてくれる機能を果たしているものと考えられる。やがてセッションを重ね 8 回目ともなると、親や姉妹との心理的距離は縮まり、自分の輪郭も少しは明確になってきて、宇宙人はいつの間にか皆と楽しく遊ぶ男の子の人形に変わっているのである。また《作成者 B》では、わがままな姉への不満や反発心から日頃からリアルな葛藤を繰り広げていたが、いよいよその姉の出産を控えたとき、家族をそれまでの人形から象(父)、羊(母)、馬と鹿(2人の姉)、それに豚(本人)に変身させることで、家族が皆で暖かく姉を支え、出産を見守っている光景が展開できるようになっている(セッション 6)。

4-1-3 作品作成に伴う気づき、課題の自覚

ここで言う「箱庭作成による気づき、課題の自覚」とは、作成過程での体験を含め、作成者が新たに気づいたこと、今後の課題を自覚したことなどについて言語化した内容のことである。作成者から得られた内省は主に‘自己’について語られたものか、‘家族’に関する事柄かということで分けてみると、家族の出来事や現状が箱庭のモチーフとなっている場合は、「家族に頼って安心している自分、家から自立したがっている自分、親の躰や価値観に縛られていた自分」に改めて気づかされたり、「家族への思いやり、親の支えになる、家族とのコミュニケーション」といったことをこれからの自分の課題としてあげるなど、自分に焦点化して語られたのは 50%であった。同様に、「家族は離れていてもお互いのことを考えている」ことに気づいたり、「それぞれがもっと適切な距離を取れるようにならなければ」と家族のこれからの課題を自覚するなど、家族そのものに対する事柄について述べたものも 47.9%いて差は認められない。

ところが、イメージ上の家族やヴィジョンなどがモチーフになっている箱庭では、自己についての気づきや課題を報告したのは 62.5%と多く、反対に家族への気づきや課題に言及したものは 37.5%と少ない。この結果からすると、家族の現状から離れてイメージ上で思いを巡らすときのほうが、「自立に伴う解放感と淋しさを実感した」とか、「この社会でいかに自分の価値を実現するか」といったように、家族とのかかわりの中で自己の様態に意識を向け、正面からじっくりと吟味してみようとする動きが起きやすい傾向にあることがみて取れる。

4-2 中国の結果

中国の場合、事例の数が少ないこともあり、全体的な特徴の数量的な分析は参考程度にとどめ、加えて4人それぞれの作成者の特徴について主に前述の3側面から個別的な分析も行った。

4-2-1 家族の箱庭のテーマ

箱庭に表現された家族イメージのテーマについてすべてのセッションを検討したところ、日本の場合と概ね同じような傾向が見られた。すなわち、中国では、日本人作成者と同様の観点で検討したところ、箱庭に表現された家族イメージのテーマは家族の過去の出来事や体験、それに現在の家族関係など現実に即したものがモチーフとなり、それを具体的に再現していると捉えられるカテゴリーⅠと、家族の中での自分の存在意義や将来の家族、理想の家族、仮想の家族のように、イメージやファンタジー、ヴィジョンとして心に描いた家族がモチーフになっているカテゴリーⅡ、の2つに大別でき、加えてその比率は16:24であることが明らかになった。

4-2-2 コマの使用

コマの使用に関しても、日本と同じ傾向が見られた。すなわち、中国でも家族成員を表すコマに、1.人間のコマを見立てて配置しているもの、2.動物やキャラクターのコマに置き換えて表現しているもの、3.家族成員をまったく登場させていないもの、の3種類が認められた。

また、試みに、作品のテーマとの関係について検討してみると、作品のテーマがカテゴリーⅠ・「家族の具体的な出来事の回想、家族現状の再現」である場合では16セッションのうち、ほとんどが家族に人間のコマを用いたセッション(15セッション)であったが、作成者イのセッション1のような動物やキャラクターを用いたセッションも1回見られた。一方、作品のテーマがカテゴリーⅡ・「心に描いたイメージ上の家族、ヴィジョン」である場合では24セッションのうち、家族を表現するのに人形を用いたのが17セッション、動物やキャラクターを用いたのが7セッションであった。ただし、作品の内容を見てみると、作品の内容がファンタジー的なものであるのは、作成者イのセッション1とセッション10の2セッションのみであったが、この2セッションで家族を示すのに用いられたコマは全部動物やキャラクターであった。これに対して、作成者ウ

のセッション 1~3 または作成者エのセッション 1~10 のような、テーマはイメージ上の家族像ではあっても、そのうち、内容が現実世界に存在しえるものが 8 セッションあったが、この家族を表現するのに用いられたコマは全部人間のコマがであった。

4-2-3 作品作成に伴う気づき、課題の自覚

作品作成に伴う気づき、課題の自覚に関して、中国では日本とほぼ同じ傾向が見られた。つまり、中国でも家族イメージの作品を作ることによって作成者が新たに気づいたこと、自覚した課題についてその対象から分類すると、「家族の健康が心配」、「家族の大切さ」というように家族そのものが気づきや課題の対象になっているものと、「自立したがっている自分」、「自分の考えは理想的すぎる」というように、自分自身を対象にして家族の中での自分の有り様やこれからの方向性といったことについて語られるものと二分できる。

また、作品のテーマとの関係を見てみると、作品のテーマがカテゴリー I・「家族の具体的な出来事の回想、家族現状の再現」である場合では家族との関係についての気づき・課題は 9 セッション、自分自身についての気づき・課題は 8 セッション、と明確な差が見られなかった。同様に作品のテーマがカテゴリー II・「心に描いたイメージ上の家族、ヴィジョン」である場合でも、家族との関係についての気づき・課題は 10 セッション、自分自身についての気づき・課題は 14 セッション、と明確な差は見られなかった。

4-2-4 個別分析

《作成者ア》：作品のテーマに関しては、カテゴリー I に属するのは 6 セッション、カテゴリー II に属するのは 4 セッションであるが、カテゴリー II に属するセッションの内容は家族の理想像であるものの、ファンタジー的な意味合いというよりもむしろ、「リゾート地のようなところでのんびり休む」といったように現実的な内容を反映したものになっている。家族のコマに関しては家族成員が登場しないセッションも見られたが、基本的には家族成員を表現するのに人間のコマを用いている。気づき・課題に関しては家族との関係についてのもの(計 7 セッション)が、自分自身についてのもの(計 3 セッション)より多かった。全体的には、作品は最初「家族全員で楽しくてのんびり生活を送っている」というような家族の理想像であり、その後「面白くない」家族の現状を表すもの

に変わったが、最後になると内容は依然として家族の現状であったが、家族に対して「生活がそんなに面白いわけではないけど、家族のみんなが一生懸命なのは理解できる」と家族の現状を少しは受け入れられるような流れに変化している。

《作成者イ》：作品のテーマに関しては、カテゴリーⅠに属するのは5セッション、カテゴリーⅡに属するのも5セッションである。またカテゴリーⅡに属するセッションの内容は「赤ちゃんが困難に遭遇しながら旅をする」というように、ファンタジー的な意味合いが比較的強い。家族のコマに関しては基本的に家族成員を表現するのに人間のコマを用いているが、ファンタジー的な意味合いの強いセッションでは自分自身を表現するのにキャラクターを用いていることもある。気づき・課題に関しては家族との関係についてのもの(計5セッション)と自分自身についてのもの(計5セッション)は同じ程度に認められる。全体を見てみると、最初から見られた家族から自立したい気持ちはさまざまなエピソードのなかで繰り返して取り上げられていくうちにより明白になると同時に、「家族からの自立」から生まれる不安にも気づくようになっている。

《作成者ウ》：作品のテーマに関しては、カテゴリーⅠに属するのは4セッション、カテゴリーⅡに属するのは6セッションである。また、カテゴリーⅡに属するセッションの内容はファンタジー的といよりもむしろ、「両親がテントのように守ってくれる存在」や「自分は家という港から出航していく小舟のようだ」というように、家族関係は抽象的に表現されている。家族のコマに関しては基本的に家族成員を表現するのに人間のコマを用いている。カテゴリーⅡに属するセッションの場合、とくに家族の大切さや、大切な家族から自立していくことに対する迷いというような抽象的な内容を表そうとする場合、基本的に動物を用いて家族と自分自身を表現している。気づき・課題に関しては家族との関係についてのもの(計3セッション)は自分自身についてのもの(計7セッション)と比べて少ない。全体を見てみると、「実際にあった家族イベントについての回想」から始まり、「自分にとっての家族の大切さについての認識」を経て、最後にいずれ家から出ていくが、家族が大切であるゆえに自立していくことに迷いを感じるという「家族からの自立」への戸惑いを表現できるまでになっている。

《作成者エ》: 作品のテーマに関しては、カテゴリⅠに属するものは見られず、10セッションすべてがカテゴリⅡに属するものであった。ただ、カテゴリⅡに属するセッションの内容は作成者Aの場合と同じような、現実感の強い家族の理想像である。コマに関しては毎回決まった人間のコマしか使わず、しかも毎回の配置もほぼ同じである。気づき・課題に関しては家族との関係についてのもの(2セッション)は自分自身についてのもの(8セッション)と比べて少ない。全体的な流れを見てみると、最初のうちは自分が将来いかに幸せな生活を送っているかについてしか語らず、母子家庭であるにもかかわらず、母親についてはほとんど触れていなかった。しかし、セッションの回数が重なるにつれて、母親の話を少しずつ語るようになり、しかも前半は母親に対する不満ばかりであったが、次第に母親に甘やかしてほしい気持ちや母親を守りたい気持ちについても触れるようになった。そして最後のセッションでは母親について「母親と適切な距離を持ちながら、母親に親孝行をしたい」と母親と適度な間を保ちながら向き合えるようになっている。それと同時に、自分が目指している「幸せな生活」が「理想にすぎないのではないか」と語り、今の自分の現実とも向き合い始めている。

5. 考察

5-1 家族のテーマの展開

家族イメージの作品には、作成者の自分の家族に対する主観的な認識がさまざまな形で表現される。しかもこれをシリーズとして続けていると、つまり個人内の家族イメージの変容のプロセスとして追ってみると箱庭の中で一定の流れが生じ、独自のプロセスが進行していくことが多いことがわかる。このとき家族イメージ作品のモチーフとなるのは、その家族の過去のイベントや現状についての回想、再現といったものばかりではない。心に描いたイメージ上の家族、将来の家族、理想の家族などのモチーフも出現している。このような、「現実の家族」と「イメージ上の家族」の出現は日中両国ともにおいて認められた。

また日本では、「現実の家族」と「イメージ上の家族」の出現を継続して追ってみると、全体として前半よりもセッションを重ねた後半になるにつれ家族のモチーフは日常の具体的な事象から離れ、心に描かれたイメージ的な家族がモチーフになっていく傾向にあることも認められた。

箱庭とは、いまだ明確には概念化されていないような家族に対する曖昧な認識、つまりことばではうまく形容しがたいような、あるいはこれまで意識していなかったような家族への思いなども、多種多様なミニチュアを用いて形あるものとして集約的に表現することを可能にする媒体である。心理治療で言語的な表現が苦手な人にも箱庭を導入することが比較的容易であるのは、このノンバーバルな性質にある。ときにその混沌とした世界の表現が、作成者の内面を揺り動かしたり破壊的に働くこともありうるが、箱庭の枠はそうした危険性から作成者を守る一つの機能を果たしている。

そして、《作成者 D》の例で示したように、作成された一連の家族の作品には、作成者の自由な表現を保証することにより、ときには現実の家族の回想や再現をモチーフに、またときにはイメージとして心に描いている家族をモチーフにして、そこにさまざまなテーマを織り込むことができるようになる。したがって、作成者にとってはそれだけ自分の家族のことを認知的、感情的な側面を含め多面的、多次的にとらえることが可能になり、これにより家族の立体的な把握はより一層促進されることが考えられる。

また作成者それぞれについて家族の作品を継続的に追ってみると、各事例に示したように、「家族からの‘自立⇔依存’の葛藤」のテーマがすべての作成者に認められたのは青年期に特有の特徴としてとらえることができる。当然のことながら、このテーマの表現様式は個々人によって微妙に異なるが、青年が自分の家族を意識したとき、家族からの自立は誰もが直面せざるをえない課題となる。例えば、《作成者 E》についてその展開プロセスを全体として概括してみると、前半では家族の日常や思い出などの再現の中に家族とのちょっとした葛藤などが織り込まれたりしている。やがてそれが中盤から後半にかけて‘一人暮らし’に象徴されるようにさまざまな分離・独立の試みがなされ、最終的には‘家族団欒’‘集合写真’‘家族の個別性’‘自己の存在理由’といったテーマで再び家族としてのまとまりを体験している。

5-2 コマの使用の特徴

家族成員に見立てたコマとして、両国とも、①人間のコマ(人形)、②動物のコマ、それに③家族成員を象徴するコマが登場しないという 3 種類の使用が認められた。このことから家族成員のコマの使用は確定化されたものではなく、家族成員のイメージにはバラエティがあり、それぞれに工夫されていることが理

解できる。作成者は自分が表現したいと思っている家族成員のキャラクターにぴったり合ったコマを探しているのであるが、ここで使用されるコマに違いが生ずるのはある意味、家族イメージの作品のモチーフやテーマと関連があるように考えられる。

日本では家族の過去の思い出や現状の再現(メインカテゴリーⅠ)などがモチーフになっている場合、人形が用いられているのは 70.8%もあるが、家族成員が動物に置き換えられて登場しているのは 22.9%に過ぎない。反対に家族の未来や理想像など抽象度の高いイメージ上の家族がモチーフ(メインカテゴリーⅡ)になっているときは、メインカテゴリーⅠの場合と比べて人形の使用率は 46.9%と低く、動物は 43.8%と高い比率を示している。

中国ではカテゴリーⅠ・「家族の具体的な出来事の回想、家族現状の再現」がテーマである場合でも、カテゴリーⅡ・「心に描いたイメージ上の家族、ヴィジョン」である場合でも、家族を表現するのに人形を用いたものが多く、動物やキャラクターを用いたのは少なかったが、「心に描いたイメージ上の家族、ヴィジョン」がテーマである作品の内容を見てみると、違う印象をうける。つまり、《作成者ウ》のセッション 1~3 または《作成者エ》セッション 1~10 のような、作品のテーマがイメージ上の家族像であるため、カテゴリーⅡに分類されているものの、その表現された家族像というのはファンタジー的なものというより、現実世界に存在し得る家族像に近い家族イメージになっている。そのため、家族を示すのに用いられたコマは全部人間のコマがであった。それに対して、作品の内容がいわゆるファンタジー的なものであるセッション(作成者 B のセッション 1 とセッション 10 の 2 セッション)では家族を示すのに用いられたコマが全部動物やキャラクターであった。したがって、中国の場合でもイメージ上の家族を表現しようとするような場合は動物やキャラクターを用いる傾向があると言えよう。

家族の具体的な出来事の再現のような場合、例えば父親は大人の男性、母親は大人の女性といった既成の人形に同一化することにはそれほど違和感はないと思われる。ところが理想の家族やファンタジーを展開するようなときは個々の人形のもつ具体的な属性にイメージが規定されてしまう可能性があるので、動物や小人、お姫様、宇宙人といったように、その対象にさまざまなイメージの要素が織り込められるようなコマを使用することが多くなっていると考えられる。

ただ一つ、すべてのセッションで動物のコマだけで家族成員を表現し、人形は一度も使用しなかった特異な例が《作成者 G》の作品である(家族以外の他人は人形で表現することもある)。最初は「家族はいろいろな面があってどのように表現したらいいかわからない、何を考えているのかわからない」と何度も述べていたが、毎回本人がその時に感じている家族成員のキャラクターに合った動物を真剣に考え、それを探して配置していくことで、セッション 10(図 2)では老人が父親(今回だけ人間のコマ)、羊が母親、犬が弟、鼠が姉、そして柵の中にあるすべてが作成者自身を象徴しており、「5人の家族はただ一緒にいるだけだけど、それぞれが独立した個人だという感じがある」と言語化できるまでになっている。つまり、抽象度が高かったりファンタジー的な要素を多く含む家族イメージの作品で家族成員に人形以外のコマを使っていたとしても、それを繰り返し作成していくことで全体としてのまとまりや個人の輪郭線がしだいに明確になっていく。



図 1 作成者 G のセッション 10

このように家族イメージの作成者は、意識的にせよ無自覚のままであれ、そのときのテーマやモチーフを表現するのに適した家族成員のコマを選択し、うまく使い分けていると考えられる。箱庭のコマには多義性、具象性、直接性や集約性といった特性が備わっているため(河合, 1967.1969), 作り手はその特性をうまく活用して連想を豊かに膨らませ、アンビバレントな感情や心の揺らぎ

といった青年期に特有な心情などの表現をも可能にしている。選ばれた家族成員のコマは一つひとつが存在感や重みをもって伝わってくるが、それを実現するための十分な受け皿、つまりコマの種類もできるだけ多く備えておくことは重要な条件であって、これをある程度補うために作成者自身が紙粘土などで納得できるようなコマを新たに創るといった方法の積極的な導入も一案であろう。ここでは家族成員を表すコマに限定して考察したが、橋やビルなどの建物、樹木といった主に背景として使用されることの多いミニチュアについても同様の検討が必要であるが、今回は事例的にも少ないのでこの点については今後の課題とする。

5-3 家族イメージ作品の作成による気づき、課題の自覚

家族イメージの箱庭を作成の過程で、あるいは振り返りの段階で、新たに気づいたこと、課題であると認識したことについて作成者から得られた内省は両国ともに、①自己に焦点化して語られたものと、②家族そのものの現状認識やこれからの課題について触れたもの、の2種類が見られた。

また、作品のテーマとの関係を見てみると、日本の場合では、イメージ上の家族や家族ヴィジョンがモチーフになっている箱庭では、自己についての気づきや課題を報告したのが全体6割を超えている。このことから、日本では家族における自分のあり方や自己の存在そのものについて吟味しようとする動きは、現実の家族からは離れ、イメージ上で思いを巡らせている過程で起きやすいという可能性が読み取れよう。

一方、中国では作成者の人数が少なかったこともあり、数量的には作品のテーマがカテゴリーⅠ・「家族の具体的な出来事の回想、家族現状の再現」である場合でも、カテゴリーⅡ・「心に描いたイメージ上の家族、ヴィジョン」である場合でも、家族との関係についての気づき・課題と自分自身についての気づき・課題との間に明確な差が見られなかった。しかしながら、セッションの回数を重ねるにつれて、その程度に違いがあるものの、それぞれの作成者は自分の家族成員または自分自身についての理解が変わっていく傾向が認められた点は注目に値する。例えば、《作成者ア》は最初は家族に健康で穏やかな関係を維持しているという認識を持っていたが、すぐに母親との意見の食い違いを意識したり家にいることの意味のつまらなさを自覚するようになっていく。しかしこれが10回目になると、そうした家族をも受け入れられるようになり、「皆は一生懸命生

きていることは理解できるようになった」と語っている。また最初 2, 3 回において母親についてはほとんど触れず、「幸せな生活」しか語らなかった《作成者エ》は回数を重ねるにつれて、少しずつ母親に対する不満の気持ちから次第に母親に甘やかしてほしい気持ちや母親を守りたい気持ちについても触れるようになり、最後のセッションでは母親について「母親と適切な距離を持ちながら、母親に親孝行をしたい」と自分の葛藤している気持ちに向き合えるようになっていった。さらに自分が目指している「幸せな生活」が「理想にすぎないのではないか」と語り、今の自分の現実と向き合い始めている。このように、中国でも家族における自分のあり方や自己の存在そのものについて吟味しようとする動きは、作品のテーマとの関係が日本の場合ほど明白ではないが、セッションの回数を重ねるにつれて変化していく傾向が認められた。

今回、作品完成後の半構造化面接ではあえて付加的な質問は必要最小限にとどめている。それにもかかわらず箱庭作成から体感された気づきや自覚が比較的率直に語られているのは、遊戯的な要素を多く含む箱庭という素材が作成者をリラックスさせていたということにも起因するであろうが、「作品完成後の質問で毎回気づきや課題について質問されることが分かっていたので、心理的課題などに自然と意識を向けるようになり、さまざまなことへの気づきを促進させていたと感じる」という主旨の報告が作成者から多く寄せられている。したがってこの家族イメージ配置法を心理臨床に適応しようとする場合も、セラピストの効果的な応答の技法や姿勢がクライアント気づきや洞察を深め治療的展開を促すための重要な要因になっていることは間違いない。

6. 今後の課題

研究 4 では箱庭を表現媒体とした家族イメージ配置法を用い日中両国青年の家族イメージについて検討を行った。箱庭に表現されている作成者の家族は、単なる静的場面の写しではなく、自身のイメージの中で刻々と変化を続けている家族の世界である。したがって一応完成した家族の箱庭も、そこから少し距離をとってじっくり味わい、作成過程や内容について語っているうちに家族のイメージは微妙に変化するし、井芹(2013)の研究に示すように、その作品にタイトルをつけることでも家族イメージは発展したりする。箱庭という多様性をもつ表現媒体を導入し、これを家族イメージ配置法として 10 回継続して表現して

もらう過程では、作成者は自分の家族や自分自身についての理解を深め、新たな洞察を促進させることができるという、心理療法における一技法として導入の可能性が示唆されたと言えよう。

ただし、幾つかの課題がまだ残っている。まず、最初の2, 3回の作品が家族の様子を客観的に表現しようとするのはしばしばであるため、「家族イメージ配置法」を1回実施しただけでは青年がイメージする「家族」をアセスメントすることが難しいかもしれない。従って、今後は「家族イメージ配置法」の適切な実施回数についてさらなる検討が必要であろう。また、本研究では日中両国計12名の作成者を対象としたが、青年期の家族に対する認識と体験プロセスをさらに明白にさせるために、さらに多くの対象者に実施する必要がある。そして、今回の研究は家族イメージ配置法を同一個人に10回継続して実施したとしても、実際の事例ではない。したがって、ここでの気づきや課題の自覚がどれほど本人に内実化されているかについての検証は今後の事例での適用の積み重ねに委ねるしかない。

VI 総合考察

本研究では主に日中両国の青年が捉える「家族」について論じてきた。本章ではこれまでの内容をまとめ、考察を行う。

家族は夫婦とその血縁関係者を中心に構成され、共同生活を行っている集団であり、個々の家族成員に対して大きな影響をもつ。また、個人の心理的発達を考えると、家族という要因はとりわけ親からの心理的な自立、つまり「心理的離乳」に切実に直面するヤングアダルト期の青年にとって、大きな影響をもつ。加えて、過去の歴史を振り返ってみても日中両国が属するアジアにおいて「家族」というものが文化的にも重要視されていることがわかる。したがって、日中両国の心理臨床の実践、とくに両国のヤングアダルト期青年を対象とする場合、「家族」というものは非常に重要な要因であり、ヤングアダルト期の青年たちが「家族」というものをどのようにイメージしているかについて検討することが青年期における自立と成長の過程を捉えていく上で重要な意味があると考えられる。個人がもつイメージはその人の主観的世界と深く結びついている。それ故に、イメージは人々が現実を心の中でどのようにとらえ、どのように認識しているかについて理解するための貴重な手がかりとして、個々人の心の世界を理解することを目指す心理臨床の領域で重要視されていることは言うまでもない。

心理臨床では、イメージを外的刺激と知覚によって生成された「視覚像」として、あるいは内的起源をもつ「心的事実」としてとらえるなど、様々な異なる立場がある。本研究では「臨床イメージ」を重視する立場に立ち、イメージをあくまでも個々の青年に内的起源をもつ心的事実としてのイメージを扱うものとし、「家族イメージ」を個々の青年が自分の家族について抱く関係性や構造に関する心像として位置づけ、吟味した。

イメージを検討する方法としては、言語水準から情緒的意味として捉えるSD法と視覚的・空間的イメージとして捉える投映法の2種類が挙げられる。SD法はその内容を客観的に数量化して捉える場合のスコアリングの便利さと他の変数との関連性を検討できる点では大きな利点をもつ。一方、イメージ表現に含まれる多くの情報を捉える点では投映法のほうが適している。本研究では主に投映法を用いて家族イメージの検討を行った。家族イメージを捉える投映法の代表的なものとしては、**Family System Test(FAST)**や、**家族関係単純図式投影法**、それに**家族イメージ法(FIT)**といった既存の方法が挙げられる。本研究では、①ミニチュアの効果的な活用、②表現される物語性、③砂箱の機能、といった側面の特性を効果的に活用し箱庭用具セットがイメージを捉えるのにより適切な表現媒体であると考え、主に箱庭用具セットを用いて両国の青年の家族イメー

ジを検討にした。

本研究の全体的な構成としては、まず日本と中国の青年を対象に、質問紙や投映法を用いて彼らが自分の家族に対していかなるイメージを抱いているか、つまり個々人のもつ家族イメージの様相や特徴を把握し、分析することを目的に3つの調査を行った。続いて、これら一連の調査によって得られた結果に基づき、基本的には箱庭という表現媒体を導入し、テーマを「家族」と指定した箱庭制作を同一対象に継続して10回導入するという臨床的なアプローチを試みることにより、青年の家族イメージに対する変容過程とそれに関わる要因を検討した。同時に「家族」をテーマにした箱庭を心理療法に適応するための有効な手がかりを検証するとともに、中国における臨床実践への適用の可能性についても検討した。

研究 1

人間の発達にとって重要な時期である青年期は、子どもが親から心理的に離れて自立し、個の確立を課題とする時期である。また、青年の自我が健全に発達していくための一つの条件として、その家族が安らぎの場であり、家族関係が健全であることが挙げられる。研究1では日本と中国の青年を対象に、家族構造測定尺度と家族機能測定尺度を用いて、彼らが認知した父親、母親および自分自身といった家族成員の勢力が家族機能、とくに家族の適応性に及ぼす影響について検討を行った。

そこでさらに、各家族成員の勢力の得点について両国の間に差があるかについて t 検定で検討を行った結果、「母親勢力」と「子ども勢力」については両国の間に有意な差が見られなかったが、父親勢力については両国の間に有意な差が見られ、日本の得点と比べて中国の得点の方が高かった。続いて、各国において「父親勢力」、「母親勢力」、「子ども勢力」の間に差があるか、分散分析で検討したところ、両国とも0.1%水準で有意差が見られた。さらに多重比較を行ったところ、日本では父親の得点と母親の得点の間に有意差はなかったが、両者ともに子どもの得点より有意水準1%で高かった。一方、中国では父親の得点が母親及び子どもの得点より高く、さらに母親の得点も子どもの得点より有意水準0.1%で有意に高かった。

また、各家族成員の勢力の強さについての認識が家族成員間の関係に影響を与えると同時に、凝集性や適応性といった家族全体のあり方にも影響を及ぼす、という仮説を仮定し、「父親勢力」、「母親勢力」、「子ども勢力」、「結びつき」、「葛藤」、の家族構造測定尺度の下位尺度を説明変数とし、凝集性と適応性を基準変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。

まず、凝集性については、日本では凝集性の最も強い予測要因は「結びつき」

であった。「父親勢力」は影響が弱いながら、凝集性の抑制要因となっていた。「結びつき」の最も強い予測要因は「父親勢力」であり、その次が「子ども勢力」であった。一方、中国では凝集性の最も強い予測要因は「ルール」であり、次に「結びつき」であった。また、「ルール」の最も強い要因は「子ども勢力」であり、その次が「父親勢力」であった。次に、適応性については、日本では適応性の最も強い予測要因は「結びつき」であり、「子ども勢力」がその次であった。「父親勢力」が弱い影響で適応性の抑制要因となっていた。「結びつき」についてはその最も強い予測要因が「父親勢力」であり、その次が「子ども勢力」であった。一方、中国では「ルール」が適応性の最も強い予測要因となっており、「結びつき」がその次であった。さらに、「子ども勢力」が「ルール」の最も強い予測要因であり、「父親勢力」がその次であった。なお、家族の凝集性に関しては、両国とも、家族成員の勢力が家族成員間の結びつきを介して家族の凝集性に対して影響を与えるという傾向が見られたものの、凝集性と「結びつき」との定義内容を精査したところ、両者の概念には類似性があることが明らかになった。そのため、本研究では主に適応性に対する家族成員の勢力の影響について検討を行った。

日本の家族の適応性について得られた結果から判断すると、日本では父親の勢力が強いと家族の適応性が強くなるという点が特徴になっている。したがって、父親が家でもつ決定力や影響力、発言力が強いほど、家族のまとまり具合は高まり、危機に対応する能力も強まると考えられる。この結果は尾形・宮下(2002)、平山(2001)や中見・桂田(2008)の研究で得られた結果と一致する。つまり、家族全体が適切に機能するためには、父親が家庭で自分の力を発揮することが不可欠な条件になっていると考えられる。父親の勢力の強さは家族を統合する機能につながるが、もし家族の状況に対して慎重な配慮をせずに家族に対して威張った態度をとったり、理不尽な要求や矛盾した指示などを繰り返しているならば、やがてそれが、家族関係に否定的な影を落とすようになる危険性もある。また、適応性に対しては、「子ども勢力」は直接的に正の影響を与えると同時に、「結びつき」を介して間接的にも正の影響を与えていたという結果から、子どもの勢力が強くなると家族の危機を克服する能力が高まる、という傾向があると考えられる。つまり、家族が何らかの危機に直面した際に、子どもが家族成員の一人として自分の力を発揮することが家族成員間の関係を深め、さらに家族全体の解決力がより高められることにつながると考えられる。

中国の家族の適応性については、適応性に対して子どもの勢力が最も強い影響力を持つことが見出された。しかし、子どもの勢力が強いことによっては家族のルールが強まり適応性が高まるという可能性が見られた一方、家族成員間の関係が悪くなり家族の適応性が弱まる、という傾向も見出された。これにつ

いては、父親の勢力の影響という側面から考察を行った。つまり、中国では家庭内のルールが父親によって規定され、父親の意志や価値観が反映される可能性があると考えられる。父親が家族ルールを子どもの意志を尊重する形で規定し、子どもが父親によって決められたルールに従うような場合、その家族のルールは子どもの参加によって強化されると同時に、家族内で緊張感は生じにくくなり家族の結びつきが高まる。その結果、家族の適応性が強まる可能性が考えられる。したがって、数値的には、家族の凝集性と適応性に対する子どもからの影響は父親の場合より強かったが、実際の家庭生活では父親の影響も無視できない。

研究 2

岡堂(1991)は子どもと家族がどのようにかかわりあっているかを適切に理解するためには、「目に見えない家族構造」をアセスメントすることが必要だと述べている。このような「目に見えない家族構造」をアセスメントする手段として、言語水準から情緒的意味として捉える SD 法と家族を視覚的・空間的イメージとして捉える投映法が挙げられる。そして、イメージの内容を客観的に数量化して捉える場合のスコアリングの便利さと、他の変数との関連性を検討できる点で、SD 法には大きな利点があると言われている。研究 2 では家族印象尺度および家族環境尺度のうち、日中それぞれの国において信頼性・妥当性が十分である 1.親密性, 2.葛藤性, 3.知的・文化的志向性, 4.活動・社交志向性, 5.組織性, の 5 つ下位尺度を採用し、両国の大学生の家族に対する印象が家族についての評価にいかなる影響を及ぼしているか、検討を試みた。

家族印象尺度について、それぞれの国の得点を因子分析で分析したところ、いずれの国でも 2 因子が得られ、しかも因子構成はほぼ同じであった。そのため、両国のデータを一緒に用いて因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った結果、2 因子が得られた。第 1 因子は安定感や充実感を表す項目から構成されているため、「居心地よさ」と命名し、第 2 因子は力動性を表す項目から構成されているため「力動的」と命名した。さらに、得られた 2 因子の得点と家族環境尺度の各下位尺度の得点との相関係数を計算した結果、「居心地良さ」は親密性との間に、「力動的」は活動的・社交的志向性との間に強い相関があることがいずれの国においても見られた。これらの結果については、次のように考えられる。つまり、家族印象尺度の因子構造においては両国ともに「居心地良さ」と「力動的」の 2 因子が得られ、各因子に含まれる項目もほぼ共通していたため、青年が自分の家族に対して抱く印象には文化の違いによる質的な違いはないといえる。また、「居心地良さ」は家族成員間の関係を指す意味合いが、「力動的」は家族成員以外の人との関係を指す意味合いが強いため、両国の大学生には自

分の家族を考える際に、家族関係が良いかどうか、また外部との関係が良いかどうかという 2 側面から家族に対する印象を評価しようとする傾向があると考えられる。

続いて、家族評価という潜在因子が家族環境の各側面に影響を及ぼすという基本仮説を設定し、国別に共分散構造分析によるパス解析を行ったところ、両国のモデルの適合度指標はともに十分な値が得られた。親密性、葛藤性、活動的・社会的志向性と組織性の認識については日中両国において同じ傾向が見られ、いずれの国においても青年の家族に対する印象が家族の親密性、活動的・社会的志向性と組織性に対してポジティブな影響を、家族の葛藤性に対してネガティブな影響を与えていた。つまり、家族に対する印象が良いほど、家族を親密的であり、外部との社会的活動が多く、家事などの活動と責任の所在が明確であると評価しようとする傾向が両国の青年に見られた。さらに、日本の青年は家族に対する印象が良いほど、家での文化的雰囲気は濃厚であると評価しようとする傾向があるのに対して、中国ではこのような傾向は見られなかった。その理由は中国の青年にとって、家での文化的雰囲気が濃厚であるということは、自分にストレスをもたらす可能性があるためと考えられるからである。

なお、研究 1 では日本の青年よりも中国の青年の方が自分の家族を親密的と評価しようとする傾向が見られた。また研究 2 では両国の親密性の得点を比較したところ、やはり日本の場合と比べ中国の得点が高く、研究 1 と似たような傾向が見られた。このような傾向はおそらく日中両国の青年の家族イメージに関する違いを示唆すると考えられるが、その実証には質問紙だけではなく、投映法や事例研究的アプローチなどによる詳細な検討が必要になると思われる。

研究 3

家族構造をアセスメントする手段として、言語水準から家族を情緒的意味として捉える SD 法のほかに 視覚的・空間的イメージとして捉える投映法、つまりシンボル配置法が挙げられる。シンボル配置法とは、表現空間にシンボルを用いることで家族関係を投影させ、協力者の家族関係に対する認知を捉えようとする方法である。研究 3 では、中国人協力者 30 名、日本人協力者 30 名に対して、FAST、家族関係単純図式投影法や家族イメージ法などの代表的なシンボル配置法を参考に今回独自に考案した、「家族イメージシステム法」を用い、彼らが認識する家族イメージを検討することにより、両国の家族の構造や関係性の特徴について分析した。

家族イメージシステム法では動物駒(立っている牛、座っている牛、キリン、馬、子馬、シマウマ、石、チンパンジー、サル、豚、海亀、貝、羊、仔羊、ロバ、白熊、仔熊、ライオン、猫、犬、アザラシなど 23 種類)、画用紙(左側が開

いた楕円を描き、そこに「外界」という文字を記した), 筆記用具(クレヨンとペンの2種類), 粘土を使用した。

実施する際には、「これから『私の家族』というテーマで簡単な作品を作ってください」という主旨の教示をして作成にとりかかってもらった。作品完成後、調査協力者には、使われた駒の意味と選んだ理由をたずねた。続いて、家族成員間の結びつきの強さについて7段階(1.非常に弱い~7.非常に強い)による評定を求め、さらに、家族成員間にある感情について自由に記述してもらった。分析する際には、主に協力者とその親との関係を分析の対象とした。得られた結果を分析した結果、両国の間に以下の違いが見られた。

1.駒の数。両国の調査協力者個人が使った駒の総数(外界に当たる所に置かれた駒も含める)について t 検定を行った結果、日本人協力者に比べて、中国人協力者のほうが使われた駒が多かった。具体的には、日本人協力者の作品に出現したのは調査協力者本人、父親、母親、兄弟姉妹、祖父母の5種類のみだったのに対して、中国人協力者ではこれらの家族成員に加え、伯父や伯母といった親戚、さらには友達、隣人といった家族成員以外の特定の人物、それにしばしば家に来ている人、嫌な人、将来の恋人といった不特定の人物といった表現が見られた。加えて、馬の駒で「仕事」、石で「困難」、それになじみのない動物で「未知な物事」を見立てるなどの抽象的な表現もしばしばみられた。

2.駒の配置。主に①「外界駒」の使用のされ方と、②家族イメージシステムで使用された駒が配置されている方向性、という2つの側面で相違が見られた。

「外界駒」というのは円の中ではなく、円の外の部分、つまり、「外界」に当たる部分に置かれた駒を指す。「外界駒」を表現した協力者は中国では10人であったが、日本では2人しかいなかった。 χ^2 検定で検討したところ、1%水準で有意差が見られ、中国側の数が日本側の数に比べて多かった。また、使用された駒が置かれた配置については、日本ではすべての駒を「外界」に当たる領域に向けて置いた協力者が10人いたのに対して、中国ではこのような配置は一切見られなかった。

3.家族認識。主に家族間の結びつき及び家族間の感情から検討を行った。両親間、父子間と母子間の結びつき得点について、国と性別を要因とする分散分析を行ったところ、国別の主効果は「両親間結びつき」は有意ではなかったが、「父子間結びつき」と「母子間結びつき」は有意であり、いずれも中国の方が高かった。国と性別の交互作用は全てにおいてみられなかった。

自由に記入してもらった両親間、父子間と母子間の「感情」については、肯定的、否定的、両価的、中性的・他という4つのカテゴリーに分類し、 χ^2 検定と残差分析で分析した。その結果、家族成員間の感情について、中国人調査協力者は肯定的だと評価する傾向が強く、否定的または中性的だと評価する傾向

が低いのに対して、日本人調査協力者は否定的または中性的と評価する傾向が強く、肯定的だと評価する傾向が低かった。

以上のことから両国の間に見られた3つの相違点について総合的に考えると、これらの相違点は全て家族成員と見なされるカテゴリーに関する日中両国の違いと関連すると考えられた。つまり、「家族」というイメージは日本の場合は「直系血縁」を中核としたいわゆる核家族として認識されやすいのに対して、中国の場合では、「家族」は「拡大家族」、時には「拡大家族」に「関係者」をも加えた「複合家族」として認識されることも少なくない、ということである。

研究 4

研究 3 では「家族イメージシステム法」によって日本と中国の青年を対象に家族に対する認識の様相を調査するとともに、両国の比較も行った。作成終了後、作成者から得られた作品の説明と内省には、家族イメージシステム法を単なる家族アセスメント法にのみ留めることなく、臨床の現場における治療技法の一つとして効果的に活用できるように改善していくための示唆に富む内容が多く含まれていた。

そこで研究 4 では、研究 3 で得られた示唆を生かし、作品のテーマを「家族」と指定し表現媒体を箱庭用具セットに変えるなどして改良を加え、新たなアプローチ法(以下「家族イメージ配置法」と称する)を開発した。これを、同一個人に 10 回継続して実施し、日中両国の青年の家族に対する認識と家族内での様々な体験プロセスをとらえ、心理療法への適用の可能性を検討することを主な目的とした。同時に、事例数としては少ないが、中国における家族をテーマとした箱庭の心理臨床への適応についても検討し、臨床実践に活用するための有効な手がかりを見出すことも試みた。

日本人作成者 8 名、中国人作成者 4 名に対して家族イメージ配置法を実施し、すべての調査終了後、作成者全員について、12 人×10 回=120 セッションのうちからブラインドで 1 セッションずつランダムに抽出して検討した。具体的には、「1.作品全体に展開される家族のテーマ、関係性」、「2.家族成員を表現するコマの種類(人形、あるいは動物など)」、「3.作品を通じて得られた家族や本人についての気づき、課題」、という 3 つの観点から各作成者の作品を分析したところ、以下のことが示された。

1. 家族の箱庭のテーマ

両国とも、テーマについては主に「Ⅰ.家族の具体的な出来事の回想、家族の現状の再現」と「Ⅱ.心に描いたイメージ上の家族、ヴィジョン」の 2 種類の内容に分けられた。前者は、家族で出かけた海や高原、動物園などでの楽しい思い出、それに両親や兄弟との葛藤や競争心、嫉妬などをリアルに展開させるな

ど、家族の具体的な出来事を回想したり、日常の家族関係などを再現した家族イメージである。後者は家族成員のそれぞれが小人や動物のキャラクターに置き換えられて海底や深い森を探索したり、未来の家族、あるいは理想の家族が生き活きと描かれたりするイメージである。

そして、家族イメージの作品の制作を継続していくにつれ、メインカテゴリーⅠは前半と比べ後半はやや減少する傾向にあり、反対にメインカテゴリーⅡは後半でやや増加している傾向が見られた。つまり、作成者はテーマを「家族」に指定した一連の作品を作ることで、表面的なものから、少しずついまだ明確には概念化されておらず、言葉でうまく形容しがたいような家族に対する曖昧な認識やこれまで意識していなかったような家族への思い、さらには青年期に特有の特徴としてとらえることができる「家族からの‘自立⇔依存’の葛藤」のテーマなどを、多種多様なミニチュアを用いて形あるものとして集約的に表現することが可能になったととらえることができた。ときにはその混沌とした世界の表現が、作成者の内面を揺り動かしたり破壊的に働くこともありうるが、箱庭の枠はそうした危険性から作成者を守る一つの機能を果たしていると考えられる。

2. コマの使用

家族成員を表すコマに限定して検討してみると、人間(人形)のコマを用いている場合、動物に置き換えて表現している場合、人形と動物を混在させたり、家族成員を象徴するコマがまったく登場していない場合、の3種類がいずれの国においても見られた。家族イメージの作品のモチーフやテーマとの関連を見てみると、家族の過去の思い出や現状の再現がモチーフになっている場合、人形が用いられていることが多く、反対にイメージ上の家族を表現しようとするような場合は動物やキャラクターが用いられることが多かった。

つまり、家族の具体的な出来事の再現のような場合、例えば父親は大人の男性、母親は大人の女性といった既成の人形に同一化することにはそれほど違和感はないと思われる。ところが理想の家族やファンタジーを展開するような場合には個々の人形のもつ具体的な属性にイメージが規定されてしまう可能性があるため、動物や小人、お姫様、宇宙人といったように、その対象にさまざまなイメージの要素が織り込めるようなコマを使用することが多くなっていると考えられる。

このように家族イメージの作成者は、意識的にせよ無自覚のままであれ、家族成員のコマの使用を確定化するのではなく、自分が表現したいと思っている家族成員のキャラクターにぴったり合ったコマ、つまりそのときのテーマやモチーフを表現するのに適した家族成員のコマを選択し、うまく使い分けていると考えられる。したがって、選ばれた家族成員のコマは一つひとつが存在感や

重みをもって伝わってくるが、それを実現するための十分な受け皿、つまりコマの種類もできるだけ多く備えておくことが重要な条件と考えられる。

3. 作品作成に伴う気づき，課題の自覚

両国とも，作成者から得られた内省は主に「家族への思いやり，親の支えになる，家族とのコミュニケーション」といった作成者自身について語られたものと、「家族は離れていてもお互いのことを考えている，それぞれがもっと適切な距離を取れるようにならなければ」といった作成者の家族について語られたものに分けることができた。この気づきや課題の認識と作品のテーマとの関係を見てみると，イメージ上の家族や家族ヴィジョンがモチーフになっている場合では，自己についての気づきや課題を報告したものが多い。また，その程度に違いはあるものの，セッションの回数を重ねるにつれて，それぞれの作成者は自分の家族成員または自分自身についての理解が変わっていく傾向が認められた点は注目に値する。

これらのことから，作成者は一連の家族イメージの作品を完成していくうちに，現実の家族から離れ，イメージ上で思いを巡らせて，家族だけではなく家族における自分のあり方や自己の存在そのものについても吟味しようとする動きが芽生え，直面すべき心理的課題にも自然と意識を向けられるようになる，といった可能性がある。したがってこの「家族イメージ配置法」を心理臨床に適応しようとする場合も，セラピストの効果的な応答の技法や姿勢がクライアントの気づきや洞察を深め，治療的展開を促すための重要な要因になりうることが考えられる。

まとめと今後の課題

このように，本論文では日本と中国の青年を対象に彼らが抱く家族イメージの諸相について，いくつかの質問紙を用いた数量的研究や「家族イメージシステム法」という投映法，それに箱庭を導入した事例的研究(家族イメージ配置法)を含め，これら一連の研究を総括することにより，本研究の特徴やいくつかの問題点，それに今後の課題なども浮き彫りになってきた。

青年にはその発達段階の特徴から，アイデンティティの確立とそれに伴う両親からの自立が，これから乗り越えるべき大きな課題として立ちはだかっている。その際に，この親からの分離独立欲求一つとってみても，青年にとってそれはそれほど単純なものではない。青年にはすでにその初期の段階から‘親からの分離欲求’は芽生えているのであるが，それを半ば未解決のままに引き伸ばしていることがほとんどで，その間，自立と依存の狭間で心は揺れ動き，ときには両親との間の激しい葛藤にも直面し，無気力になったり，自我の弱化や退行といった危機的な状況にさらされることもありうる。やがて青年期中期に

入ると、青年の多くは試行錯誤の末に両親との間に適度の距離感が維持できるような方策を模索し始める。結婚して新しい家庭を作ったりするのはその典型であろうが、そこまでいかななくても、一人暮らしやバイトを始めたり、仲間やサークル活動に没頭したりして、親や家族とは別の所に心理的な拠点づくり・居場所づくりを求めたりするなど、個々人によって千差万別である。場合によっては、自立への不安や葛藤を否認し、表面的には何もなかったかのようにやり過ごしていく青年も現代では少なくない。これらはすべてが、‘アイデンティティの確立’という青年に課せられた課題をそれぞれが乗り越えていくための試みととらえることができるが、この課題を効果的に実現していくためには、つねに家族というものの存在が密接にかかわり、重要な役割を担っているということは言うまでもない。

質問紙による調査研究 1 では、家族が健全で安らぎの場として機能するための 1 つの条件として、家族の適応性、凝集性に各家族成員の勢力がいかに関わっているかを検討した。調査研究 2 では、主に SD 法を用いて青年の家族に対する印象が、その家族の評価にいかなる影響を及ぼしているかを探求した。そして研究 3 は、今回新たに考案した「家族イメージシステム法」という投映法を導入した研究である。これは、青年の家族イメージを家族成員のコマを用いて円枠を中心に自由に配置し表現してもらおうとするものである。投映法は協力者には比較的自然而自由な反応を促すことができるという特性を備えているので、その反応内容からは質問紙では及ばなかった個人の内面にある他の家族成員に対する複雑な感情や欲求、それに家族で日常交わされている生きた関係性などの情報も得ることを可能にし、青年が心に描いている自らの家族を多面的、多層的に把握することができたと考える。

この研究 3 の実施過程から、新たな発想や示唆を得て考案したのが研究 4 の「家族イメージ配置法」である。基本的には箱庭のセットを応用的に導入し、単に家族アセスメント法としてだけではなく、心理臨床の治療技法の一つとしてセラピーへの効果的な適用を視野に置いて改善したものである。これを同一個人に 10 回連続して実施し、事例的なアプローチをしたのであるが、そのプロセスでは当初想定していた以上の示唆に富む内容が展開されていた。協力者は毎回‘私の家族’をテーマに各家族成員に見立てたコマを箱庭に配置し、家族イメージを表現していくことが求められるが、その過程では常に自らの家族を心にイメージし、それと直面せざるをえなくなる。箱庭の作成者は、そのときそのときに浮かんだイメージや感情、思考などを感受しながら箱庭に自分の家族を表現していく。このように約束事や形式にとらわれない自由な表現は、多かれ少なかれ本人の退行をうながし、普段はあまり解放されることのない不安や怒りや競争心といった情動の解放が促進され、カタルシスがもたらされる。

同時に、コマを箱庭に配置していくという具体的な動作を伴った行為は、かつてそれほど意識していなかった内的世界を外の世界と結びつけ、これを現実のものとして扱うことができるように手助けしてくれることになっている。

やがてそこに表現された家族イメージの作品は、これをじっくり眺め吟味する作成者との間で対話を始める。そこからは自分がこれまで家族に抱いていた複雑な感情や自分自身をも実感的に把握し、再構成できるようになるなど、数多くの意味ある体験が起きることが期待できる。このように箱庭という表現媒体を導入することで、刻一刻と変化していく家族のイメージを柔軟にとらえることができ、しかもそれを多面的、多次元的に表現していくことを容易にしていると考えられるので、今後さらなる改良を加えることで、この「家族イメージ配置法」が効果的な技法の一つとして臨床場面での活用の可能性が示唆されたと考えることができる。実際、この調査に参加した日本と中国の青年の作品では、10回の連続実施の過程のどこかで、様態こそ異なっても全員が必ず「家族からの分離独立」のテーマを取り上げている。しかも、あるセッションは現実の家族をそのまま反映した箱庭であっても、別のセッションでは理想の家族が作られたりして、同一個人が多次元的に自分の親や家族を体験し、そのイメージを着実に内在化させていることが推測できる。もちろん、今回はあくまでも研究の一環として実施されたものであり、セラピーではない。今後は実施法の細部にわたる改善やセラピストの具体的な対応なども含め、臨床への導入のための丹念な検証の積み重ねが必要になる。

この一連の研究では、日本と中国の青年を調査対象としている。その意図の一つには、近い将来、中国で家族関係を視野に置いたセラピーを展開する際、「家族イメージ配置法」といった技法を効果的に適用することの可能性が考えられるからである。ただ、家族の様態というものは、背景にあるその国の文化や社会制度、それに経済状況や生活状態、価値観などとも密接に結びついている。日本はともかく、中国では近年、社会状況はめまぐるしく変化し続けている。以前は、「一人っ子政策」が家族や子どもに劇的な影響をもたらすものとして、多くの研究が行なわれていた。しかし現在では、先進技術の発展に伴う高度成長とこれに取り残された地域との経済格差の拡大や子どもの高学歴化に伴う競争の激化と葛藤、それに民族の生活習慣の違いなども加わって、これらはすべてがそこで暮らす家族や青年に確実に強い影響を及ぼしていることは間違いない。しかもその実態は、地域によって相当の違いがあると同時に、日々刻々と変化していることもまた事実である。経済特区に指定され資金が潤沢に投入されている地域もあれば、依然として荒れた山間部で生計を立てている地域もある。そこでは生活習慣や風習もかなり異なる。本研究で調査対象とした中国の青年は遼寧省(日本では県に相当する)の首都瀋陽市(人口は約820万人)にある大

学(学生数 25000 人)の学生が中心である。ここは中国では経済的にもごく平均的な都会にある大学という理由で選んだが、中国の場合、平均的ということが必ずしもその国の家族や青年の現状を象徴的に表わすことになるとは限らない。今後はかなりの時間を費やすことになるが、家族についてそれぞれ特徴ある地域をできるだけ多く対象として地道な調査、研究を続けるとともに、それに添った治療的アプローチの開発も不可欠となるので、その取り込みも続けていきたい。

VII 謝辞

現代心理学研究科に入学して今日までの8年間、ずっと一貫して情熱ある丁寧な指導と暖かな励ましをして下さった神田久男先生(現:立教大学名誉教授)には心より感謝申し上げます。また、学位論文提出にあたって逸見敏郎教授には多方面でご尽力いただきお礼申し上げます。さらに、両国の協力者の皆様に深く感謝いたします。

VIII 引用文献

芦名定道(2003). 東アジアの宗教状況とキリスト教-家族という視点から-. アジア・キリスト教・多元性, **1**, pp.1-18.

Blos, P. (1985). *Son and Father: Before and Beyond the Oedipus Complex*, 1985. New York Norton. 息子と父親. 児玉憲典(訳)(1990). 誠信書房.

Carter, E. A., & McGoldrick, M. (1980). *The Family Life Cycle and Family Therapy, an Overview* in E.A. Carter and M. McGoldrick (eds). *The family life cycle: A framework for family therapy* New York : Gardner.

中国国家统计局. 历次人口普查公报.

<http://www.stats.gov.cn/tjsj/tjgb/rkpcgb/qgrkpcgb/>. (2013年11月25日アクセス可能).

Dekovic, M. Noom, M. J. & Meeus, W. (1997). Expectations regarding development during adolescence: Parental and adolescent perceptions. *Journal of Youth and Adolescence*. **26**, pp. 253-272

Dora . M. Kalff.(1972). *Sandplay: A Psychotherapeutic Approach to the Psyche*. Sigo Pr. 山中康裕(訳)(1999). *カルフ箱庭療法(新版)*. 誠信書房.

费立鹏・郑延平・邹定辉 (1999). 家庭亲密度和适应性量表中文版. 心理卫生评定量表手册 (增订版). 中国心理卫生杂志, pp.142-149.

French, J. R. P., Jr. & Raven, B. H. (1959). The basis of social power. In Cartwright, D. (ED) *Studies in social power*. Michigan: Institute for Social Research, 150-167.

藤原勝紀(2003). イメージを使いこなす. *臨床心理学*, **3**(2), pp.173-179.

Gehring, T. M. (1993). *Family System Test Manual*. German : Belts Test Gesellschaft. 八田武志(訳編) (1997). *FAST (Family System Test) マニュアル*. ユニオンプレス.

高天碩・木藤恒夫(2008). 中日大学生の独立意識と親子関係. *久留米大学心理学研究*, **7**, pp.19-28.

Green R, Kolevaon M. (1984). Characteristics of healthy families. *Elementary School Guidance and Counseling*, **4**, pp.6-14.

顧佩靈(2011). 中国と日本の大学生における悩みの自己開示と対人ストレスに関する比較研究. *心理臨床学研究*, **29**(3), pp.293-304.

Haley, J.(1967). *Problem Solving Therapy*. Jossey-Bass. Inc. 佐藤悦子

- (訳)(1985). 家族療法-問題解決の戦略と実際. 川島書店.
- 長谷川千紘(2010). 箱庭制作に伴う物語生成過程の検討. 京都大学大学院教育学研究科紀要, **56**, pp.125-137.
- 東山紘久(1994). 箱庭療法の世界. 誠信書房.
- 平石賢二(2006). 青年期の親子関係の特徴. 白井利明(編) よくわかる青年心理学V 家族と友人. ミネルヴァ書房, pp.76-77.
- 平松清志(2001). 箱庭療法のプロセス. 金剛出版.
- 平山聡子(2001). 中学生の精神的健康とその父親の家庭関与との関連 : 父母評定の一一致度からの検討, 発達心理学研究, **12(2)**, pp. 99-109.
- 仁里文美(2002). 砂箱. 岡田康伸(編)(2002). 箱庭療法の現代的意義. 至文堂, pp.62-73.
- Hollingworth, L. S. (1928). The psychology of the adolescent. D. Appleton-Century Company.
- 胡実(2009). 『家族』の構造と機能に関する中日比較. 立教大学大学院現代心理学研究科臨床心理学専攻博士課程前期課 2009年度修士論文. 未公開.
- 胡実(2013). 家族イメージの構造と特性に関する日中比較. 家族心理学研究, **27(2)**, pp.111-122.
- 胡実(2015). 青年期の家族に対する認識と体験プロセスに関する検討 一 家族イメージ配置法の臨床への適用の試み一. 家族心理学研究, **28(2)**, pp.136-149.
- 池田和夫(1996). 日本人大学生における家族構造認知の特徴-Family System Testによる国際比較-. 高知大学人文学部人文学科人文学科研究, **4**, pp.11-20.
- 井芹聖文(2013). 作り手が箱庭を命名する体験の検討. 心理臨床学研究, **31(3)**, pp.466-476.
- 石原宏(2001). 箱庭制作の制作者の体験理解の試み. 日本箱庭療法学会第十五回大会発表論文集, pp.17-18.
- 石原宏(2002). 箱庭制作の主観的体験に関する研究. 岡田康伸(編)(2002). 箱庭療法の本質と周辺. 至文堂, pp.57-69.
- 板倉憲政(2012). 家族内の勢力関係と親に対しての青年の攻撃性との関連. 家族心理学研究, **26(2)**, pp.129-144.
- 板倉憲政・長谷川啓三(2012). 青年期の親子関係と父母関係の関連性に関する基礎研究. 対人社会心理学研究, **12**, pp.85-91.
- 伊藤真理子(2005). イメージと意識の関係性からみた箱庭制作過程. 箱庭療法学

- 研究, 17(2), pp.51-64.
- 伊藤美奈子(2006). 思春期・青年期の意味. 海保博之(監修). 朝倉心理学講座 16
伊藤美奈子(編). 思春期・青年期臨床心理学. 朝倉書店, pp.1-12.
- 岩井紀子・保田時男(2009). データで見る東アジアの家族観-東アジア社会調査
による日韓中台の比較-. ナカニシヤ出版, pp.156-178.
- Jung, C. G. (1923) Psychological Types. Important Books. 林 道義(翻訳).
タイプ論. みすず書房.
- 角田豊・沈勇強(2002). 日中の大学生を対象とした箱庭体験の比較. 岡田康伸
(編)(2002). 「箱庭療法の本質と周辺」. 至文堂, pp.212-222.
- 亀口憲治(2003). FIT(家族イメージ法)マニュアル. システムパブリカ.
- 神田久男(2007). イメージとアート表現による自己探求. ブレーン出版.
- 笠原嘉(1976). 今日の青年期病理像. 笠原嘉・清水将之・伊藤克彦(編). 青年の
精神病理第1巻. 弘文堂, pp.3-28.
- 片畑真由美(2005). 臨床イメージにおける内的体験についての考察-箱庭制作体
験における「身体感覚」の観点から-. 京都大学大学院教育学研究科紀, 52,
pp.240-252.
- 加藤隆勝(1997). 「青年」の由来と青年期の位置づけ. 加藤隆勝・高木秀明(編).
青年心理学概論. 誠信書房, pp.1-13.
- 河合隼雄(1967). イメージの心理学. 青土社.
- 河合隼雄(1969). 箱庭療法入門. 誠信書房.
- 河合隼雄(1971). イメージの意味と解釈. 成瀬悟策(編). 催眠シンポジウムⅡ イ
メージ. 誠信書房, pp.203-217.
- 河合隼雄(1991). イメージの心理学. 青土社.
- 河合隼雄(2002). 座談会箱庭療法とイメージ-箱庭の輪郭と本質-. 岡田康伸(編).
箱庭療法シリーズⅡ 箱庭療法の本質と周辺. 現代のエスプリ別冊. 至文堂,
pp.171-181.
- 河合隼雄(2010). 心理療法入門. 河合俊雄 (編). 「心理療法」コレクション 6
岩波現代文庫.
- 小島弓枝(2011). 青年期における家族関係の認知と抑うつ感の関連 : 家族関係
単純図式投影法を用いた研究. 北星学園大学大学院論集 , 2, pp.95-105.
- 河野望(2005). Family System Test による家族関係の認知に関する発達的研究-
小学生・中学生・大学生の比較から-. 人間発達研究所紀要, 17, pp.34-53.

- 草田寿子・山田裕紀子(1998). 家族関係単純図式投映法の基礎的研究IV-家族図式に表現された高校生の家族パターンと家族コミュニケーションとの関連-. カウンセリング研究, **31**(1), pp.10-18.
- 李春英・杨春(2014). 箱庭療法在我国大学生心理健康教育中的应用. 教育探索, **3**, pp.140-141.
- 李科生・朱强・陈京军・曾惠萍(2011). 一例适应性障碍女大学生沙盘治疗过程及其效果. 中国临床心理学杂志, **19**(3), pp.401-407.
- 林雅芳・张日昇・王雪婷・金文亨(2011). 箱庭疗法治疗中度抑郁大学生的过程和效果. 中国临床心理学杂志, **19**(3), pp.404-409.
- 劉柏林(2004). 中日の親族呼称について. 言語と文化, **11** (38), pp.35-50.
- 罗艳红・蔡太生(2012). 沙盘游戏治疗在我国临床中的应用. 医学与哲学第 **33** 卷第 **1B** 期总第 **445** 期, pp.48-49.
- 麻喜総一郎(2010). 家族イメージと青年期における不適応傾向との関係について-形容詞評定尺度の構成をとおして-. 家族心理学研究, **24**(1), pp.16-29.
- 三木アヤ・光元和憲・田中千穂子(1991). 体験箱庭療法-箱庭療法の基礎と実際-. 山王出版.
- 厚生労働省. 平成 25 年国民生活基礎調査の概況. 世帯数と世帯人員数の状況. <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa13/index.html>. (2013 年 11 月 4 日アクセス可能).
- Minuchin. S.(1974). Family and family Therapy. Cambridge, MA: Harvard University Press. 山根常男(監訳)(1984). 家族と家族療法. 誠信書店.
- 水島恵一(1981). 心理測定, 診断, 治療を兼ねた図式的投映法. 相談学研究, **31**(1), pp.1-9.
- 水島恵一(2003). イメージについて. 水島恵一(編). イメージ心理学研究 I 誠信書房, pp.6-13.
- 水島恵一(1981). 心理測定, 診断, 治療を兼ねた図式的投映法. 相談学研究, **31**(1), pp.1-9.
- 茂木千明(1997). 家族関係単純図式投映法による健康な家族関係-予備的研究-. 仙台白百合女子大学紀要, **1**, pp.135-143.
- 茂木千明(2001). 健康な家族機能に対する評価--セラピストと家族の比較. 家族心理学研究, **15**(2), pp.109-123.
- 茂木千明(2003). 家族図式による現実と理想の家族関係の比較: 家族関係単純

- 図式投影法を用いた体験学習から. 仙台白百合女子大学紀要, **7**, pp.29-43.
- 長尾博 (1991). ケース青年心理学. 有斐閣.
- 中道泰子(2010). 箱庭療法の心層: 内的交流に迫る. 創元社, pp.8-14.
- 中見仁美・桂田恵美子(2007). 大学生における Family System Test (FAST) の評価基準の検討-面接の応答,精神的健康度の関連から-. 家族心理学研究, **21(1)**, pp.20-30.
- 中見仁美・桂田恵美子(2008). 大学生における父親の認知と家族機能との関 家
族心理学研究. **22(1)**, pp.42-51.
- 中見仁美・桂田恵美子(2010). 三世代家族の Family System Test(FAST)の評価
基準の検討. 家族心理学研究, **24(1)**, pp.42-50.
- 中坪太一郎・新谷侑希・坂口健太・塩見亜沙香・亀口憲治(2006). 家族イメー
ジ法(FIT)を用いた質的研究法の開発. 東京大学大学院教育学研究科紀要, **46**,
pp.227-238.
- 西平直喜(1990). 成人になること-生育史心理学から-. 東京大学出版会.
- 野口修司(2009). 青年期の子ども視点における家族構造と社会的勢力に関する研
究. 家族心理学研究, **23(2)**, pp.91-109.
- 野口修司・狐塚貴博・宇佐美貴章・若島孔文(2009). 家族構造測定尺度
-ICHIGEKI-の作成と妥当性の検討. 東北大学大学院教育学研究科研究年報,
58(1), pp.247-265.
- 野口修司・若島孔文(2007). 青年期の親子関係における社会的勢力とコミュニケ
ーションに関する研究. 家族心理学研究, **21(2)**, pp.95-105.
- 尾形和男・宮下一博(2002). 父親の協力的関わりと子どもの共感性および父親の
自我同一性-家族機能も含めた検討-. 家族心理学研究, **14(1)**, pp.15-27.
- 小倉洋子(2010). 家族イメージの測定-日韓の学生の比較研究-. 家族心理学研究,
4(1), pp.1-11.
- 岡田康伸(1984). 箱庭療法の基礎. 誠信書房.
- 岡堂哲雄(1991). 家族心理学講義. 金子書房.
- Olson, D.H., McCabbin, H.I., Larsen, A., Muxen, M., & Wilson, M. (1985).
Family Inventories. St. Paul, MN: Family Social Science, University of
Minnesota.
- 大前玲子(2007). 箱庭療法における認知-物語アプローチの導入. 心理臨床学研
究, **25(3)**, pp.336-345.

- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析. 教育心理学研究, **44**, pp.11-22.
- 相模健人(1997). 青年期における現在および未来の家族のイメージに関する研究-動的家族画,家族イメージおよびSD法をつかって-. 家族心理学研究, **11**(1), pp.27-41.
- 草田寿子(1995). 家庭関係単純図式投影法の基礎的研究-家庭関係査定法としての可能性- カウンセリング研究, **28**(1), pp.21-27.
- 草田寿子(1995). 日本語版 FACES3 の信頼性と妥当性の検討. カウンセリング研究, **28**(2), pp.154-162.
- 草田寿子・岡堂哲雄(1993). 家族関係査定法. 岡堂哲雄(編). 増補新版心理検査学-臨床心理学査定の基本-. 垣内出版, pp.573-581.
- 草田寿子・山田裕紀子(1998). 家族関係単純図式投映法の基礎的研究-家族図式に表現された高校生の家族パターンと家族コミュニケーションとの関連-. カウンセリング研究, **31**(1), pp.10-18.
- Shek DTL. (1999), Individual and dyadic predictors family functioning in a Chinese context
- 申荷永(2004). 沙盘游戏：理论与实践. 广东高等教育出版, pp.118-128.
- Shu, S. & Smith, P.K. (2001). Characteristics of three-generation Chinese families. In: T.M. Gehring, M. Debray & P.K. Smith (eds.), The Family System Test (FAST): Theory and application. Hove: Routledge, pp.194-207.
- 白井利明(2006). 青年期はいつか. 白井利明 (編). よくわかる青年心理学 I 青年期と青年心理学. ミネルヴァ書房, pp.4-5.
- 譚健烽・申荷永・李鶴展(2010). 心理症状阳性者の初始沙盘特征研究. 中国臨床心理学杂志, **18**(4), pp.472-478.
- 鉄嶋清毅(1993). 大学生のアパシー傾向に関する研究-関連する諸要因の検討-. 教育心理学研究, **41**, pp.200-208.
- 徳田仁子・柴田美文(2005). 家族関係の再構築における居住形態の意義について-家族イメージ法と肯定的家族観尺度を用いて(及川英子教授 奥平洋子教授 中川文夫教授 退職記念号)-. 札幌学院大学人文学会紀要, **78**, pp.51-65.
- 築地典絵(2007). シンボル配置技法による家族関係認知の研究-Doll Location Test と Family System Test-. 風間書房, pp.10-24.

- 和田竜太(2007). 箱庭制作過程における体験をめぐって-身体感覚やイメージの広がりをつめる試み-. 岡田康伸・皆藤章・田中康裕(編)(2007). 箱庭療法の事例と展開. 創元社, pp.62-69.
- 王树青・陈会昌・石 猛(2008). 青少年自我同一性状态的发展及其与父母教养权威性・同一性风格的关系. 心理发展与教育, **2**, 64-72.
- 渡辺颯一郎(1989). 家族危機とその対応資源の評価方法. 関西学院大学社会学部紀要 (60). pp.63-72.
- 徐洁・张日昇(2007). 箱庭疗法应用于家庭治疗的理论背景与临床实践. 心理科学, **30**(1), pp.151-154.
- 徐洁・张日昇(2011). 箱庭疗法应用于儿童哀伤咨询的临床实践和理论. 中国临床心理学杂志, **19**(3), pp.419-425.
- 山口素子(2001). 心理療法における自分の物語の発見について. 河合隼雄(編). 講座心理療法第2集. 心理療法と物語. 誠信書房, pp.171-181.
- 横尾摂子・亀口憲治(1995). 家族システムの治療的变化に及ぼす粘土造形法の効果. 福岡教育大学紀要, **4** (44), pp.285-293.
- 张日昇(1998). 箱庭療法. 心理科学, **21**, pp.544-546.
- 张日昇(2002). 中国における箱庭療法の現状と箱庭療法導入の試み. 岡田康伸(編)(2002). 箱庭療法の本質と周辺. 至文堂, pp.223-232.
- 张雯・刘亚茵・张日昇(2010). 团体箱庭疗法对人际交往不良大学生的治疗过程与效果研究. 中国临床心理学杂志, **18**(2), pp.264-269.
- 张雯・张日昇(2012). 箱庭疗法对强迫症状大学生的治疗过程及有效性. 中国临床心理学杂志, **20**(1), pp.111-118.
- 訾非(2010). 沙盘作为媒介的感受分析治疗 :以权威畏惧感的心理干预为例中国临床心理学杂志, **18**(5), pp. 680-689.

IX 附録

研究 1 青年が認知した家族成員の勢力が家族認識に及ぼす影響について

本調査は大学生が家族についてどう考えているか調べる意図で行うものです。記入上の注意をよく読んでお答えいただければ幸いです。

なお、この調査は研究目的以外には一切使用せず、個人情報の管理・保護は徹底いたします。個人の回答を取り上げたり公表したりすることは一切ございません。ご理解とご協力のほど、よろしく願いいたします。

ご年齢： 歳

ご学年： 年

ご性別： 男・女

立教大学大学院 現代心理学研究科 臨床心理学専攻博士課程
胡 実 (コウ ジツ) (10WX001A@rikkyo.ac.jp)

一. あなたの家族の現在の様子についてお尋ねします。次の項目について、もっともよくあてはまると思うところに、○をつけてください。

1=まったくない 2=たまにある 3=ときどきある 4=よくある 5=いつもある

い よ と た ま
つ く き ま っ
も あ ど に た
あ る き あ く
る あ る な
 る い

1. 私の家族は困った時、家族の誰かに助けを求める。..... 5—4—3—2—1
2. 私の家族では、問題の解決には子供の意見も聴いている。..... 5—4—3—2—1
3. 家族は、それぞれの友人を気に入っている。..... 5—4—3—2—1
4. 私の家族は、子供の言い分も聞いてしつけをしている。..... 5—4—3—2—1
5. 私の家族は、みんなで何かをするのが好きである。..... 5—4—3—2—1
6. 家族を引っ張っていくもの(リーダー)は、状況に応じて変わる。..... 5—4—3—2—1
7. 家族のほうが、他人によりもお互いに親しみを感している。..... 5—4—3—2—1
8. 私の家族では、問題の性質に応じて、その取り組み方を
変えている。..... 5—4—3—2—1
9. 私の家族では、自由な時間は、家族と一緒に過ごしている。..... 5—4—3—2—1
10. 私の家族は、叱り方について親と子供で話し合う。..... 5—4—3—2—1
11. 私の家族は、お互いに密着している。..... 5—4—3—2—1
12. 私の家族では、子供が自主的に物事を決めている。..... 5—4—3—2—1
13. 家族で何かをするときは、みんなでやる。..... 5—4—3—2—1
14. 家族の決まりは、必要に応じて変わる。..... 5—4—3—2—1
15. 私の家族は、みんなで一緒にしたいことがすぐに思いつく。..... 5—4—3—2—1

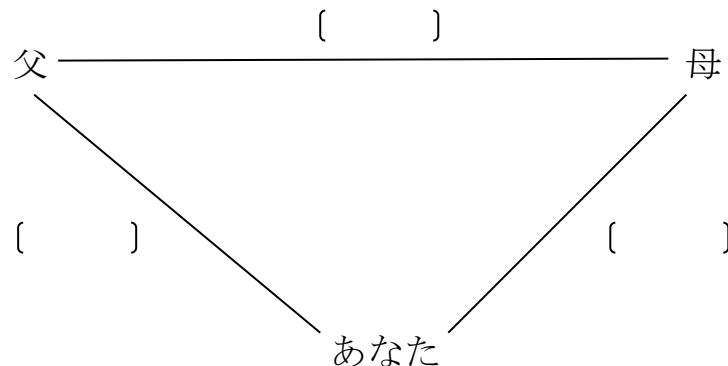
い よ と た ま
 つ く き ま っ
 も あ ど に た
 あ る き あ く
 る あ る な
 る い

16. 私の家族では、家事・用事は、必要に応じて交代する。..... 5—4—3—2—1
17. 私の家族では、何かを決める時、家族の誰かに相談する。..... 5—4—3—2—1
18. 私の家族では、皆を引っ張っていくもの(リーダー)が
 決まっている。..... 5—4—3—2—1
19. 家族がまとまっていることはとても大切である。..... 5—4—3—2—1
20. 私の家族では、誰がどの家事・用事をするか決まっている。..... 5—4—3—2—1

二. あなたの家族の様子と「父・母・あなた」の関係についてお尋ねします。次の質問について、もっともよくあてはまる数値を書いてください。

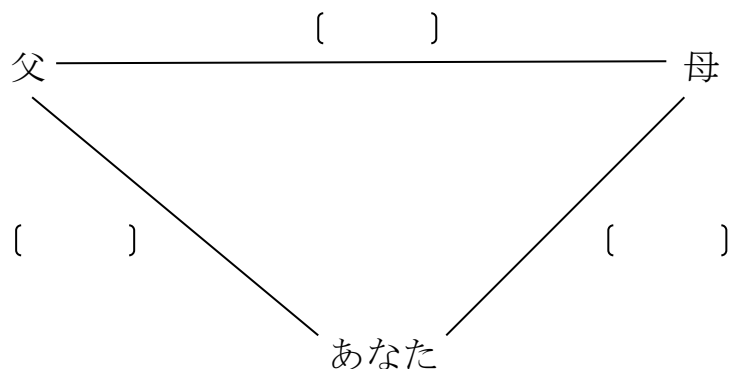
1. 下記の図は「父・母・あなた」の三者関係を示しています。ここでの二者間(父—母、父—あなた、母—あなた)はそれぞれの関係における「結びつき(お互いの仲のよさや親密さ、連帯感)」を表しています。

あなたから見て「お互いの結びつきが非常に弱い」を1として「お互いの結びつきが非常に強い」を10とすると、二者におけるそれぞれの「結びつき」が1~10のどれに当てはまるか()の中に記入してください。



2. 下記の図は「父・母・あなた」の三者関係を示しています。ここでの二者間(父-母、父-あなた、母-あなた)はそれぞれの関係における「葛藤(お互いの感情を傷つけあう、口論で不快な気持ちになる、といった相手との衝突)」を表しています。

あなたから見て「お互いの葛藤が非常に弱い、あるいは非常に少ない」を1として「お互いの葛藤が非常に強い、あるいは非常に多い」を10とすると、二者におけるそれぞれの「葛藤」が1~10のどれに当てはまるか()の中に記入してください。



3. 下記の()は「父・母・あなた」それぞれの「勢力(決定力や影響力、発言力)」を表しています。

あなたから見てそれぞれの人が家族の中に「勢力が非常に弱い」を1として「勢力が非常に強い」を10とすると、それぞれの「勢力」が1~10のどれに当てはまるか()の中に記入してください。

父	母	あなた
[]	[]	[]

4. あなたの家族における「ルール(私の家族にははっきりとした決まりがある、決められた規則が多い)」に関して「家族内におけるルールが非常に弱い、あるいは非常に少ない」を1として、「家族内におけるルールが非常に強い、あるいは非常に多い」を10とすると、1~10のどれに当てはまるかを()の中に記入してください。

[]

.....質問紙は以上です。ご協力ありがとうございました！

问 卷

您的年龄：_____ 岁

您的性别：_____

您的年级：_____

一 这里共有 20 个关于家庭关系和活动的问题。这里所指的家庭是指与您共同食宿的小家庭。请您按照您家庭目前的实际情况来回答，回答时请在右侧 5 个不同答案中选一个您认为恰当的答案，并在所选的答案上打圈。5 种答案分别是：1=非常不符合 2=比较不符合 3=不确定不符合 4=比较符合 5=非常符合

			不		
			确		
			定	比	非
	非	比	符	较	常
	常	较	不	不	不
	符	符	符	符	符
	合	合	合	合	合

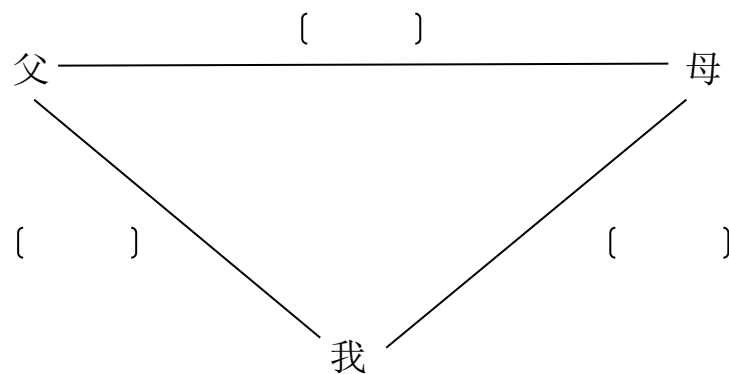
1. 我们家的成员在遇到困难的时候会向其他成员寻求帮助。 5 — 4 — 3 — 2 — 1.
2. 在我们家解决问题时也会听取孩子的意见。..... 5 — 4 — 3 — 2 — 1.
3. 家里人都熟悉每个家庭成员的朋友..... 5 — 4 — 3 — 2 — 1.
4. 在我们家，教育孩子时也会听取孩子的主张。..... 5 — 4 — 3 — 2 — 1.
5. 在我们家，干什么事时喜欢大家一起干。..... 5 — 4 — 3 — 2 — 1.
6. 领导我们家的领导者是根据状况的不同而变化。..... 5 — 4 — 3 — 2 — 1.
7. 与他人相比，家庭成员之间感到更为亲密。..... 5 — 4 — 3 — 2 — 1.
8. 在我们家，解决问题的方法根据问题的性质而变化。..... 5 — 4 — 3 — 2 — 1.
9. 在我们家，家庭成员喜欢在一起度过业余时间。..... 5 — 4 — 3 — 2 — 1.

10. 在我们家，家长与孩子讨论批评的方法。..... 5 — 4 — 3 — 2 — 1.
11. 家庭成员之间的关系是非常亲密的。..... 5 — 4 — 3 — 2 — 1.
12. 在我们家，孩子的事情由孩子自己做主。..... 5 — 4 — 3 — 2 — 1.
13. 在家里，有事大家一起做。..... 5 — 4 — 3 — 2 — 1.
14. 家里的规矩随需要而变化。..... 5 — 4 — 3 — 2 — 1.
15. 在我们家，很快就能找到大家想在一起做的事。..... 5 — 4 — 3 — 2 — 1.
16. 在我们家，根据需要大家轮流做家务活。..... 5 — 4 — 3 — 2 — 1.
17. 在我们家，家庭成员作决策时喜欢与家人一起商量。..... 5 — 4 — 3 — 2 — 1.
18. 在我们家，领导全家的领导者是固定不变的。..... 5 — 4 — 3 — 2 — 1.
19. 家里人团结在一起是一件很重要的事。..... 5 — 4 — 3 — 2 — 1.
20. 在我们家，谁做什么家务活是规定好了的。..... 5 — 4 — 3 — 2 — 1.

二 此问题是关于您的家族情况和“父，母，我”的关系的。请您在下面括号里填上您觉得最为符合的数值。

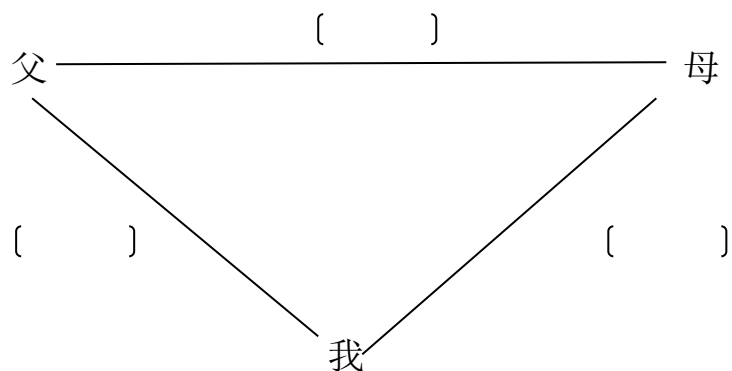
1 下图表示“父、母、我”间的关系。请评价在父——母，父——我，母——我的这样两者关系中的“牵绊”（“牵绊”指的是相互间关系的良好程度、亲密程度及连带感）。

如果以“相互间的牵绊非常弱”为 1，“相互间的牵绊非常强”为 10 的话，请用 1~10 这 10 个等级来评价父——母，父——我，母——我这样两者关系中的“牵绊”，在下面括号里填上您觉得最为符合的数值。



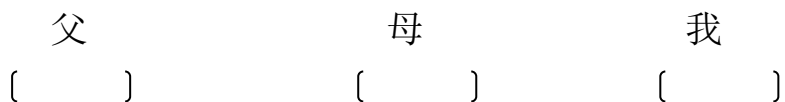
2 下图表示“父、母、我”间的关系。请评价在父——母，父——我，母——我的这样两者关系中的“纠葛”（“纠葛”指的是两人间冲突。例如，发生争吵）。

如果以“纠葛非常弱，或极少发生”为 1，“纠葛非常强，或经常发生”为 10 的话，请用 1~10 这 10 个等级来评价父——母，父——我，母——我的这样两者关系中的“纠葛”，在下面括号里填上您觉得最为符合的数值。



3 下面的()“父、母、我”的“势力”（“势力”指的是影响力、发言权、决定权）。

如果以“势力非常弱”为 1，“势力非常强”为 10 的话，请用 1~10 这 10 个等级来评价“父、母、我”的“实力”，在下面括号里填上您觉得最为符合的数值。



4 请评价您家里的“规矩”（“规矩”指的是在家里明确规定下来的规则或惯例）。

如果以“规矩非常弱，或非常少”为 1，“规矩非常强，或非常多”为 10 的话，请用 1~10 这 10 个等级来评价您家里的“规矩”，在下面括号里填上您觉得最为符合的数值。

[]

研究 2 心理的環境としての家族に対する認識について

本調査は大学生が家族についてどう考えているか調べる意図で行うものです。記入上の注意をよく読んでお答えいただければ幸いです。

なお、この調査は研究目的以外には一切使用せず、個人情報の管理・保護は徹底いたします。個人の回答を取り上げたり公表したりすることは一切ございません。ご理解とご協力のほど、よろしく願いいたします。

ご年齢： 歳

ご学年： 年

ご性別： 男・女

立教大学大学院 現代心理学研究科 臨床心理学専攻博士課程
胡 実 (コウ ジツ) (10WX001A@rikkyo.ac.jp)

一. あなたはあなたの家族に対して、どのような印象を抱いていますか。あてはまると思うところに、○をつけてください。

- 1 = 全くそう思わない
- 2 = あまりそう思わない
- 3 = どちらともいえない
- 4 = かなりそう思う
- 5 = とてもそう思う

	とても そう 思う	かなり そう 思う	どちら とも い え ない	あ ま り そ う 思 わ ない	全 く そ う 思 わ ない
--	-----------------	-----------------	---------------------------	---------------------------------------	----------------------------------

私の家族は

- | | | | | | | | | | | |
|-----|-------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1. | 活動的..... | 5 | — | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 2. | 落ち着いた..... | 5 | — | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 3. | 開放的..... | 5 | — | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 4. | 楽観的..... | 5 | — | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 5. | 大らかである..... | 5 | — | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 6. | 充実している..... | 5 | — | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 7. | 安定している..... | 5 | — | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 8. | 幸福感がある..... | 5 | — | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 9. | 独立的..... | 5 | — | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 10. | 頼もしい..... | 5 | — | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 11. | 積極的..... | 5 | — | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 12. | おもしろい..... | 5 | — | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |
| 13. | 前向きである..... | 5 | — | 4 | — | 3 | — | 2 | — | 1 |

	とても そう 思う	かなり そう 思う	どちら とも いえ ない	あまり そう 思 わ ない	全 く そ う 思 わ ない
14. 魅力がある	5	4	3	2	1
15. 親しい	5	4	3	2	1
16. 健康である	5	4	3	2	1
17. 一貫性がある	5	4	3	2	1
18. 意味を感じる	5	4	3	2	1
19. 寛大である	5	4	3	2	1
20. まとまりがある	5	4	3	2	1
21. 意欲的	5	4	3	2	1
22. 柔軟性がある	5	4	3	2	1
23. 変化に富んでいる	5	4	3	2	1
24. 満足している	5	4	3	2	1
25. 自由である	5	4	3	2	1
26. 能動的	5	4	3	2	1

二 あなたの家族の現在の様子についておたずねします。あてはまると思うところに、○をつけてください。

	当	は	ま	ら	な	い
	当	は	ま	ら	な	い
	て	ま	ら	な	い	
	ま	ら	な	い		
	ら	な	い			
	な	い				
	い					
1. 家族全員、いつも互いに支え合い支持を与えている	2	1				
2. 家族のメンバーはいつも自分の感情を抑えて、本音は言わない	2	1				
3. 家族はいつも喧嘩ばかりしている	2	1				
4. 家に居る時、単独行動はめったにしない	2	1				
5. 家族全員はいつもどんなことがあっても皆力を尽くして頑張る	2	1				
6. 我が家はよく政治と社会問題について議論する	2	1				
7. 家族全員は殆どの週末と夜は社交的な外出をしないで、家で過ごす	2	1				
8. どんなことがあっても、子供はまず親の要求を満足させなければならないと思う	2	1				
9. 家の大事な行事はいつも入念に計画する	2	1				
10. 家族成員が家族のルールを守るように強制されることはあまりない	2	1				
11. 家で過ごす時は面白く感じる	2	1				
12. 家に居る時に言いたいことがあれば何でも言える	2	1				
13. 家族全員は互いに怒りは表現しない	2	1				
14. 我が家では個人が自立心を持てるように努める	2	1				
15. 明るい将来の為、家族全員が力を尽くす	2	1				
16. あまり外の講座を聞いたり、映画を見に行ったり、博物館の展示会を見に行ったりはしない	2	1				
17. 我が家では時々友人の家へ尋ねて一緒に食事する	2	1				
18. 我が家では何かをするとき、社会的習慣に従うべきだと思っている	2	1				
19. 我が家では家中をいつもきちんと片付けている	2	1				
20. 我が家では家族で決めた生活リズムや家庭内のルールはあまりない	2	1				
21. 我が家では皆喜んで家事をする	2	1				
22. 我が家で悩みを打ちあけることは嫌われている	2	1				
23. 我が家では怒ったとき物を投げたりする人がいる	2	1				
24. 家の人は皆それぞれ自分なりに物事を考える	2	1				
25. 生活レベルをアップすることが何より大事だと家族全員が思っている	2	1				
26. 新しい知識を身に付けることが何より大事だと家族全員が思っている	2	1				
27. 我が家ではスポーツクラブなどに参加している人がいない	2	1				
28. 家族全員はよく近所の年寄りや体の不自由の人の面倒を見ている	2	1				
29. 我が家では使いたい物が見つからないことが時々ある	2	1				
30. 我が家では食事時間と就寝時間がいつも変わらない	2	1				
31. 我が家ではいつも和やかな雰囲気が漂う	2	1				
32. 我が家では誰でも自分の悩みや困ったことを気軽に打ち明ける	2	1				
33. 我が家では皆があまり怒ったりしない	2	1				

34.	我が家では誰も気楽に外出する	2	1
35.	どんな状況においても競争し合うことは良いことだと皆が意識している	2	1
36.	我が家では文化的活動に関心があまりない	2	1
37.	我が家ではよく映画を見に行ったり、スポーツ試合を観戦したり、旅行したりする	2	1
38.	我が家では人に心づけすることなどは一つの行為として認めている	2	1
39.	我が家では約束した時間を守ることは大事だと思っている	2	1
40.	家でほとんどのことも決められたルールで行動する	2	1
41.	我が家では問題が起きた時自分から対処しようとする人は少ない	2	1
42.	我が家では皆互いに自分の感情を自由に表す	2	1
43.	我が家ではよくお互いに責めたり批判したりする	2	1
44.	我が家では皆自己中心的で他人の意見を参考にしたり考慮したりしない	2	1
45.	我が家では物事をうまく進めるために自己反省を重視している	2	1
46.	我が家では科学についてはあまり議論したり検討したりしない	2	1
47.	家の人は皆いくつかの趣味を持っている	2	1
48.	我が家では子供は親の説教をうけられなくてはならないと思っている	2	1
49.	我が家ではよく計画やプランを変更する	2	1
50.	我が家ではルールや決めた生活リズムはきちんと守るよう言われる	2	1
51.	我が家は皆支えあっている	2	1
52.	我が家では家のことに文句を言ったらすぐ不愉快になったりする	2	1
53.	我が家はたまに喧嘩する	2	1
54.	困ったことがあったら家族の助けを頼りにする	2	1
55.	我が家は昇進することや成績のことをあまり気にしない	2	1
56.	家族に楽器を趣味にしている人がいる	2	1
57.	我が家では仕事や学校以外には娯楽活動をあまりしない	2	1
58.	我が家では皆自ら生活環境や公衆衛生に気をつけている	2	1
59.	家族全員は自分の部屋をきちんと整理する	2	1
60.	我が家ではおまの成員に相談しなくても、夜間外出は自由にできる	2	1
61.	我が家には家族という概念はあまりない	2	1
62.	家計について家族皆で気軽に話し合える	2	1
63.	家族内に意見が一致しないときに、直接ぶつからないように皆はおだやかに話し合う	2	1
64.	我が家は自分の問題は自分で解決するように言われる	2	1
65.	我が家はいろいろな面で成果を挙げることに関心があまり	2	1
66.	家族はよく図書館に行く	2	1
67.	我が家では自分たちの趣味や好きなことについていろいろ調べたりする	2	1
68.	道徳に従って物事をしなければならぬと皆が思っている	2	1
69.	家の中では誰が何をすべきか役割ははっきり分けている	2	1
70.	我が家では厳しいルールがない	2	1
71.	我が家ではみないつも仲よくしている	2	1
72.	我が家ではお互いに傷つけないように気をつけて話し合う	2	1
73.	我が家では家族成員の間に、相手を打ち負かしたいという気持ちがある	2	1
74.	家族成員が自分勝手に行動することで他の家族を傷つけてしまうことがある	2	1
75.	家族は苦労した後の幸せは本当の幸せだと思っている	2	1
76.	我が家では本を読むよりテレビを見る方が大事だと思っている	2	1
77.	我が家では暇な時に家庭外の社交によく参加する	2	1
78.	どんな事があっても、離婚は道徳なことではないと家族は思っている	2	1
79.	我が家は金を計画的に使っていない	2	1
80.	我が家では生活リズムやルールは変えられないものだ	2	1

81. 我が家ではそれぞれの成員が家族からいつも十分な愛情をもらっている 2———1
82. 我が家では皆いつも自発的に、デリケートな問題について話し合う 2———1
83. 我が家では不一致があったとき議論することが時々ある 2———1
84. 我が家では自由に行動するように言われる 2———1
85. 我が家では誰が勉強ができるかなど良く比べる 2———1
86. 我が家では皆音楽や芸術、文学が好きだ 2———1
87. 我が家の娯楽の仕方は外出ことではなく、テレビを見たり、
ラジオを聴いたりすることである 2———1
88. 生活レベルをアップすることが道徳を守ることよりも大事だと家族は思っている 2———1
89. 我が家では食事した後、すぐ誰かが皿洗いしなければならない 2———1
90. 我が家では家のルールを守らないと強く叱られる 2———1

问 卷

您的年龄：_____ 岁

您的性别：_____

您的年级：_____

一 此问题用于了解您对您的家庭氛围的看法。请您仔细阅读，在以下 5 种程度中选择符合您自己的程度。请在您选择的程度上画○。5 种程度分别是：1=非常不符合 2=比较不符合 3=不确定符不符合 4=比较符合 5=非常符合

	非 常 符 合	比 较 符 合	符 合	不 符 合	比 较 符 合	非 常 符 合
1. 活动的.....	5	4	3	2	1	
2. 沉着冷静的.....	5	4	3	2	1	
3. 开放的.....	5	4	3	2	1	
4. 乐观的.....	5	4	3	2	1	
5. 大方的.....	5	4	3	2	1	
6. 丰富多彩的.....	5	4	3	2	1	
7. 安定的.....	5	4	3	2	1	
8. 感觉幸福.....	5	4	3	2	1	
9. 独立性强的.....	5	4	3	2	1	

	非 常 符 合	比 较 符 合	不 符 合	不 确 定	比 较 不 符 合	非 常 不 符 合
10. 值得信赖的.....	5	4	3	2	1	
11. 积极的.....	5	4	3	2	1	
12. 有趣的.....	5	4	3	2	1	
13. 想得开的.....	5	4	3	2	1	
14. 有魅力的.....	5	4	3	2	1	
15. 关系亲近的.....	5	4	3	2	1	
16. 健康的.....	5	4	3	2	1	
17. 有一贯性的.....	5	4	3	2	1	
18. 有意义的.....	5	4	3	2	1	
19. 宽宏大量的.....	5	4	3	2	1	
20. 井井有条的.....	5	4	3	2	1	
21. 有干劲的.....	5	4	3	2	1	
22. 柔软的.....	5	4	3	2	1	
23. 富于变化的.....	5	4	3	2	1	
24. 知足的.....	5	4	3	2	1	
25. 自由的.....	5	4	3	2	1	
26. 能动的.....	5	4	3	2	1	

二 该问卷用于了解您对您的家庭的看法。请您确定以下问题是否符合您家里的实际情况，如果您认为某一问题符合您家庭的实际情况请答“是”，如不符合或基本上不符合，请答“否”。如果难以判断是否符合，您应该按多数家庭成员的表现或者经常出现的情况作答。如果仍无法确定，就按自己的估计回答。请务必回答每一个问题。该问卷所说的“家庭”是指与您共同食宿的小家庭。在回答问卷时不要推测别人对您的家庭的看法，请一定按实际情况回答。

	是	否
1. 我们家庭成员都总是互相给予最大的帮助和支持。	2	1
2. 家庭成员总是把自己的感情藏在心里，不向其他家庭成员透露。	2	1
3. 家中经常吵架。	2	1
4. 在家中我们很少自己单独活动。	2	1
5. 家庭成员无论做什么事情都是尽力而为的。	2	1
6. 我们家经常谈论政治和社会问题。	2	1
7. 大多数周末和晚上家庭成员都是在家中度过，而不外出参加社交和娱乐活动。	2	1
8. 我们都认为不管有多大困难，子女应该首先满足老人的各种需求。	2	1
9. 家中较大的活动都是经过仔细安排的。	2	1
10. 家里人很少强求其他家庭成员遵守家规。	2	1
11. 在家里我们感到很无聊。	2	1
12. 在家里我们想说什么就可以说什么。	2	1
13. 家庭成员彼此之间很少公开发怒。	2	1
14. 我们都非常鼓励家里人具有独立精神。	2	1
15. 为了有好的前途，家庭成员都花了几乎所有的精力。	2	1
16. 我们很少外出听讲座、看电影或去博物馆以及看展览。	2	1
17. 家庭成员常外出到朋友家去玩并在一起吃饭。	2	1
18. 家庭成员都认为做事应顺应社会风气。	2	1
19. 一般来说，我们大家都注意把家收拾得井井有条。	2	1
20. 家中很少有固定的生活规律和家规。	2	1
21. 家庭成员愿意花很大的精力做家里的事。	2	1
22. 在家中诉苦很容易使家人厌烦。	2	1
23. 有时家庭成员发怒时摔东西。	2	1
24. 家庭成员都独立思考问题。	2	1
25. 家庭成员都认为使生活水平提高比其他任何事情都重要。	2	1
26. 我们都认为学会新的知识比其他任何事都重要。	2	1
27. 家中没人参加各种体育活动。	2	1
28. 家庭成员在生活上经常帮助周围的老年人和残疾人。	2	1
29. 在我们家里，当需要用某些东西时却常常找不到。	2	1
30. 在我们家吃饭和睡觉的时间都是一成不变的。	2	1
31. 在我们家里有一种和谐一致的气氛。	2	1
32. 家中每一个人都可以诉说自己的困难和烦恼。	2	1
33. 家庭成员之间极少发脾气。	2	1
34. 我们家的每个人的出入是完全自由的。	2	1
35. 我们都相信在任何情况下竞争是好事。	2	1
36. 我们对文化活动不那么感兴趣。	2	1
37. 我们常看电影或体育比赛、外出郊游等。	2	1
38. 我们认为行贿受贿是一种可以接受的现象。	2	1
39. 在我们家很重视做事要准时。	2	1
40. 我们家做任何事都有固定的方式。	2	1
41. 家里有事时很少有人自愿去做。	2	1
42. 家庭成员经常公开地表达相互之间的感情。	2	1
43. 家庭成员之间常互相责备和批评。	2	1
44. 家庭成员做事时很少考虑家里其他人的意见。	2	1

	是	否
1. 我们总是不断反省自己, 强迫自己尽力把事情做得一次比一次好。	2	1
2. 我们很少讨论有关科技知识方面的问题。	2	1
3. 我们家每个人都对 1~2 项娱乐活动特别感兴趣。	2	1
4. 我们认为无论怎么样, 晚辈都应该接受长辈的劝导。	2	1
5. 我们家的人常常改变他们的计划。	2	1
6. 我们家非常强调要遵守固定的生活规律和家规。	2	1
7. 家庭成员都总是衷心地互相支持。	2	1
8. 如果在家里说出对家事的不满, 会有人觉得不舒服。	2	1
9. 家庭成员有时互相打架。	2	1
10. 家庭成员都依赖家人的帮助去解决他们遇到的困难。	2	1
11. 家庭成员不太关心职务升级、学习成绩等问题。	2	1
12. 家中有人玩乐器。	2	1
13. 家庭成员除工作学习外, 不常进行娱乐活动。	2	1
14. 家庭成员都自愿维护公共环境卫生。	2	1
15. 家庭成员认真地保持自己房间的整洁。	2	1
16. 家庭成员夜间可以随意外出, 不必事先与家人商量。	2	1
17. 我们家的集体精神很少。	2	1
18. 我们家里可以公开地谈论家里的经济问题。	2	1
19. 家庭成员的意见产生分歧时, 我们都一直回避它, 以保持和气。	2	1
20. 家庭成员希望家里人独立解决问题。	2	1
21. 我们家里人对于获得成就并不那么积极。	2	1
22. 家庭成员常去图书馆。	2	1
23. 家庭成员有时按个人爱好或兴趣参加娱乐性学习。	2	1
24. 家庭成员都 认为要死守道德教条去办事。	2	1
25. 在我们家每个人的分工是明确的。	2	1
26. 在我们家没有严格的规则来约束我们。	2	1
27. 家庭成员彼此之间都一直合得来。	2	1
28. 家庭成员之间讲话时都很注意避免伤害对方的感情。	2	1
29. 家庭成员常彼此想胜过对方。	2	1
30. 如果家庭成员经常独自活动, 会伤家里其他人的感情。	2	1
31. 先工作后享受是我们家的老习惯。	2	1
32. 在我们家看电视比读书更重要。	2	1
33. 家庭成员常在业余时间参加家庭以外的社交活动。	2	1
34. 我们认为无论怎么样, 离婚是不道德的。	2	1
35. 我们家花钱没有计划。	2	1
36. 我们家的生活规律或家规是不能改变的。	2	1
37. 家庭的每个成员都一直得到充分的关心。	2	1
38. 我们家经常自发地谈论家人很敏感的问题。	2	1
39. 家人有矛盾时, 有时会大声争吵。	2	1
40. 在我们家确实鼓励成员都自由活动。	2	1
41. 家庭成员常常与别人比较, 看谁的学习工作好。	2	1
42. 家庭成员很喜欢音乐、艺术和文学。	2	1
43. 我们娱乐活动的方式是看电视、听广播而不是外出活动。	2	1
44. 我们认为提高家里的生活水平比严守道德标准还要重要。	2	1
45. 我们家饭后必须立即有人去洗碗。	2	1
46. 在家里违反家规者会受到严厉的批评。	2	1

同意書

- 一. 面接中、気分が悪くなったり、面接を中止したくなったりした場合には、ただちに面接を中止することができます。その場合にはそれまでのデータは、質問紙も含め、全て責任をもって廃棄します。
- 二. 面接の記録の音声データが入ったリムーバブル・ディスクは、ディスクに保管し、ディスクを鍵のかかる棚に保管します。文書化した面接記録は、固有名詞を記載せず、データ番号によって管理し、鍵のかかる棚に保管します。データ番号と協力者の氏名との対照表は、研究代表者が責任を持って管理し、鍵のかかった棚に保管します。これらの手続により、プライバシーを保護します。
- 三. この研究面接によって気分が悪くなったり、心理的な損傷を受けたりしたという例は、今までにはありませんが、過去の否定的な記憶を語ることで、そのような否定的な影響が生じる可能性があります。研究協力の最中に、そのような影響がある場合には、面接を中止し、また、面接後しばらくたってから、否定的な影響が出た場合には、研究責任者であり、臨床心理士である神田 久男が責任を持って面接などにより対処します。

ご名前.....

.....年 月 日

关于此次调查的几点说明

感谢您在百忙之中参与调查！下列是关于调查的几点说明：

1. 本次调查是以分析您对您家人的认识为主要目的。
2. 采访面谈将会按照您的意愿进行。如果您在采访面谈中途感觉不舒服或想中止，请随时提出，不要有任何顾虑。
3. 为了收集整理数据，面谈过程将用 IC 录音机进行录音。面谈的录音及记录数据只限于调查者使用，不会给第三者听或看。此外，面谈的录音及记录数据将放在于加密的磁盘中保存并对数据进行加工以排除一切个人信息，确保无法锁定特定的个体，保护您的隐私。
4. 关于本调查如果您用不清楚的地方或有任何疑问，可随时提出来。

再次衷心感谢您对本调查的大力协助！

研究 4 青年期の家族に対する認識と体験プロセスに関する検討

面接調査へのご協力をお願い

本調査は大学生が家族または自分自身についてどう考えているか調べる意図で行うものです。一回の調査はおよそ 1 時間～1 時間半がかかるはずですが、データを多く得る必要がありますため、最低限として 10 回に参加して頂ければ大変ありがたいです。

お厚かましいお願いで恐縮ですが、ご協力をお願い申し上げます。ご興味をお持ちの方は下のところに参加可能な時間とご連絡方法をご記入ください。参加可能な時間は今回すべて決めていたただかなくても構いませんので、今分かる範囲で記入していただければ結構です。なお、この調査は研究目的以外には一切使用せず、個人情報の管理・保護は徹底いたします。ご理解とご協力のほど、よろしく願いいたします。

- お名前 :
- ご連絡方法 :
- ご希望日程 :

1. 月 日 時 分から 時 分まで
2. 月 日 時 分から 時 分まで
3. 月 日 時 分から 時 分まで
4. 月 日 時 分から 時 分まで
5. 月 日 時 分から 時 分まで
6. 月 日 時 分から 時 分まで
7. 月 日 時 分から 時 分まで
8. 月 日 時 分から 時 分まで
9. 月 日 時 分から 時 分まで
10. 月 日 時 分から 時 分まで

現代心理学研究科 臨床心理学専攻後期課程 胡 実 (コウ ジツ)

研究協力の同意書

この度は、調査協力にお申し出頂き、ありがとうございました。

本日はご家族またはご自身について調査するため、毎回約1時間半、全部で10回の面接を行います。それに先立ち、この調査における以下の注意事項をお読みください。

1. 途中で気分が悪くなったり、中止したくなつた場合には、いつでも途中で中止することができますので、遠慮なく申し出てください。
2. 面接での様子はICレコーダーで録音し、音声データと文書データとなります。このデータは調査者と指導教授以外の第三者が聞くこと、或いは見ることはありません。また、データはディスクに保存し、鍵のかかる場所で保管します。
3. 得られたデータは論文として文書で公表します。ただし、個人情報は一切排除し、個人が特定されることのないようにデータを加工します。
4. 分からないことや、疑問に思うことなどがあれば、いつでも質問をお受けします。

以上の内容をご理解頂いた上で、この調査にご協力いただける場合には、以下にご署名お願いいたします。

年 月 日 ()

氏名 _____

ご協力ありがとうございます。

立教大学大学院現代心理学研究科
臨床心理学専攻後期課程
胡 実

关于调查的几点说明

感谢您在百忙之中参与调查！下列是关于调查的几点说明：

1. 调查的目的是通过对您的采访来分析家庭观。
2. 采访共有 10 次。每次的面谈时间虽因人而异，但是大体上在 2 小时以内。
3. 采访面谈将会按照您的意愿进行。如果您在采访面谈中途感觉不舒服或想中止，请随时提出，不要有任何顾虑。
4. 为了收集整理数据，面谈过程将用 IC 录音机进行录音。面谈的录音及记录数据只限于调查者使用，不会给第三者听或看。此外，面谈的录音及记录数据将放在于加密的磁盘中保存并对数据进行加工以排除一切个人信息，确保无法锁定特定的个体，保护您的隐私。
5. 关于本调查如果您用不清楚的地方或有任何疑问，可随时提出来。

再次衷心感谢您对本调查的大力协助！